62-405

文學士　丸井圭次郎述

唐宋文評釋

早稻田大學出版部藏版

唐宋文評釋目次

緒言……一
滕王閣序幷詩……一三
與韓荊州書……一〇〇
憎蒼蠅賦……一三一

（目次終）

唐宋文評釋

文學士　丸井圭治郎　述

緒論

文は說文に文錯畫也とあり。玉篇には無分切音紋章也とあり。爾雅には文者會集衆綵以成錦繡合集衆字以成辭義如文繡然也とあり。易經には物相雜故曰文と云ひ、禮記には五色成文而不亂と云ひ、周禮考工記には畫繢之事青與赤謂之文と云へり。國訓にはアヤ、カザリ、オロツヤ、ミヤビヤカ等といふ。又た章は說文に樂竟爲一章从音从十十數之終也とあり。玉篇には諸良切音彰采也とあり。書經には五服五章哉と云ひ、易經には品物咸章と云ひ、周禮考工記には畫繢之事赤與白謂之章と云ひ、論語には斐然爲章と云へり。國訓にはアヤ、アキラカ、アラハス等といふ。則ち文章とは色彩の華美なることを意味するものにして、古書には多く此の意義に用ゆ。禮記に治其雕鏤文章と云ひ、論語に煥乎其有文章と云へる等はみな此義なり。而して史記儒林傳に文章爾雅訓辭深厚と云ひ、漢書公孫弘列傳贊に文章則司馬遷、相如と云へる

等に至りては則ち今日吾人が普通に使用せる文章の意義を有するものとす。爾雅に合集衆字以成辭義。とあるは實にこの謂にして、吾人が衆多の文字を合集して自己の思想を表示するに當り、其の結構布置の整然たる、其の措辭造語の粲然たる、アヤあり且つアザヤカなること猶ほ文繡の如きを以て則ち之を文章と云へるなり。故に文章は其の用字必らず馴雅ならざるべからず、其の造語必らず端麗ならざるべからず、其の語格必らず的確ならざるべからず、而して其成文の玉を含み金を吐き爛然として章を爲すあるを尙ぶ。韓文公が辭不備。不可以爲成人。辭不足。不可以爲成文。といへるも亦た之をこれ謂へるもののみ。夫れ虎豹の美は其の斑紋に存するものなるに、其毛を去つて之れが斑紋を失はゞ、誰か好んで其の殘骸を賞玩するあらんや。虎豹の鞟（皮の毛を去りたるものを云ふ）は猶ほ犬羊の鞟の如し、半錢を値せざるなり。文章にして錦繡の色彩なくんば人の耳目を惹くに足らざるなり、世の膾炙傳唱を望むべからざるなり、また何ぞ之を天下後世に傳へて、人を導き世を益することを得んや。

然れども用字造語は必竟人の衣冠のみ。その衣冠如何に秀麗端莊なりとも之を被着すべき體格具備せざれば何の爲す所あらんや。體格とは何ぞや。氣これなり、想これなり。蓋し其の着想平凡にして一氣貫通の實なくんば如何に麗句綺語を

排置臚列するとも、終に是れ街頭の露店に玉石同架し冠履相雜るの類に過ぎずして、其の構想の不秩序、其の行文の不用意は全く文章をして些の生氣なく活勢なきものたらしめ、而して讀者をして恰かも臘を嚙むが如く徒らに倦厭の情を起さしむるに至るべきのみ。彼の沐猴の冠するものを見よ、其の衣冠にして愈、端麗なれば愈、以て其の滑稽を增すに過ぎざらん、若し或は之を指して卿となし大夫となすものあらば、其人愚にあらざれば則ち狂なり。裴度が李翺に寄するの書に曰く文之異者。在氣格之高下。思致之淺深。不在磔裂章句。隳廢聲韻也。と。又た杜牧曰く凡爲文。以意爲主。以氣爲輔。以詞采章句爲之兵衛。と至言といふべし。

孔子曰く辭達而已矣と。蓋し言は其意を他に通ずることを得ば則ち足れり。漫に文飾を加へて言說することを要せずとの意なり。是を以て世の文に拙なるもの往々にして口を孔子の斯語に藉りて曰く、文章の要は達意にあるのみ、何ぞ其他を問ふを須ゐんと。然れども是れ大なる謬見なり。蓋し孔子は春秋辭令の繁縟を厭ふて此語をなしたるなり。また惟れ時弊を救はんが爲めの危言のみ。孔子豈に絕對的に文飾を斥くるものならんや。孔子が畢生從事せし所は仁と禮とにありて而して禮なるものは人の行を文る所以のものたるを知らば、孔子の文を尙びたること

推して知るべきのみ。孔子が他の場合に於て言之無文。行而不遠。（行ふことを得ると雖ども遠きに及ぶこと能はずとの意なり）と云ひ、又た質勝文則野。文勝質則史。文質彬々。然後君子。と云ひたるを對照せば、其の眞意の存する所を察知すること決して難きにあらざるなり。思ふに、彼の文章を頌して經國の大業、不朽の盛事と曰へるは聊か誇張の嫌なきにあらざれども、文章は末枝のみと云ふて之を斥け、或は文章は大道に關せずとて之を輕んずるが如きは、抑も迂愚の僻見たるを免れず。文章のこと決して忽諸に附すべからざるなり。

余は茲に唐宋文の評釋を試みんとするに方り、先づ其の變遷に就て少しく語る所あらんと欲す。支那上古に當り五經の書あり。詩は周代各地に於ける歌謠にして、風、雅、頌、賦、比、興（キヤウ）の六義あり。書は唐虞三代に於ける史臣の筆に成りて、典、謨、訓、誥、誓、命の六體あり。易は幽玄の理を述べ、卜筮の法を說き。禮は周代現行の禮儀、威儀を載せて、周禮、儀禮、禮記の三書あり。春秋は魯の歷史にして孔子の筆削に係る。是等の書は其の年所を經るの久しき、度、革命の變亂に遭遇して、其の佚脫竄入殊に甚しく、爲めに其文純駁一ならず、今に於て頗る之れが正僞を甄（ケン）別し難きのものありと雖ども、要するに其の筆意高簡勁健にして古風淳樸の氣を帶ぶるを見るなり。春秋に左氏、穀梁、公羊の三傳あり。就中左氏傳は其文の簡勁にして其辭の崢嶸なるを以て、大に後人の愛讀する所となれり。戰國の際に當りては所謂諸子百家輩出し、各、戶を設け門を分ち、言を立てゝ以て文を爲れり。則ち管夷吾は覇略を以て文を爲り、老聃は要を乘り本を執り謙を持し卑に處るを以て文を爲り、列禦寇は黃老の清淨無爲を以て、墨翟は儉を貴び兼愛するを以て、楊朱は自愛耽樂を以て、公孫龍は堅白名實を以て、莊周は天地の統を通じ萬物の性を序し生死の變を達するを以て、愼到、申不害、韓非は刑名の學を以て、尹文は黃老刑名を合するを以て、鬼谷子は捭闔を以て、蘇秦、張儀は縱橫の辯說を以て、孫武、吳起は兵形、軍勢を以て、孟軻、荀卿は先聖の學を明にするを以て文を爲り、凡そ此くの若き者の殆んど遽かに數ふべからざるなり。然るに是等の人士が主とする所は各自の思想を發表するにありて、後世の所謂美文なるものを爲らんとせるにあらず。故に錦心繡腸、天地の美を歌ひ、山高水長の秀色を描き、花晨月夕の清景を叙するの文鮮きも、怪舌詭辯、新說を樹て異論を唱へ、或は背世違俗の言を爲し或は忼壯激詭の辭を吐き、庸俗を聳動し一世を凌厲せんとするもの比々皆然り。從て其文に綺巧剪綵の趣なくして放膽雄渾、跌宕豪逸の氣、紙面に橫溢せるを見るなり。但、此際一の遺るべからざるものあり、楚辭即ち是なり。楚人屈原は高潔の意氣、熾盛の情念、錦繡の詩才を有し、自ら其の敗俗亂倫の世に容れられざるを歎じ、忡々の憂心

悱々の慾思を草木禽獸風雲山川に託して離騷其他の楚辭諸篇を作り、古詩より一轉して竟に一種の賦體の基を開きたり。

秦火の禍は今之を言はず。項羽攻めて咸陽を一炬に付するや、支那の典籍こゝに全く滅盡せり。漢興りて後、殘經遺冊を探求し、文、景、武帝相繼で學術を興隆せしより、文華再び發き、散文韻文の作者として陸賈、賈誼、董仲舒、劉安（淮南子）司馬遷、司馬相如、枚乘、劉向、楊雄、班固、馬融、鄭玄、王充等の諸士輩出せり。其文、西漢には猶ほ古文の遺鉢を承繼する所あり、莊重にして簡勁、雄大にして質實の風あれども、東漢には漸く典麗にして浮華に流れ、降て蜀漢に至りては文氣全く綏弱頽廢して、惟り諸葛孔明が出師表の嶄然一頭角を抽つるの外、また一の見るに足るものなし。司馬遷は西漢の人にして史記を撰述せり。學識富贍、才思縱橫、筆力雄健にして敍事神に入る、文字に一種の風韻を帶び奇靈の趣味紙上に活躍す。啻に雄を漢代に稱するのみにあらず、六朝唐宋より今日に至るまで終に一人の其壘を摩するものなし。偉といはざるべけんや。司馬相如よく賦を作る。才華馳騁し藻葩絢爛、光彩陸離、讀者をして應接に遑あらざらしむるものあり。漢代に於ける韻文を云ふときは則ち相如を推す。余は今茲に遷及び相如の文を評隲するの機を得ざるを憾とす。

漢の後、魏、晉、南北朝を經て隋、唐に至る。此間は所謂六朝（呉、晉、宋、齊、梁、陳）にして實に文氣委靡の期に屬す。蓋し魏晉の際に當りては天下極めて多事にして、外には兵馬頻りに動き、內には廷臣名士徒らに排擠構陷を事とし、羅織盛んに行はれ、無辜寃枉の徒、踵を接し、苟も才學聲望、小人の娟嫉を買ふに足るものは、常に生を聊せざるの恐なきにあらざりしが、一方に於て魏の武帝文帝、父子相踵で詩賦を好尙し、その風靡する所漸く詩歌唱酬の流行を來せしにより、是より學者文人多くは講學に怠り議論を避け、また侃々の議を立て、大文章を草し大意見を述べて、却て奇禍を速くの愚を爲さず。甚しきに至りては口を佛老の虛無幽玄なる理趣に藉りて、宏達を粧ひ無慾を衒ひ、縱酒沈湎、談笑酬を事とすること彼の淸談の徒、竹林七賢の如きものを生ずるに至れり。去れば此の時代に於ける文章家としては晉の葛洪、陳壽、陶潛（淵明）宋の謝靈運、齊の孔稚圭等數へ來りて漸く十指を屈するに及ばず。蘇東坡が「兩晉に文章なし、唯陶淵明の歸去來一篇あるのみ」と云ひたるも、蓋し過酷の評言にあらざるなり。余は今、唐文を見るに先ち、此の時代の文章に於て盛んに流行したる、四六駢儷體に就て一言なかるべからず。

駢體の文は其の由て來る所甚た古矣。秦の李斯の嶧山碑文、逐客上書等既に其の

萌芽を見るべし。漢に入りて鄒陽の文、司馬相如、枚乘の賦、また駢體を雜ふ。班固の後漢書も亦た其の敍事文には對句を用ひざれども其の論文に於ては往々對句駢麗の跡あるを見るなり。其後に蔡邕崔瑗の二人あり、世に蔡崔と併稱せられ、亦好んで駢體句を用ゐたり。其の文章の如何に當世の人士に好尙せられたるかは、當時の碑文の多く蔡邕の手に成り、而して終に後世の碑文體の基を定むるに至りたるを見て推知すべきなり。然れども蔡崔の文章は其の氣韻遠く班固に及ばず、而して班固の文また左氏馬遷の雄渾勁健と日を同ふして論ずべからず。但し後漢の文、駢體句を雜ふるもの漸く多きを致せりと雖も之を魏晉以下所謂六朝時代のものに比すれば、尙ほ一片稜骨の存するあり、古意漸く失すと雖も適麗頗る誦すべきものあり、其文は以て未だ遽に其質を傷るに至らざるに似たり。

夫れ古文は達意を尙ぶ。敢て其句々の字數を定めず。平仄韻章に於ても何等の規法なし。唯その構想の着實整備にして旨意の通暢明快なることを求むるが故に、其文や首尾一貫し生氣洋溢す。たとひ或は外に彩華絢爛の觀なきも內に含蓄醞藉の妙あり。以て休明を鼓吹し千古に馳騁するに足るもの多し。然るに駢儷文は美辭を主とし、各句必らず對句法を用ゐて隔句對或は二句對となし、其の字數を四字六字に定む。或は變化して三七、五七、六八等の字數を用ふることあれども四六を以て正調となすが故に又た之を四六體と云ふ。蓋し漢文に於ける四六は其の語調を流麗にする所以にして、猶ほ我が國文に於ける五七調の如きものたるなり。斯く駢體文は徒らに絺章繪句を是れ事とするが故に其の色彩は燦然として目を眩するに足るも、其句法局促し筆路晦澁し、却て吾人をして脂粉の濃厚に嘔吐せしむるものあり。夫れ長妓にして善く歌ひ善く舞ふものは以て士人の愛を買ふべし、醜女の胡音するもの漫に粉黛を凝し錦繡を飾るも豈に才子の憐を受くるに足らんや。然れども時勢の趨向は洵に驚くべきものあり。彼の笑ふべき辮髮と纏足とが今の淸國に行はるゝが如く、生氣なき駢驪文は六朝（呉晉宋齊梁陳）を風靡し、終に凡そ駢體を用ゐざるものは之を文と呼はざるに至れり。（六朝の際には對偶を用ひ押韻せるものを文と云ひ、其然らざるものを筆と稱せり、）是を以て唐初、文敎の將に復活せんとするの時に當り四傑を以て目せられたる王楊盧駱（王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王）の徒も猶ほ駢體文の跡を追ふことを免れざりしが、燕許（燕國公張說、許國公蘇頲）出づるに及んで大に浮華を黜け馴雅を崇び、文氣漸く雄渾の域に向はんとするに至れり。然れども唐代に於て初めて古文の復興を唱道せしものは陳子昂を推さゞるを得ず。子昂は武后の時代の人なり。また四六文を作らざるにあらざれども、時文の逶迤頽靡を慨歎し

率先して古文を作れり。其後元結、獨孤及、梁肅等之に繼で古文を作り。已にして韓愈（退之）出でゝ專ら古文を稱道し、自ら三代（夏殷周）の書にあらざれば讀まず三代の文にあらざれば作らずと呼號し、銳意奮鬪終に時文を粉碎し、能く八代（東漢、魏、晉、宋、齊、梁、陳、隋）委靡の文弊を救ふて、古文復活の大業を集大成せり。韓愈と殆ど時を同ふして生れ、古文を以て之と並轡馳騁せしものを柳宗元となす。世この二人を併稱して韓柳と云ふ。此他唐朝に於て古文に從事せしもの、皇甫湜、李翶、孫樵の徒ありと雖ども皆な遠く韓柳に及ばず。

夫れ文學は時勢の推移に伴ふて變遷す。唐滅びて五季の亂あり、名敎全く地に墜ち、禮樂壞廢し、盛唐の文學また其の痕跡を留めざるに至れり。是を以て宋、天下を統一してより已に百年に垂んとするも、尙ほ文章の體裁は依然として五季の餘習に仍り、駢偶を鏤刻し洪溷振はず。蘇舜欽、柳開、穆脩の徒相繼でこの弊習を轉移せんとしたるも其力未だ逮ばざるものありしが、尹洙出でゝ力を古文の復興に致し、其績頗る見るべきものあり。時に歐陽脩あり、尹洙に從て遊び、古文を研鑽して其の不世出の天才を發揮し、終に能く宋の文學を興隆して唐文に接踵比隆せしめたり。歐陽脩に次で蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石等あり。皆な一代の文豪にして重を宋文になすものなり。軾と轍とは兄弟にして洵の子なり、世に之を三蘇と云ふ。脩以下の六家に唐の韓柳を加へて之を唐宋八大家と云ふ。而して歐蘇等は能く韓柳の遺緖を嗣ぎ、各、其性情に從ふて自家特得の長技を發揮し、高古典雅の文、雄渾勁健の筆、侃々諤々の議、以て百年の醉夢を破り、後進を誘掖指導せしかば、一時士大夫みな翕然として之に應じて其門に趨り、文運頓に隆盛を極めたり。是を以て宋は常に朝臣朋黨の禍あり、胡虜侵略の患ありて內外頗る多事なるに困憊せしに拘はらず、濟々たる詞客文士の他、烈士にして悲壯淋漓の筆に遺せる李綱、文天祥の如きものあり、儒者にして沈着達意の文に富む朱熹の如きものあり。支那文學史上宋文は唐詩と相並んで長へに其の紙面を絢飾せり。

余は是より此に揭出せる唐宋文傑の佳作を撰摘して、聊か之が評釋を試みんとす。幸に諸家の錦心繡腸を讀者の腦裡に髣髴せしむることを得ば吾事足矣。

滕王閣序并詩

王　勃

王勃。姓は王、名は勃、字は子安と云ふ。唐の初の比の人であるが、是より先き隋朝の時代に絳州の龍門といふ地に王通といふ學者があつた。唐の太宗が天下の大亂を戡定して唐室三百年の治世の基を樹てた時に當り、之を輔佐して大功のあつた房玄齡等は王通の門弟子であつたので、通は死んだ後に文中子と謚をされた。王勃は通の孫である。六歳の比よりして善く文章を作つたが、九歳の時に班固の前漢書を繙き、其中にある顏師古の註解を讀みて其の誤謬の點を指摘批評したとの事である。元來支那の古書は註解又註解で何の書にも註解者が多くあるのであるが、古今幾千萬の註解書の内で春秋左氏傳に於ける杜預の註漢書に於ける顏師古の註、及び莊子に於ける郭象の註を以て最も上乘なる者と認め、之を三註と稱して大に尊重して居るのである。處が王勃は弱齢を以て斯る大著書の誤を正したのであるから頗る當時の學者を驚かしたのである。麟德の初年に朝廷で對策して朝散郎の官を授けられたが、其時まだ丁年に達せなかつた。乾封年中に沛王と云ふ諸侯王が勃の才を傳聞して召抱へられたが、當時諸王族の間に雞を闘はせ

て遊ぶとが流行した。勃は之を見て雞の相蹴り相搏つ有樣を文章に作つた。處が其文が上手に出來たので次第に傳寫して大に世に擴がり流行した。時の天子の高宗皇帝は之を聞かれて大に怒られて申さるゝには、雞の蹴合勝負のとを文に綴りて世に流布するのは是れ諸侯王の間に遺恨を抱かせ確執を生ぜしむるの基である、甚だ不都合な奴じやとて、勃の官位を褫奪された。勃の父は名を福時と云ふて當時雍州の司功參軍の官を勤めて居たが勃の事に坐せられて遠く交趾（今の佛領印度支那）の縣令に貶謫せられた。勃は大に之を歎き我が爲めに累を父に及ぼすに至つたは誠に濟まぬとであるとて終に自ら父の許に赴きて定省隨侍の孝養を盡して、不孝の罪を謝せんが爲めに、交趾に向て出發したが、其の途中で滕王閣に立寄り此の文章を作つたのである。其後海を渡るとき不幸にして水に溺れて死んだ。時に年二十九。

王勃の筆は實に天才である。勃が文を草せんとする時は曾て沈思默考して句を練り語を鍛へると云ふことをせぬ。先づ墨を澤山に磨つてから酒を十分に飮み布團を引被りて寢て仕舞ふ。その寤めた時に直に筆を援てスラ〳〵と書き下して一字も書き易へぬと云ふので、時人は之を腹藁と云ふたとのとである。勃が

楊、盧、駱、と共に唐初の四傑と云はれたことは已に前に緒論中に述べた所であるが、四人の中で勃の文才が最も優れて居つた。楊炯は氣を負ぶの人であつたから世人が王楊盧駱と云ふのを聞て「吾は盧の前にあるを愧ぢ、王の後に居るを耻づ」と憤慨したが、終に勃を凌駕することが出來なかつた。勃の聲譽は斯く盛であつたから其文を請ふもの多く、爲めに勃は發澤な生活をして居たので、人は「勃は心織して衣、筆耕して食す」と評判をしたとのことである。

滕王閣。唐の高祖に二十二人の皇子があつて、其の末子の元嬰と云ふ人が高宗の顯慶四年に洪州の刺史（總督の如き官）となつて其府の城西章江門外に立派なる樓閣を建立せられたが、元嬰は滕王に封ぜられたから此閣を滕王閣と呼ぶことになつたのである。其後元嬰は薨去せられたが、高宗の咸亨二年に閻伯嶼といふ人が洪州の刺史に任ぜられて此地に來り、滕王閣を修理し、九月九日重陽の嘉節を期して大に賓客を此閣上に會して酒宴を開いた。さて閻伯嶼には吳子章と云ふ婿があつたが、先づ婿に豫め此閣の序文を作り置くやう命じた。これは元嬰が立派なる高閣を斯る絕勝の地に建てゝ誠に天下の奇勝たるに拘はらず、今尙之を賞したる詩文が無いから、其の缺を補ひ且つは當日の盛會の有樣をも述べて之を後世に傳へ、併

せて其婿の學才を世に誇示せんとの心組であつたのである。其處で閻公は宴席に於て紙筆を出して徧く賓客に向て序文を作つて呉れと請求した。處が主人の威勢が頗る盛大であるし又た座中に立派なる客も多いので、お互に遠慮やら何かで筆を執ろうとする人がなかつた。此處で座中の人が皆な辭讓したなれば、それこそ全く閻公の注文通りになつたので、先づ閻公は「折角皆樣に懇望をしても誰も筆を執て下されぬ故、是非に及ばず不敏ながら拙者の婿に作らせるとに致しませう」と云ふと、呉子章が出て、兼て作つて置いた文を席上で即座に作る樣な風にして書き下して之を滿座に披露する、と云ふ順序に運ぶ筈であつたが、お氣の毒なことには當事と何やらで閻公の計　は向ふから外れて來た。其の次第は丁度王勃が交趾の父の所へ行かんとて途に此地を過ぎり、此會に列席したのであるが最も年少（或は十三歲とか或は十四歲とか或は二十九歲とか數說あるが余は二十九歲と云ふ說を正しと思ふ。）であるので席末に坐つて居つた。處が客に請ふものが順次賓客に序文を請ふて辭退せられ廻り廻りて終に王勃の前へ來りて紙筆を差出すと、勃は少しも遠慮せず直ちに筆を援りて書き初めた。閻公は之を見て驚いた、イヤ折角の計畫が外れるから大に怒つた、能く見ると靑二才であるから、怪しからん無禮者であるとて益、怒つた。そこで小吏に命じて「彼奴は何事を書くか其の書く所を見て來い」と言ひ渡した。吏は勃が一句を書くごとに閻公の許へ注進をしたが、一句は一句より奇警に、奇語妙句續々と出で來り殆んど應接に遑なき有樣で、閻公も聊か憤怒の鼻先きを折られた氣味があつたが、落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色と云ふ句を見るに及んで覺えず手を撫て、天才、奇才、と感歎し。斯る才筆を以て此會を敍せらるゝは余の幸福なりとて、改めて自ら王勃に向て全篇を完成せんことを請ひ、遂に斯篇が出來上つたのである。

序。序は文章の一體である。序は敘と同じことゝである。春秋左氏傳の註疏に爾雅釋詁云、敍緖也。然則擧其綱要、若繭之抽緖。孔子爲書作序、爲易作序卦、子夏爲詩作序。とある如く、序は本と書中の綱領大要を明かにするが爲めに一部の書物に添へたものである。後には事の次第を順序に記述するに用ゐて詩歌などにも序文を加へ。又た單に送別序など云ふものを書くことゝなつた。文章歐冶に云ふ序以序事貫直達。と。

弁詩。序文が已に出來上つてからして詩を作り、其詩をも合せて記載するから弁詩と書くのである。これが若し詩を先に作りて、然る後に序文を添加すると云ふ場合には滕王閣詩弁序と書くのである。

既に述べたる通り王勃は初唐の四傑の中でも尤も文章の上手なる人であつた。而して此文は勃の文章の内で有名なもので、巧に景物を體狀して珍詞綉句に富み、實に天下の珍品である。故に余は先づ此文を出したのであるが、併し又た已に緒論に於て略說したる如く初唐には駢驪の文が流行したのであるから、唐文を講ぜんとならば其の古文に入るに先ち、四六駢體の文を見て置く方が宜しいので、其處で第一に此文を講ずることにしたのである。

南昌故郡。洪都新府。

先づ滕王閣の所在より說き起す。

今は此地の變遷を尋ぬるに上古、戰國時代には楚に屬し、秦には九江郡と云ふたが漢に至て豫章郡を置き（春秋時代に豫章と云へる地あれども、そは揚子江の北にありて、此處に謂ふ所の豫章とは別の地なり）南昌縣と云ふた。それから六朝の間に於て或は江州とか或は豫州とか云ふたこともあつたが、要するに豫章或は南昌と云ふのが此地の通り名であつた。隋の世に洪崖と云へる仙人が此地に住んで居たとて地名を洪州と改めた。唐で王勃の時分には矢張り洪州と云ふて居つた。其後又た南昌と云ひ、宋には隆興府と云ひ元には龍興路と云ひ明に至て南昌府と云ひ今日も猶ほ南昌府と云ふて江西省に屬して居るのである。

故は舊と云ふこと。フルシ或はモトノと訓む。南昌故郡とは、古に曾て南昌郡と呼びたる地と云ふこと〇洪都新府とは、此頃は洪州府と云ふて居る地と云ふこと〇洪州を洪都と書きたるは文章の文である。

此の二句が所謂對句なるものである。第一句に於て先づ南昌と地名を擧げたから第二句に於ても洪都と地名を出す。第一句に於て故と云へば第二句に於て新と云ふ。第一句に於て郡と地稱を書けば第二句に於ても府と地稱を書く。斯くの如く其の數字を同じくするは、勿論、詞格語調を揃へて始から終まで押し通すのが駢體文である。

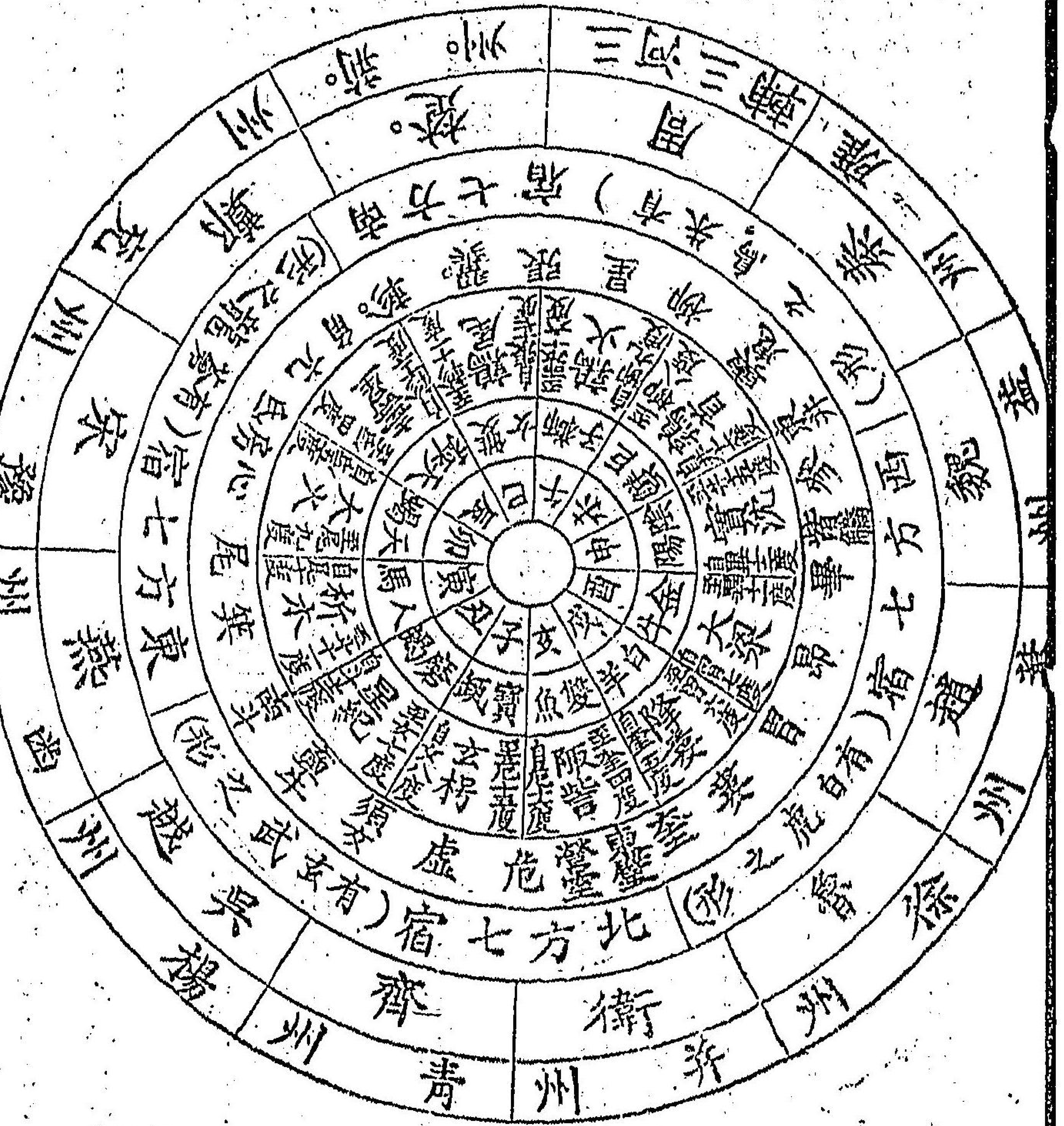
茲に序を以て滕王閣の後日のことのお話をして置かう。閻公の會に王勃が序を作つた後に王緒が賦を作り王仲舒が記を作つた。世に之を三王と云ふ。韓退之も之れが記を作つた。宋元の時に此閣の修復をしたが、明の太祖は此處に行幸して閣上で宴會を催された。景泰年中（明の代宗の時）に重ねて大修繕をなし西江第一樓と云ふ額を掲げたが、成化中（明の憲宗の世）に其の屋根を修補した時に復た滕王閣と改め

た。其後火事に逢ふて清の康熙年中に又た新に建てられた。

星分翼軫 地接衡廬

翼軫は共に星宿の名。支那は今を距ること凡そ四千年以前に於て早く已に天文學が開けて居つた。後世に至て星の運行を以て人事に附會し種々の臆説を逞ふしたから其の天文學も一種奇妙な學問になつて仕舞つたが併し堯舜の時代に於て日月星辰の運行を推歩して暦を作りたことが書經に載つて居るがその記事の事實なることは今日に於て之を逆算して證據立て得らるゝとのことである。支那は兎も角支那では天を東西南北の四方に分ちて之に七星づゝを配り二十八星宿を定めるのであるが其の星の光線の直に下に向て映射する所と思はるゝ土地を推定して上天の二十八宿へそれ〴〵に引き合せ之を分野と云ふのである。この二十八宿や分野のことを一々説明すると大に紙面を費やすことになるから便宜の爲め次に圖を以て示すことにした。即ち圖によれば翼軫の二星は南方七宿の中に在りて其の照らす所は荊楚の邊である。そして今の江西省は古に荊とか楚とか云はれた土地であるのである。されば星分翼軫とは星の分野を以て料る

第一圖。子、丑、寅等ハ十二支ナリ。
第二圖。寶瓶磨蝎等ハ天ノ十二宮ナリ。
第三圖。鶉尾、大火等ハ星ノ十二次ナリ。
第四圖。角、亢、氐等ハ二十八宿ナリ。
第五圖。蒼龍、玄武、白虎、朱鳥ヲ四象トイフ。
第六圖及第七圖。分野トシテ二十八星宿ニ地名ヲ配記シタルモノナリ。



ときは滕王閣の建てる所は丁度翼軫二星の方に當つて居ると云ふことである。

さて又た此文章の説明には直接に關係のないことであるが、分野と云ふことは謬説であつて古人も異議を挾むだものがある。參考の爲め其の一二を示して置かう。

世以二十八宿配十二州分野。最爲疎誕。中間僅以畢昴二星管異域諸國。殊不知十二州之内。東西南北不過綿亘一二萬里。外國動是數萬里之外。不知幾中國之大。若以理言之。中國僅可配斗女二星而已。(瑯琊代醉編)

天無私覆。地無私載。今分野。以二十八宿皆在中國。僅以畢昴二星管四夷異域。計中國之地。僅十之一。而星文獨占十之九也。偏僻甚矣。(五雜俎)

勿論、天界の星體が地球上の山川郡縣と固定したる關係のあろう筈がないのである。殊に地球の表面は殆んど支那の領内に限られたる如くに分類したる所などは殆んど滑稽の沙汰である。併し此の分野の説は遠く漢の初から行はれて居て、詩にも文にも屢見はれて居るのであるから、支那文學を研究するものは是非とも其の大體は知て居なければならぬのである。

【釋義】衡廬。衡山と廬山とのこと○堯舜時代よりして四岳といふ名稱がある。東方の泰山、西方の華山、南方の衡山、北方の恒山、この四ツの山を云ふのである。或は又た此の四岳へ中央の嵩山を加へて五岳とも云ふのである。そして衡山は洪州の西南に在る大なる山である○廬山は洪州の北境にある山である。

【通釋】滕王閣のある洪州の土地は衡山や廬山に近接して居る。

襟三江而帶五湖。控蠻荊而引甌越。

【釋義】三江。荊州の荊江、蘇州の松江、杭州の浙江を三江と云ふ○五湖。蘇州の大湖、饒州の鄱陽湖、岳州の青草湖、潤州の丹陽湖、鄂州の洞庭湖を五湖と云ふ。

【通釋】滕王閣上より見渡せば三江が洪州の山ノ手より沿ふて流るゝことは恰かも衣に襟のあるが如くであり、又た五湖が洪州の中程の邊に並んで居ることは丁度人の腰に帶が纏へる如くである。

【釋義】蠻荊。荊は楚のことである。楚は南陬の國であつて其の文化は齊魯等の諸國より餘程後れて居た。史記にも楚人沐猴而冠と書いてある。蓋し楚は其の土地も蠻夷に近くあつて風俗も亦た甚だ野鄙であつた。蠻は南方の夷族の總稱である。古から東夷、北狄、西戎、南蠻と謂はれて居る。蠻荊とは南の端の國々と

いふ意である○控は引と同じてある。ひきよせることてある○甌越。越に東越と南越との二ある。東越は今の福建浙江兩省附近て、南越は今の廣東廣西兩省より遠く交趾の邊までを云ふ。又た三越と云ふ語があるが、三越とは呉越、閩越、南越のことて、此の場合には浙江省附近を呉越と云ひ、福建省附近を閩越と云ふのである。甌に東甌西甌等の名があるが、東甌は福建省附近のことて、西甌は交趾附近のことてある。而して甌越は廣東附近のことてあるが又た南方の諸越と云ふ意味に用ゐらるゝこともある。史記には翦髮（戰國策には被髮とあり）文身錯臂左衽甌越之民也とある。

通解　洪州は荊蠻や甌越に通ずる街道てあつて蠻越の人は此處に引き寄せられて滕王閣の下を往來するものが多いと云ふことてある○控蠻荊も引甌越も其の意味は同じことてある○更に此の兩句の意を考ふれば、滕王閣に上れば近くは三江五湖を眺め得べく、遠くは荊蠻や甌越の邊までもツイ手近き處にある樣に思はれると云ふことになるのてある。

物華天寶。龍光射牛斗之墟。人傑地靈。徐孺下陳蕃之榻。

釋義　物華天寶。物は此處では劍のことてある。華ははなやか即ち立派なこと。天寶は人の作つた寶物てなく、天然の寶、即ち先天的に貴きもの。物華天寶とは天然に貴き立派なるものと云ふこと○龍光。龍泉（又た龍淵とも云ふ）と云ふ名劍の光彩と云ふこと○牛斗。二十八宿の中の牽牛と、南斗のこと、詳しくは前頁の圖解を見よ○墟。間のこと。

此句の意味を解せんには龍泉と云ふ劍の來歷を話さないと分らぬから、次に簡單に其の故事を述べよう。三國の末に當て晉の武帝が既に蜀を滅ぼし、又た魏の禪を受けたけれども、まだ呉が江南に威張て居たから、兵を遣はして之を討伐した。處が斗牛の二星の間に當りて紫色の氣が立ち昇つたから晉の軍隊に於ては種々の評判が立つて進軍に躊躇したのであつたが、張華と云ふものが委細構はず進撃して終に呉を滅ぼした。然るに天の紫氣は矢張り立ち昇つて居たから、張華は雷煥と云ふ天文術に長じたる人を招きて觀察させたるに、雷煥は色々と考へた後、是は豫章郡の豐城縣（洪州の附近也）に名劍が埋れて居て其の精氣が上りて天に現はれたるのであると答へた。其處で張華は雷煥に、速に其劍を堀り出して持參せよと命令して、雷煥を豐城の知事にした。其後雷煥が牢舍の附近を掘りて石函を見付出し、

それを開けて見ると二ッの劒があつて其一には龍泉、又一には太阿と銘が彫つてあつた。そして其晩からして天上の紫氣が見えなくなつた。其時に雷煥が其一を自分に取り、其一を張華の許に贈つたが、其後いろ〳〵の不思議なことがあつて、二劒ともに失せて仕舞ましたと云ふことであるが、其樣なことは本文の說明に必要がないから省略する。

通釋　天より與へられたる不思議に貴き寶て、立派なる器物たる龍泉と云ふ劒が久しき年月の間、此の洪州の地に埋沒してあつたが、其の光が牽牛南斗の二星の間に立ち昇つて終に世に現はれ出たと云ふことである。これは洪州の土地の古よりして歷史的に勝地靈域であると云ふことを述べたものである。

釋義　傑。淮南子（漢の淮南王安と云ふ人の著書也）に知過萬人者。謂之英。千人者。謂之俊。百人者。謂之豪。十人者。謂之傑。とあるのを見れば人傑と呼ばるゝものは餘りエラクなき人物の如くに思はるゝなれど、一般に傑とは智勇才德の衆人に秀絕したるものを意味するのである。○徐孺。後漢の人、名を穉と云ひ、字を孺子と云ふた。洪州に生れ家は貧乏であつたけれども常に自ら耕稼して衣食し、決して他人のものを受けなかつた。性、恭儉禮讓の德に富み、人皆之に推服したそうである。○陳蕃。字は仲擧と云ふた。年十五の時に其の父の友薛勤と云ふ人が、蕃の常に一室に居つて其室や庭を掃除せなつかつたのを見て「汝何ぞ室屋を灑掃して以て賓客を待たざるや」と云はれたるに、蕃は答へて「大丈夫の世に處するや當に天下を掃除すべし、安んぞ一室を事とせんや」と云ふた。蕃は後に豫章郡（洪州）の大守となつたが、餘計に賓客に接しなかつた。然るに徐穉は功名富貴を欲せずして野に隱れて居たが、蕃は其德を慕ひ之を召抱へんとした。穉は之に應ぜなかつたけれども時々蕃を訪問した。蕃は穉の來るを喜び之を厚遇して、特別に一榻を作りて穉に腰をかけさせ、穉が去れば直に之を上に懸けて其榻へは他人を座せしめなんだとの事である。○榻。狹くして長く且つ足の短かき牀（こしかけ）のこと。我邦では普通に此字をトンと讀みて、麥酒の樽の如き形の陶器製のもので庭園の中へ据へ附けて腰掛け臺とせるものを指して云ふて居るが、それとは違ふ樣である。

通解　その昔洪州の靈地で生れた徐孺子は時の大守の陳蕃に尊重せられ、蕃は特に孺子の爲めに一榻を作り、平常に之を吊懸け置いて、孺子が訪問したる時にのみ其榻を下して座せしめた。洪州は此の如き英傑を多く輩出したる靈地である。此の二句に於て物華天寶と人傑地靈とを對偶にしたが元來支那では天地人を三

才と云ふて、此の三才で宇宙間の萬象を代表せしめて居る。處が今、此處で文章上、三ッでは收まらぬ。どうしても四ッなければ對偶にならぬ。其處で勃は物と云ふ字を用ひた。これが王勃の筆の靈妙なるところである。物の字によりて三才の意義も害せられず、更に宇宙間萬象を網羅したことになつて居る。四六文でも個樣に巧妙に文字の遣ひわけが出來れば其の華美なる所は所謂錦上に花を添へた樣なものである。併し一の長き文章を此の文體で押し通すとなると中々さうは行かぬのである。如何に立派なる奇句妙語が澤山に並べられてあつても、丁度枯木へ造花をコテ〳〵と綴付けた樣なもので、其の生氣の拔けて居るのに愛想を盡されて仕舞ふ樣なことになるのである。

雄州霧列。俊彩星馳。

[解義] 雄州　字彙に草之精秀者爲英。鳥之將群者爲雄。張良是英。韓信是雄。とあるが、成る程、英の字は草冠に从ひ、雄は隹(古鳥)に從ひたる字である。必竟雄は元氣拔群なるものを云ふのである。雄州とは盛なる國、即ち人口も多く物產も豐富に繁昌なる國と云ふ事。序に云ふて置くが支那には雄州と云ふ國があるけれども此處では其の意味では通せぬのである。○霧列。霧、雲、星等の字は數多きことの形容詞として使用せらるゝ。霧列とは霧の如くに澤山に並びつらなると云ふこと。○俊彩。俊はすぐれたる人のこと、前の人傑の條を參照すべし。彩はあや、かざりの奇麗なること。俊彩は人のすぐれたるやうすを形容したる詞。○星馳。星は前にも云へる如く數多きことの意。星馳は澤山の星の天上に運行するが如くに人が通行すると云ふこと。

[通解] 霧の立籠るが如くにミッシリと、繁昌なる州郡が洪州の周圍に連なり。又た天上に澤山の星が運行するが如くに、才能の俊秀なる人々が滕王閣に集まり來ると云ふこと。

臺隍枕夷夏之交。賓主盡東南之美。

[釋義] 臺。土を四方に積み上げて高きところを云ふ。此の處では洪州城で滕王閣の立つてる所なり。○隍。ホリと訓す。城外の堀の水あるを池と云ひ、水なきを隍と云ふて、隍は虛堀のことである。○夷。エビスと訓す。前に蠻荊の條に說いた通り東方諸國を總稱して東夷と云ふたのであるが、また支那人は自國を夏

と云ふに對して一般に諸外國を指して夷と云ふのである。夷字は元來東方の人は善く弓を射ると云ふので大字と弓字とを合せたものである。大字を縦に引き伸ばして弓字を其間へ割込むと夷字になるのである。夸と書いても夷字と同じ字である。○夏。支那人は古より自國のことを夏と稱して居る。夏は大と云ふ意である。初め禹が舜の禪を受けて王となるや國號を立てゝ夏と云ふたが、其の國號が四方に擴がつたから、後に禹の國(夏)が滅びて殷國が起り殷が滅びて周が起りても猶ほ時々夏と云ふ字を用ひたので、終に夏と云ふ字が支那國を意味することになつたのである。一説に夏は陽氣が盛で萬物を成長せしむる時節であるから其國の富强であることを見はして夏と云ふのであると。又説に夏字は古は夓と書いたので頁は首の本字である、臼は兩手に象り夊は兩足に象どりたるものであるので、夏と云ふ字は人の威儀文飾の具備せることに象りたるものである。即ち夏字は支那は人々みな禮儀作法を心得て居る立派なる文明國であるとの意を見はしたるものであると云ふのである。要するに夏の字に種々の難有き意味を附會するのは銘々の御隨意に任かすが、漢人種の治定したる黄河の北より揚子江に至るの地に夏の稱號を與へたは禹てある。序に云ふが支那人は又た自國のことを華とも云ふが、これも立派で盛んなと云ふ意である。又た四方は皆な野蠻國で所謂東夷北狄西戎南蠻が相連なりて居るが、其中に獨り自國のみ文化が開けて居ると云ふので中國とも云ふのである。或は華夏とも云ひ、又た中華とも云ひ、又た其國が廣大で澤山の國に分れて居ると云ふので諸夏とも稱するのである。○枕。ノゾムと訓む。臨むこと。

通解 洪州府城滕王閣の高臺や堀池は支那の本國と外國と其境を接するの所に其の位置を占めて居る。

釋義 賓主。賓は當日滕王閣へ請待された人々。主は閻伯嶼のこと。○東南之美。東南とは洪州附近の州郡を一般に指して云へるなり。美は美才の意にて來會者を賛めて云へるなり。

通解 今日此の宴席には主人も客人も悉く洪州附近の俊才高德の御方々を集められてある。

都督閻公之雅望。棨戟遙望。宇文新州之懿範。襜帷暫駐。

釋義 都督。此處では刺史のこと。閻伯嶼は其時に洪州の刺史であつた。○

雅望。雅は正と云ふ意。望は他の人より其人の德を仰ぎ望むの意で、人望、聲望、德望等の望と同義である。○棨戟。棨は、はたぼこと訓す。戟に旛を附けたもの。或は合符の意味にも用ふ。棨戟は戟の端へ布帛の旛を附けたるもので、丁度我が近衛騎兵が持てる鎗の如きものである。これは前驅の用に供せらるゝものであるが、閻伯嶼は一州の刺史で權勢盛大なる人であるから其の外出の時は棨戟を執りたるものに先拂をさせて行くのである。○遙臨。臨は高きより低きに云ふ字である即ち高位の閻公が卑位の人の居る所に來ると云ふことである。遙は遠くと云ふ意であるから一說には閻公が遠く京師より此地へ來臨したることゝ云へども其は謬見である。前後の文より考ふるに閻公は當時洪州に居たに相違ない。遙の字に拘泥して非常なる遠方と解釋してはならぬのである。半里一里のところに遙の字を用ひたる例は澤山にあるのである。此句は閻公が其の住家より滕王閣へ行きたることを云ふのである。

通解 人格が雅正で名望聲譽の盛んなる洪州の刺史閻公は、はたぼこを執りたる護衛を引き連れて滕王閣まで來臨せられた。

釋義 宇文新州。宇文は姓である。其名は鈞と云ふとのことであるが、此人の傳に就ては詳しきことが分らぬ。新州とは此度新たに澧州と云ふところの刺史に任ぜられたるを云ふ。○懿範。懿は美しきこと。範は法のこと、かた、或てほんと云ふ意。○襜帷。襜は前垂のこと、又は馬車に乘つた時に前を蔽ふに用ふるもの即ち蔽膝のこと。帷は車の旁に垂れたる幕のこと。襜帷駐と云へば馬車の駐まることと即ち馬車に乘りたる人の來臨すると云ふ意になるのである。○暫駐。チョット立寄ると云ふ意。宇文鈞は澧州へ赴任の途次に洪州を通つた所が、丁度滕王閣に盛宴が開かれると云ふので暫時立寄られたとの意である。官命を帶びて居り、行先を急ぐ身分であるからユックリと逗留したのでは無いのである。

通解 美はしき德を具へて人の模範儀表たるべき宇文鈞が此度澧州の刺史となつて赴任の途中に暫時その車馬を駐められて此閣へ立寄られた。

此處にては都督閻公之雅望と宇文新州之懿範と相對し、棨戟遙臨と襜帷暫駐とが對句となつて居る。之を隔句對と云ふのである。

十旬休暇。勝友如雲。千里逢迎。高朋滿座。

釋義 十旬休暇。旬は十日のこと、十旬は百日のことである。然るに古、唐の世に

於て官吏に一百日間の休暇のあるべき筈がないから、十旬は上旬の間違であるとの說もある。併し此句の對偶になるべき句は千里であるから十の字は活かして置き度いのである。其處で旬が日の誤で十日と云ふことならんとの說が出るのである。されど又た十日休暇と云へば十日目の休暇と解すべきや、或は十日間の休暇と釋すべきやの疑問が生ずるのである。寧ろ二字共に改めて一日休暇とすれば解釋には都合よけれど古より傳來の名文を左樣に易々と改作することは出來ぬから姑らく疑を存して措く。○勝友。人格の勝ぐれて高尙なる友達と云ふこと。畏友、益友、良友の類である。○千里逢迎。千里も遠く隔りたる處から來る客もありて迎へあふと云ふこと。○高朋。これも矢張り人格の高き友達と云ふこと。

【通解】 十旬の休息の暇日に當るので、立派なる友達の招請に應じて此閣に會集するものは雲霞の如くであり。又た附近の人々のみならず千里も隔りたる遠方の朋輩も請待されて來り會し席場に一杯である。

騰蛟起鳳。孟學士之詞宗。紫電淸霜。王將軍之武庫。

【釋義】 騰蛟起鳳。蛟はみづちのこと、龍の一種である。蛟龍の雲氣を呼んで昇騰するや壯觀は人目を驚かすばかりである。又た鳳凰の羽翼を擴げて起ち上るや其の光彩は四方に耀き渡る樣であるとて、之は才能の優ぐれたることを形容したる詞である。○孟學士。舊註に孟浩然とあれど之は謬說である。王勃は唐の高宗の時の人で孟浩然は玄宗の時の人である。然るに高宗の初年と玄宗の初年との間は六十餘年も隔つて居てそうして王勃は三十歲に及ばずして死んだのであるからして、孟浩然は王勃の死後の人でなければならぬ。勃の文章の內に其人のことの記載せられやう筈がないのである。是に就て種々の說があるけれども孟利貞とするのが正當であろうと思ふ。孟利貞は王勃と同時代の人で、著作郞弘文館學士となり、瑤山玉彩五百卷續文選十三卷等の書を選定した人である。○詞宗。宗とは第一位の人のこと。詞宗とは文章詩歌の名人と云ふこと。

【通解】 前に云へる如く多數の高官紳士が此閣へ會集せられたが、其中には筆を執れば蛟龍の躍り騰り鳳凰の翔り舞ふが如く、實に立派なる文章を作りて詞藻界の宗匠とも仰がるゝ孟學士も列席して居られる。

【釋義】 紫電淸霜。その威光の熾盛なることは閃として紫赤の電火の如く又た

その武勇の猛烈なることは凛として清冷の秋霜の如しとて、之は威武節操の勝ぐれたることを形容したる詞である。○王將軍。舊註に晉ノ王濬のことゝあれども疑はしいのである。王濬は晉の武帝の時の人て龍驤將軍となり戰功のあつた人であるが、どうも此處には適當せぬ。加之文章の前後の關係からして考へても此の王將軍は矢張り當時滕王閣の宴席に列したる人と見たいのである。前に云へるが如く孟學士の例もあるから、どうしても王濬と云ふ說は當てにならぬと思ふのである併し王姓を名乘れる當時の人て此處に適當なる人を見出すことの出來ぬのは甚だ遺憾なることてある。これも亦た姑く疑を存して置く。○武庫。武庫は甲冑（甲はヨロヒてある、然るに俗に之をカブトと訓みて冑と取り違へて居るのは笑止しいことてある○序に言へば轡と云ふ字は馬のタヅナであるのにクツワと讀んで居る。）弓矢、干戈等の武器を納れたるクラのことてある。併し此處はクラと云ふ意味のみては面白くない。昔し晉（司馬氏）に杜預と云ふ人があつた鎭南將軍となりて吳を伐ち武功を樹てたことがあるが、此人は又た極めて博學てあつて何でも能く知つて居たから朝野の人みな之を呼んて杜武庫と云ふた。これは、丁度武庫には如何なる武器ても無い物はない如くに、杜預は博學多能てあるとの意味てある。此處には將軍の字に對應せしめんが爲めに武庫の字を用ひそして杜武庫に於ける武庫の意味を持たしめて王將軍の贊辭としたものてある。

通解　其の武威は紫電の閃くが如く、其の節操は清霜の凛乎たるが如くてあつて、又たその材能の秀豐なることは恰も武庫が需用に應じて如何なる武器の供給にも差支のない如き偉人の王將軍も此席に居られる。

家君作宰。路出名區。童子何知。躬逢勝餞。

釋義　家君　父のこと。即ち勃の父の福時のこと。○宰。縣令のこと。即ち福時が交趾ノ令となりたること。交趾は今の佛領印度支那の土地てある。○名區。名高き土地と云ふこと、即ち洪州府のこと。○童子。勃が自分のことを謙遜して云ふたこと。○勝餞。餞はハナムケのこと。去るものを送ることて、或は酒食を以て送り、或は金錢又は品物を遺はすこともある。勝餞とは特別に丁寧なる餞別と云ふこと。

解解　我が父の福時が交趾の令に左遷せられたから、これから自分が其のお側に奉侍し孝養を盡さんが爲めに、今や交趾へ赴く途中にて此の洪州の名地に來り、弱歲のことゝて何事をも知らざるに、圖らずも異常なる饗應に預つたと云ふこと。

時維九月。序屬三秋。

釋義 三秋。秋のことを白藏、收成、三秋、九秋、素秋、素商、高商等と云ふ。秋に三ヶ月ある、その七月(陰暦)を首秋、孟秋、上秋、肇秋、蘭秋等と云ひ、八月を仲秋、仲商等と云ひ、九月を季秋、暮秋、末秋、季商、抄秋、授衣等と云ふ。それで秋のことを三秋とも云ふのである。○序屬三秋 これは九月のこと故、實は「三秋の末に屬す」と云ふ意味なのである。

通解 時節は丁度九月(九日)に當り。次序に於ては三秋の末、即ち季秋のことであると云ふこと。

潦水盡而寒潭清。煙光凝而暮山紫。

釋義 潦水。霖雨又たナガアメの水のこと、又た道路の上に溜りたる雨水のこと。

○潦水盡。七八月比は秋潦とて毎年季節に霖雨が降るのであるけれども、九月の季秋になれば天漸く晴れ渡りて潦水が涸れ盡きる樣になる。○潭。水の深き所フチのこと。○煙光。煙は雲のこと。光は日光のこと。

通解 秋の末になつて來たので、ソロ〱と潦水が涸れ盡きて仕舞ひ、從て泥水の流れ込むものも無くなつて來たから淵の水は清く澄み渡つて來た。そうして夕陽の光線が、晩秋の氣候に凝集して、山の面を覆ひたる雲煙に映射して、晩方の山の景色が紫色に見える。

儼驂騑於上路。訪風景於崇阿。

釋義 驂騑。二字共に同じ義で馬車を曳く馬のこと。四頭立の馬車(ばしや)の內の二匹を服馬と云ひ、外の二匹を驂馬又は騑馬と云ふのである。或は驂は三頭立の馬車の馬(二頭立を驪と云ひ四頭立を駟と云ふ)であるとの說もある。又た騑は驂の副馬(そへうま)との說、三歲の馬との說、馬の進みて行く有樣である等と種々の異說がある。○上路。路上即ち道路の上(ほと)りと云ふこと。これは倒語法とて文勢により文字をワザトに轉置したるもので、詩經にも周南葛覃篇に谷中と云ふことを中谷と書いてある。論語に巧言令色鮮矣仁(仁鮮矣)とあるも此の例である。これは崇阿の二字と對比せしめんには上路とせねばならぬ、路上では對句とならぬからである。○儼。立派に飾り立てゝ容儀正しく馬車を走らすこと。○崇阿。崇は高きこと。阿は丘陵即ち小高き

土地のこと。

【通釋】 來客が皆な威儀堂々と馬車を路上に走らせて、此處の明媚なる風光景色を尋ね見んとて此の滕王閣の建てられてある高陵へと集まつて來る。

臨帝子之長洲。得仙人之舊館。

【釋義】 帝子。滕王のこと。第十五頁を見よ。○長洲。の洲は釋名に聚也。人及鳥物所聚息之處也。とある。そして詩經には關々雎鳩在河之洲とあつて、水中に現はれ出でたる土地のことである。○仙人。洪崖のこと。第十八頁を見よ。○舊館。館は客館、寓館等といふ字で假寓の屋舍のことである。洪崖が久しく此處に定住して居なかつたから館といふのである。因に學校や官署等の如く人の常住せざる建物をも亦た館と云ひ、後世になりては人の居宅にも別號として何々館などゝ唱ふる樣になつた。又た館の学を書くものもあれど館が本字である。

【通解】 古、高祖皇帝の子の滕王元嬰が此地を管轄して常に其の風光を賞したる長洲の邊を閣上より瞰下せば、嘗て仙人の洪崖が一時住んで居たと云ふ建物も見られるのである。

層巒聳翠。上出重霄。飛閣流丹。下臨無地。

【釋義】 層巒。層は重なり合ふこと。巒は山の形の狹くして長きものを云ふ。層巒とは山脈の起伏して細長く連續せるものを云ふのである。○聳翠。翠はミドリと訓ず。青と黄との間色である。草木の繁茂せる山の色を形容したのである。聳は高く地上より拔出でたることである。○重霄。霄はソラと訓じて上天の意の字であるが、此處では上天の薄雲と云ふ意である。重霄とは天際に高く浮べる白雲の重り合へる有樣を云ふのである。○飛閣。滕王閣の非常に高きことを形容したる詞である。飛宇、飛棟、飛梯などゝ飛字は高と云ふ意に用ゐらるゝのである。○流丹。丹は赤色のこと。閣が赤く塗り立てゝあるから其色が、閣の下を流るゝ江水に赤く映ずる有樣を形容したるものである。○下臨無地。閣が非常に高いので、閣上から下を見下ろすと、下の方が霞みて土地が無い樣に思はれること。此句は文選の王簡栖が頭陀寺碑の中にもある。即ち飛閣逶迤下臨無地。とあつて、其注には李善曰。楚辭曰。下崢嶸而無地。張銑曰。言閣高。下臨見地若無也。と記してある。

通解　重疊せる峯巒は青々として高く聳え峙ちて、上は天際まで達し。又た滕王の高閣は江水に其の朱塗の色を映して恰かも丹朱の流るゝが如く、そうして閣からして下に臨み見れば地が無き如くに思はるゝ樣である。

鶴汀鳧渚。窮島嶼之縈廻。 桂殿蘭宮。列岡巒之體勢。

釋義　鶴汀。汀は水際の平地のことで、ミギハと訓ず。鶴汀は汀に集まれるツルと云ふこと。普通の文章にては汀鶴と書くべき所なれど四六文に於ては詩賦と同じく、文字を斯く倒用することがあるのである。前の句に於ける上路の解釋を參照せよ。○鳧渚。渚は洲の小なるもので、ナギサと訓む。鳧渚は渚に住むカモと云ふこと。○島嶼。水中に特出したる小島を嶼と云ふ。嶼はシマ或はコジマと訓む。○縈廻。二字ともにマワル或はメグルと云ふこと。○桂殿蘭宮。桂はカツラ、蘭はアララギと訓ず。共に薫香ある貴き植物の名である。宮も殿も共に古は人の住居の泛稱であつたが、後に天子の宸居、貴族の住宅、神佛の祠堂等の專稱となつた。併し宮は一廓の内にある諸建築物の總稱であつて、殿は宮中の一棟の建物に就て云ふのである。○體勢。容體、形勢のこと。

西京雜記に、梁孝王築兔園。園中有百靈山。山有膚寸石、落猿巖、棲龍岫。又有雁池。池間有鶴洲鳧渚、とある。又た楚辭屈原の九歌に桂棟兮蘭橑、とある。後になると蘇東坡も赤壁賦の中に書いたる如く桂棹兮蘭槳などゝ云ふ類句は中々に多くあるのである。さて又た汀と云ひ渚と云へばとて此の二字に深き意味のあるのでは無い。又た鶴汀鳧渚とあれども必ず汀には鶴が居り渚には鳧が居ると云ふ譯では無い。極意は水邊の平地に種々の水鳥が居ると云ふまでのことである。桂殿蘭宮も其通りのことであつて、ツマリは結構なる材木で立派に造作せられたる建物と云ふまでのことである。

通解　又た眼を轉じて眺むれば汀渚に集まれる鶴鳧の類は樂しさうに水中島嶼の縈山旋回せる間を彼方此方へと逍遙游泳して居るし又た立派なる宮殿室堂は岡陵峯巒の形勢に應じて所在に建て並べられてある。

披繡闥。俯雕甍。

釋義　繡闥。繡は五色の糸で文彩を加へたるもの。闥は宮中の小門のことであるが此處では門のトビラのことである。○披は開くこと。○雕甍。雕は文飾

を刻みたること。甍は屋脊即ち棟のこと。或は屋棟の死のこと。

通解　更に眼界を廣くせんが爲めに、文飾を施せる門閭を推し開けば其の附近なる宮殿の見事なる屋棟を一目に下に見るのである。

山原曠其盈視。川澤盱其駭矚。

釋義　曠。遠く大く廣きこと。○盈。滿に同じ。眼に一杯になること。○澤。地の低くして水のある處を澤と云ふ。○盱。目を張りて見つめること。周章して或は吃驚して見ると云ふ心持ちあり。○矚。視ることの審なる貌て、とくと見ること、

通解　遙かに眺望すれば、山陵も原野も廣々として極限なく、殆んど一目には見切れぬやうであり。又た川や澤の流れ注ぐ所をよく〳〵視れば視る程、その景色の大きく且つ變化が多くして殆んど應接に遑あらざる有様に、只、呆れ驚くばかりである。

閭閻撲地。鍾鳴鼎食之家。舸艦迷津。青雀黃龍之舳。

釋義　閭閻。邑里のこと。○撲地。撲は打つと云ふ字であるが、今は盡すと云ふ意に讀むのである。文選の鮑明遠が蕪城賦に「廛閈撲地」とあつて其註に李善の曰く「撲は盡の義である」と書いて居る。則ち此處では、洪州の地が甚だ繁昌であるので其の都邑に、尺土寸地を餘さず、家屋を建て並らべ盡くせることを云ふたのである。○鍾鳴。大家にては人類衆多なる故に、食事の時刻には鍾を打ち鳴らして食堂へ呼び集むると。○鼎食。鼎はカナヘのこと。我が鍋に當る。鍋で御馳走を烹て食ふこと。○舸艦。舸は大なる船。艦は水戰に用ふる船、即ちいくさぶね。○迷津。津は港のこと。又た渡し場のこと。船舶が餘り澤山に居るから何處に繋泊してよいやらと方向に迷ふこと。○青雀黃龍。支那では古より舟の舳先へ青雀、黃龍、翠虬、水馬、鷁首、鴨頭など〻種々の形象を彫刻せる者を飾り附けてある。これは水神が舟へ祟をせぬ樣にとて、之を威嚇せんが爲のものである。○軸。此字は車の心棒と云ふ字であるが、舳と通用して、此處では舟のへサキと云ふ意である。舳艫と連用せらる〻字であるが、二字ともにへ(船首)とトモ(船尾)との兩義に使用せられて居る。

通解　此方の邑里では、食事の時分に鍾を鳴らし鼎を列ねて食すると云ふ樣な

家々が建ち並んで寸土をも餘さぬと云ふ景氣であり。又た彼方の江頭では青雀や黄龍を舳先きへ飾り立てたる船舶がマゴ〳〵する程、澤山に浮んで居る。

虹銷雨霽。彩徹雲衢。

釋義　虹。ニジと訓す。因に虹は同時に二個現出することがあるが、其の鮮明なる方を虹と云ひ、色彩の薄き方を蜺（霓と同じ）と云ふのである。○銷。金を鎔解するの義なれど、消字と通用し、キエルと訓す。○雨霽。雨が止みて天の晴れ渡ること。上文の潦水盡而寒潭清を講ずるときにも云つた通り、もはや霖雨の季節全く過ぎ去りて天氣晴朗となりたる有樣を云ふのである。○彩。光彩のこと。日光を云へるものである。○雲衢。空中のこと。衢は通路のことで、チマタと訓ず。空中は雲が往來するところであるから雲衢と云ふのである。○徹。通る或は達するといふ意。

通解　殊に又今日は稀有の秋晴で、虹も消へ失せ雨も新に霽れて、日光は空中に通徹して居るから、眼界の及ぶ限り端から端まで何でも明瞭に見ゆると云ふ意なのである。

落霞與孤鶩齊飛。　秋水共長天一色。

釋義　落霞。霞をカスミと訓まずして飛蛾（火取蟲の類）と見るの説あり下に揭ぐ。瑯琊代醉篇に曰く王勃作滕王閣序中間有落霞與孤鶩齊飛秋水共長天一色之句。世率以爲警聯。然而落霞者即飛蛾也。非雲霞之霞。今人呼爲霞蛾。且夫鶩者乃野鴨也。野鴨飛逐蛾蟲而欲食之故也。所以齊飛。若雲霞則不能飛也。と。○孤鶩。鶩はカモのことである。されど楊升庵は鶩字はアヒルであつて、カモでないとて、終に文人が文字に對して甚だ不用意であることを攻擊して居る。鳥渡面白いから次に引用して見よう。禮曰。庶人執鶩。尸子曰。野鴨爲鳧。家鴨爲鶩。不能飛翔。如庶人守耕稼而已。古者以鶩爲贄。必家畜之禽。又取義於不能飛翔可證也。管輅云。家雞野鶩。猶尙知時。滕王閣序落霞與孤鶩齊飛。皆誤以野鴨爲鶩也。文人用字。或取諧韻便。豈可據乎。云々。とある。成程、詩賦や四六文を作る人が常に平仄や韻を押すことに惱まされ、或は對句を揃へることに苦しめられて、往々苦し紛れに無理な文字の使い方をすることのあるのは楊升庵の云ふ通りである。併し鳧と鶩とは通用の字であつて、鶩は元來アヒルを云ふ字なれども、之をカモと讀んでも決して差支の無いことは本草綱目にも

論じてあるのである。○長天。大空といふこと。此句は秋になると天色も水色も澄み渡つて來るのであるから、其景色を述べたものである。

通解　空より落ち來る如くに見えて消えかゝる霞と、一羽の鴨の飛び行くのとが相共に翩飄と空中に舞ひ。又た秋の水は碧色に清みわたりて遙かに際涯なき蒼空と一ッ色に見ゆる。

因に此の上句に、仰いで觀たる景を述べ、下句は俯して視たる樣を云ふたものであるが共に前の句に、雨が新に霽れて景色のハッキリとして居ると云へる所より引き出されたる語句であるのである。處で此の兩句は既に第十七頁に於て述べた通り、古來匹儷罕なる警聯として有名なるものである。然るに其の前後に於てこれに似たる綺語麗句が中々少なくないのである。今その二三を摘記して見よう。

風儀與秋月齊明。音徽與春雲等潤。　劉宋　褚淵碑

落花與芝蓋齊飛。楊柳共春旗一色。　蕭梁　庾信

浮雲共嶺松張蓋。明月與巖桂分叢。　隋　長壽寺碑

蛾眉將秋月爭妍。蟬鬢與春雲等潤。　元　董太初

壯心與白日俱長。華髮共黃葉齊脫。　明　田藝衡

之れに就きて楊升庵は評して「王勃の落霞秋水の語は褚淵碑や庾信の馬射賦や長壽寺舍利碑等の句に本づきて作つたものに相違ないが、併し出藍の妙趣がある。古人の成句などには何等の關係が無いと云ふても差支ない」と云ふて居る。

漁舟唱晚。響窮彭蠡之濱。雁陣驚寒。聲斷衡陽之浦。

釋義　彭蠡。上に述べたる五湖の中の鄱陽湖のこと。○雁陣。陣は陳と同義である、即ち列と云ふことである。雁は其の群がり飛ぶ時には必らず行列を揃へて空を翔り、又た其の宿る時にも矢張り隊伍を整へ番兵を定めて居ると云ふので雁陣と云ふ熟語が出來たのである。雁の別名は翁鷄、沙鵝、鴈、鳴鵝、倉鳴、朱鳥、霜信等である。○驚寒。雁は陽鳥とて陰を嫌ひて陽に隨ふの鳥である。元來北地に住んで居るが秋になると其の寒冷なるに驚きて南方の較々溫暖なる陽地を慕ふて飛移るのである。○聲斷衡陽之浦。衡陽は今の河南省衡州府で、前に述べたる四岳（或は五岳）の中の一なる衡山の南にある土地を云ふのである。衡州府に衡陽縣と云へるがあるけれども、此處に云へる衡陽は、衡陽縣のみを指したるものではない。

衡陽縣の東南なる清泉縣に回雁峰と云ふ山があるが、此山は南嶽（四岳中の南岳即ち衡山のことてある。）七十二峰中の首なるものである而して此山が回雁峰なる名を得たる所以は陽鳥即ち鴻雁が秋天に北より飛び來るや衡山を越えないで此處に止まり、翌春を待て更に北方へ引き返して飛び去ると云ふことからてある。　聲斷云々は雁が蒼空を飛んて渡り來るときには其の行列の先頭より後のものへと順次に絶えず鳴き續けて飛び行くが、地に下りて休むときは靜まるものてある。　然るに衡州まて來ると此から先へは飛び行かずに此處へ止まるのてあるから斯く云ふたのてある。　併し實際に於て洪州府と衡山との間は直徑にしても凡そ百五十里も隔てゝ居るのてあるから迚も雁の鳴て居るか鳴て居ないかゞ聞きわけらるゝものては無いのてある。　ツマリ聲斷衡陽之浦とは北地より飛び來れる雁が遥かに西南に見ゆる衡山の附近へ落ち付くとの意を見はしたる句なのてある。　猶ほ序を以て云ふが響窮彭蠡之濱と云へばとて彭蠡は我が琵琶湖に數倍せる大湖てあるから、如何に大なる聲ても之に響き渡らせることは出來ぬのてある。　これは文人の筆を以て秋の夕暮の幽清なる景色と漁夫の和樂せる樣子とを叙したるものてある。

通解　更に眼を轉じて眺むれば、此の秋晴の好天氣に際して江水に舟を浮べて釣を垂れ網を下せる漁夫達も、最早や薄暮になりたることとて、釣具を収めて歌を唱へつゝ我家を指して舟に棹して居るが、其の音聲は遠く彭蠡の濱を窮めて其のはて〴〵までも聞ゆる樣てある。　又た耳を側てゝ聞けば雁が北地の寒氣に驚きて例の通り行列を作りて鳴き渡りて來たが、これは衡陽の浦邊で地に下りて此冬を過すのであろう。

遙吟俯暢。　逸興遄飛。

釋義　遙吟。　遙吟其思と云ふことてある。　滕王閣上よりして遙かに西北の方、帝都の在る所を望見して「我もツイ先日までは朝廷に仕へて居た身分てあつたが今は忌諱に觸れて流浪の身となり、斯る邊陬の地よりして帝都を遠望することゝなつたのか」と煩悶し苦吟すること。　下文に懷帝閽而不見。奉宣室以何年とあるは丁度この遙吟に相當するのてある。　○俯暢。　俯暢其情といふことてある。　物思ひの種なる帝都の方を望むことを止めて、俯して此の勝景を眺め、造化の自然を弄びて天命に安んずべきことを悟りて其心を舒暢し慰藉（藉(セキ)にあらず）すること。　下文に君子安貧。達人知命と云へるは丁度この俯暢の語に相當するのてある。　○逸興。

すぐれたる樂みと云ふこと。○遄。速かにといふこと。

通解　遙かに帝都を望みて苦吟したがやがて思ひ直して俯して勝景に對して其の鬱結した情緒を暢べたが、一旦豁然として悟つて見ると、優悠たる興味が急に色々と湧き出して來るのである。

爽籟發而清風生。　纖歌凝而白雲遏。

釋義　爽籟。爽はさわやかにして快きこと。籟は笛のこと。爽籟は聞いて氣の清々する樣な笛の音のこと。○纖歌。かよわくしなやかなる聲で歌ふこと。○凝。聲を徐かにして其の調子を引張ること。○遏。止ること。

音樂によりて風雲を起すと云ふことは古來種々の傳説のあることである。今その二三を次に記して見よう。

漢武帝使董謁乘浪霞之輦。昇壇以候王母。王母至。帝與宴。奏春歸之樂。謁乃聞其聲。而不見其形。聲繞梁三匝。壇上草木枝葉皆動。歌之感也。(洞冥記)

薛談學謳於秦青。未窮青之伎。自謂盡之。遂辭歸。秦青弗止。餞於郊衢。撫節悲歌。聲震林木。響遏行雲。薛談乃謝。求反。終身不敢言歸。　(列子)

有麗人歌賦。漢興以來。善雅歌者。魯人虞公。發聲清哀。能動梁塵。(劉向別錄)

李牟。秋夜吹笛于瓜洲。舟檝甚隘。初發調。群動皆息。及數奏。微風颯然而至。俄頃舟人賈客。有怨嗟悲泣之聲。(唐國史補)

師曠援琴而鼓之。一奏之。有玄鶴二八。集乎廊門。再奏之。延頸而鳴。舒翼而舞。平公大喜。起而爲師曠壽。反坐問曰。音無此最悲乎。師曠曰。有。昔者黃帝以大合鬼神。今君德義薄。不足以聽之。聽之將敗。平公曰。寡人老矣。所好者音也。願遂聞之。師曠不得已援琴而鼓之。一奏之。有白雲從西北起。再奏之。大風至而雨隨之。飛廊瓦。左右皆奔走。平公恐懼伏廊屋之間。晉國大旱。赤地三年。(史記)

通解　已にして坐中より爽やかにして心地よき笛の音が響き出すと、その絶妙なる曲律につれて清き風が起りて來り。又た宴席に侍せる女樂が細くしなやかなる聲を徐かに調子よく唄ひ出すと、天上の行雲も之に感じて其の足を止め、之れに聞きとれて居るやうである。

睢園綠竹氣凌彭澤之樽。　鄴水朱花光照臨川之筆。

釋義　睢園。前漢の文帝の子で、景帝の弟に當れる梁の孝王が作りたる園の名

てある。方三百里の間に竹を栽えたといふことで、又た脩竹園とも云はれて居る。○綠竹。詩經の衞風の淇奥の篇に綠竹猗々、綠竹靑々等の語があるが、之れは衞(春秋)の武公の盛德を綠竹の繁茂して靑々と頗る美はしきに比べて嘆美したるのである。○彭澤之樽。晉の陶淵明は極めて超俗高趣の人であつたが、嘗て彭澤の令となつた時に、郡から督郵を派遣したが、其時に吏は淵明に向て「束帶して之を見るべし」と云ふたるに淵明は曰く「我豈に能く五斗米の爲めに腰を折りて鄉里の小兒に向はんや」とて直に官職を辭して家に歸り、門に五本の柳樹を植えて五柳先生と稱し、自ら田園の耕作に從事し、常に詩酒を友とし、淸貧に安んじて居つた。或る年の九月九日即ち重陽の佳節に當りて菊花は今を盛りと咲き揃ふて、甚だ見事ではあるが、生憎にも淵明は貧きが爲めに好物の酒を求めて一醉の快を買ふことも出來ず、是非なく菊花を手に摘みて悵然として之を視て居るのであつた。處が丁度其時に江州の太守の王弘が之を助けんとて酒を遣はされたので淵明は大に喜び、弘と共に醉を盡して打ち興じたと云ふことである。其の性情が淡泊であつて、頗る酒を嗜み常に悠々として聲利の外に自適して居たから、從て超俗的の言行が甚だ多いが、玆には省略することゝした。○鄴水。鄴は今の河南省彰德府臨漳縣にあたりて、往昔三國の時代に魏の曹操が王業を創めたる所である。鄴水は其傍を流るゝ川の名である。因みに支那では黃河の流域の川の名は大抵某水と云ふ、即ち我國では隅田川江戶川等と云ふ處を渭水、洛水等と云ふのである。○朱花。芙蓉のことである。芙蓉は桐の如き葉で、仲秋の頃に紅色(或は白色)の牡丹の如き立派なる花を開くものである。○臨川之筆。臨川は今の江西省撫州府にあたる。古晉の時代に王羲之と云ふ人があつたが、此人は臨川の內史となつたから王臨川ともいふのである。羲之は字を逸少と云ひ、書を能くし、特に草書隸書に於ては古今第一と稱せられて居る。

綠竹も朱花も共に洪州附近に繁茂せる植物である。そうして陶淵明も王羲之も嘗て洪州附近に住居したる人物である。然るに綠竹は靑々として眞直に節正しくあるから、之を以て陶淵明の高節雅逸に比らべ。又た朱花は眞紅で多瓣で極めて派手に見事であるから、之を以て王羲之の長伎俊秀に比らべたのである。そうして其の氣節や才俊を以て更に坐中の諸客に對應せしめたものである。

〔通解〕雎園の綠竹は猗々靑々と繁茂して、陶淵明が常に酒樽に對して世の惡風汚俗に遠ざかつたる其の氣節を凌駕する趣がある。又た鄴水の邊の朱花は實に

華美艶麗なるものであつて、恰かも王羲之の筆力の勁健高雅なると其の光彩を爭ふの風がある。而して今は此の坐中を見渡すに皆な斯かる高節清廉長伎儁才の人士が澤山に列席して居られる。

四美具。二難并。

釋義　四美。良辰、美景、賞心、樂事の四てある。良辰は良き時節てある。恰かも今日は重陽の佳節に當つたことてある。美景は滕王閣上より眺望する所の景色の甚だ美はしきこと。賞心は心に賞玩すること、即ち其人の意思に適合すること。樂事は絲竹管絃の洋々たる中て勝景を見ながら山海の珍味の御馳走に預かりて居る樂しき會合のことてある。○二難。賢主、嘉賓の二てある。賢主は賢德ある主人公のこと、即ち閻伯嶼のこと。嘉賓は嘉美の才德ある賓客のことてある。

通解　古より良辰、美景、賞心、樂事の四を一時に享受する場合は實に稀なるものとせられてあるに今日の會は此の四美を悉く具備して居る。又た賢主と嘉賓とが遇合することも中々に其の場合の少なきものてあるのに、此會はそれをも幷せて具へて居る。誠に世に珍らしき盛大なる宴會てある。

窮睇眄於中天。極娛遊於暇日。

釋義　睇眄。睇も眄も共に見ると云ふ字てあるが斜視の義がある。即ち目を傾けて仰いて流し目に見ることとてある。○中天。半天と云ふに同じ。大空の中程と云ふ意てある。○娛遊。娛はたのしむこと。娛遊は歡樂佚遊すること。○暇日。前に出たる十旬休暇の句に應ず。暇日は休暇の日と云ふこと。○窮。極。二字共にユキツマルの意あれど、極は至極最甚の意にて窮は困窮難儀の意あり。されど此二字は古より窮歡極娛とか極才窮智などゝ使用して一通りのキハメルと云ふ意に用ふるなり。

通解　斯く四美を具へ二難を幷せたる奇しき會合に列席したる主客は、それぞれに此の高閣からして半天の遠方を瞻望して此の暇日に十分の歡娛を極める。

天高地迥。覺宇宙之無窮。興盡悲來。識盈虛之有數。

釋義　天高。秋の季節に當りて天氣清朗にして、限りなく澄み渡れるが故に天の高く見ゆること。○地迥。同じく天氣快晴にして雲霧の間を遮るもの無きが

故に遙かに遠方までも見渡せること。○宇宙。淮南子に四方上下謂之宇、往古來今謂之宙とある。尸子に天地四方曰宇、古往今來曰宙とある。これによれば宇は空間のことで宙は時間のことである。併し說文には宙舟輿所極也とあつて、宙も矢張り空間のことに說明してある。後世は宇宙の二字を以て、一般に天地間と云ふ意に解して居るのである。○興。物に感じて意にかなふたる事の生じたるを云ふ。悅び樂しむこと。音キヨウであるが、オコスとかオコルと云ふ意の時には音コウである。○盈虛　盈は滿なりミツルと云ふこと。虛は空なり、ムナシキこと。此の盈虛の虛の字は虧（缺或は損の意、即ち盈虧は滿つれば缺けると云ふ意。猶ほ月が滿月になれば又た缺け始めるが如きを云ふのである）の字の誤であるとて、盈虛をエイキと讀む人がある。併し盈虛と云ふ熟語も古くよりあるのであるから强ちにエイキと讀まねばならぬことも無いのである。○數。運命或はものゝきまりと云ふ意である。

通解　滕王閣に上れば天も一倍高きを覺え、地も見渡す限り遙かに遠くして際涯なきを見るにつけ、此の世界の如何に廣大無邊なるかを覺悟するのである。而して又た此の悠遠長久なる天地の間に於ける萬物が皆な自然に榮枯盛衰して轉變循環する有樣に考へ及べば、我も今、此處て遊興を恣にして居れど、やがて遠く交趾の樣な僻地へ往きてミジメな思をせねばならぬので、ツマリ盈虛の理法は自然に定まつてあつて決して逃れ得べきもので無いと云ふとを知り得るのである。

望長安於日下、指呉會於雲間。

釋義　○長安。當時即ち唐時代の帝都である。今の陝西省西安府西安縣のことである。昔、周の武王始めて此地に都を定めてより漢の高祖、西晉の愍帝、西魏の孝武帝等相繼で此處に都し、其後に北周の愍帝が又た此地に都してから引續きて唐代まで帝都となつて居た地である。○呉會。呉とは支那の東南方、即ち古の揚州、今の江蘇省附近の地の總稱である。其地に會稽山と云ふ名高き大山がある。呉會とは呉の會稽山と云ふことてある。古越王の勾踐が呉王の夫差に擊破せられた時に、勾踐は會稽山に逃げ込み、呉王に頓首謝罪して漸く免るされて國に反り、常に膽を嘗めて會稽の恥を雪がんことを計りて、終に呉を滅したと云ふ故事があるのである。元來、呉會と云ふ熟語は古からある語で、普通に呉郡と會稽郡との意義である。會稽郡は後漢の世に呉郡を割て置かれたのである。去れど漢文に詩經

中の詩句を引用する時に詩經に於ける原意と違つた意味に解釋して之を使用したる例は澤山あるのであるから、此處でも吳會の二字を以て必ずしも吳郡と會稽郡と解釋せねばならぬとは限らぬのである。今此處には指吳會於雲間とあるが雲間とは白雲の間と云ふことである。尤も雲間と云へば雲霧の間とか雲煙模糊の間とか解することが出來るのであるけれども、既に詳說した通り前文に於て此日は所謂日本晴れと云ふ樣なる好天氣であることを敘してあるのであるから、此の雲間の雲の字は白雲或は靑雲と見なければならぬのである。然るに吳郡會稽郡は洪州の地からして數十里を距てゝ居るのであるから、どうも雲間の二字に相當せぬのである。矢張り會稽山と見る方が宜しいと思ふのである。

通解 遙に西北方を望めば近頃まで自分が居住して常に戀しく思ふ所の帝都の長安は數百里を隔てたる彼方の日の下の邊にあるのであるが、その長安も古來幾度かの榮枯消長を經て來て居るのである。又た眼を轉じて近く東北方を見れば會稽山の雲間に聳ゆるのを見ることが出來るが、これも亦た古に於て吳越の興廢したる古蹟てある。

地勢極而南溟深。天柱高而北辰遠。

釋義 南溟。溟は海のことである。莊子に南溟北溟の語がある。南溟とは南の端の大海と云ふこと。○天柱。衡州に天柱峯と云ふ山があるけれども、それは此と無關係てある。此の故事は列子淮南子及び司馬貞の補史記等に出て居る。其の大要を記せば、支那の太古の時代に於て三皇の一人なる伏羲氏と云ふ天子があつた。此の伏羲が崩じて女媧氏が立つたが、其時に諸侯の中に共工氏と云ふのがあつて、戰に敗北したのを怒つて自己の頭を不周山に打ち當てたるに因つて、天柱が折けて地維が缺けた。蓋し不周山とは頗る高い山であつて蒼天の墜ちない樣に柱の如くに峙立ちたる山であつたに、今共工氏の爲めに打ち壞されたるにより天が墜落し地が壞滅することになつた。其處で女媧氏は大に驚いて早速に五色の石を集めて之を練り合せて天の破れたる所を補修し、又た鼇の足を斷ち截りて其て東西南北の四隅の柱を立て直ほし、又た蘆の灰を集めて水の溢れるのを止めた。斯の如くにして女媧氏は天地の壞破を修繕したのであるが、何分にも大急ぎて爲した仕事であるから少々出來損なつて天は西北に傾き地は東南に足らぬ

所がある、故に日月星辰はみな西北に就き江河百川はみな東南に向て流るゝのである云々とのことである。○北辰。北辰は古來種々の異説があるが、爾雅に北極謂之北辰とある通り、北極星のことである。北斗七星と云ふて天の北方に當りて七ッの星が一圏をなして其中の一星を中心として旋轉して居るのであるが、其の七星の名は一天樞、二璇、三璣、四權、五玉衡、六開陽、七搖光と云ひ、或は又た一貪狼、二巨文、三祿存、四文曲、五廉貞、六武曲、七破軍とも云ふ、而して其の中心なる樞星が即ち北辰星なので、北星は我が地球上で方位の標準となり又た天象を觀測するもその本となる星である。晴夜北方の空を望めば肉眼にて明かに見られる星である。

通解　さて洪州は東南方にある土地であるが元來地は東南に於て缺けて居るのであるから（天柱の解に云へる如く）地勢は洪州に至りて極まり盡きて、直ぐ其の先きは渺茫限りなき廣大且つ深々たる南海に接するのである。而して又た天は西北に傾いて居るのであるから、之を支えて居る天柱は頗る高いものであるが、其の端にある北辰の星は南方の土地から見れば非常に遠く隔りて居るのである。

關山難越。誰悲失路之人。萍水相逢。盡是他鄉之客。

釋義　關山。關塞山險て關所や難所のこと。此處では長安と洪州とは道程長くして其間に通行に困難なる場所の多きことを云ふたのである。○失路之人。路は仕官の途のことて、これは官職を罷免せられたる人のことてある。物が自分のことを云ふたものである。○萍水相逢。萍は水上に浮き生ふる草、即ちウキクサのこと。浮草が水上に浮びて風に吹かれ彼方此方へと流れ廻はりて居る内に彼方の草と此方の草とが屢、その場所を定めずに相會するからして、流浪せる人が他鄉にて出會はすことを萍水相逢と云ふのである。○客。客は普通には賓客即まろうどの意であるけれども、猶ほ他に數義あるのである。此處では故鄉を離れたる人或は旅人と云ふ程の意てある。

通解　南方僻遠の地に於て數多の人士が此閣に會合して居る、けれども、孰れも皆な他鄉から集まりて來た人達のみであつて、一人とても故舊の人があるので無いから、誰も王勃の心情を察知して呉れる人が無い。去れば勃が高宗の逆鱗に觸れて官職を罷免せられ、今や浪人の身分となつて帝都を離れ、空く山河の懸絕を歎いて居ることを諒察して同情を表して呉れるものが無い。

懐帝閽而不見。奉宣室以何年。

釋義　帝閽。閽は元來門番と云ふ意の字であるが、又た宮門の意にも用ゆ。帝閽とは天子の禁門と云ふこと。○宣室。王宮の未央宮の北にあつて、天子が神や祖先を祭る時に潔齋をする處を云ふ。奉宣室と云ふことは前漢の賈誼といふ人の故事である。賈誼は雒陽の人で十八歳の時、已に諸書を渉獵し又た能く文を草したので、文帝が之を召して博士とせられ、一年の中に太中大夫に歴進した。處が絳灌などゝ云ふ人が之を忌みて讒誣をしたので誼は終に長沙へ貶謫せられた。併し其後に嫌疑が晴れて又た朝廷へ召還せられ參内をしたが、丁度其時に文帝は宣室に居られたが、直に此處で引見してやろうとの御意であつたので、賈誼は宣室にて文帝に拜謁して種々お話を申上げ叡感斜ならざることであつた。

通解　前に云へるが如く帝都は洪州より幾百里の西北にあり、越え難き幾重の關山を隔てゝ居るのであるから。今勃が閣上より遠望して遙かに帝都を戀しく思ひ、倘ほ早く罪を免るされて長安へ召還せられんことを冀ひて天子の禁門を追懐すれども、如何しても之を見ることが出來ぬ。昔は前漢の賈誼は一旦天子より

罪を得て貶謫せられたけれども、間もなく赦されて京都に還り天子に宣室で拜謁したと云ふことを聞いて居るが、自分は何時になれば賈誼の如くに召還せらるゝことになるのであるか。何年になれば高宗皇帝の怒が解けて自分に拜謁を許して下されるであろうか、甚だ心配なことである。

嗚呼。時運不齊。命途多舛。

釋義　嗚呼。歎息の辭。此處では前の述懐を承けて更にこれで一轉して自己の憂思を寛小するための辭である。○時運。時は時々。運は吉凶の氣運のこと。時のまはりあはせのこと。○命途。命は天命。途は窮達の二途のこと。天命の歸する所を云ふのである。○舛。音セン。違ふこと。

通解　嗚呼世の中は思ふやうにはならぬものである。先人の事蹟を見るに古來人の吉凶禍福は何時も定まりて居らぬ、それ〴〵に齊しくない。又天命の繋る所、榮枯窮達の分も常に思ひも寄らぬ行違ひのあるものである。自分のやうに不運なる目に逢ふた人も決して其數の少ないことでは無い。

馮唐易老。 李廣難封。

釋義 馮唐。 前漢の人である。 文帝に仕へて車騎都尉と云ふ官になつたが其後久しく昇級せず、景帝の時に楚の宰相となつて朝廷を去つた。 然るに武帝が立ちて天下に賢材を求めらるゝに及んで馮唐を推薦した人があつたけれども其時に唐は既に九十餘歳になつて居て最早や劇職に堪ふべくもあらぬので、折角の推擧も何の役に立たず、唐は終に一生榮達を得なかつた。 ○李廣。 矢張り前漢の人である。 文帝の時に匈奴を打破り大功を樹てた。 文帝は之を褒めて「惜しいかな廣は時に遇はぬ人である、若し高祖が初めて天下を平定せられた時分に彼程の軍功を積んだならば其の諸侯に封ぜらるゝは無論のことである」と云はれた。 其後も匈奴と大小七十餘戰して皆な捷利を得たが、武帝の時に廣は年六十餘になつて又た匈奴を征伐して道を迷ひて大失敗をしたので廣は終に責を引て自殺した。 因に廣は弓の名人であつたが、或る時、山道を夜行したるに前方に虎が居るのを見て弓を引て之を射て中つたから傍へ行きて能く之を見れば虎でなくて石であつた。 そうして廣が射たる矢は羽のところまで其の石に突き透りて居たと云ふことである。

通義 試に其例を擧ぐれば馮唐の如くに久しく小官に沈淪し、幸に天子に知られて拔擢の榮を得んとしたる時には、既に老耄して居つた人もあり。 又た李廣の如くに屢々戰功を樹てたるにも拘はらず、終に諸侯に封ぜられずして空しく屍を原野に曝らした人もあるのである。

屈賈誼於長沙。 非無聖主。 竄梁鴻於海曲。 豈乏明時。

釋義 賈誼。 解前にあり。 ○長沙。 古の楚の地で今の湖南省の東北方に當る。 誼は讒言に逢ふて文帝の怒に觸れ、長沙王の大傅として長沙へ貶謫せられたのである。 ○屈。 黜の意、即ち退ぐると云ふこと。 ○聖主。 智德の高き天子にて、此處では漢の文帝のこと。 ○梁鴻。 梁鴻は梁鴴の誤であるとの説がある。 梁鴻は後漢の章帝の時に於ける高節の士である。 其妻の孟氏は有名なる大醜女であつたが、自ら鴻の妻とならんことを望み、其醜を知て之を娶つたとのことである。 後に夫婦共に覇陵山中に隱れ耕織を業とし常に詩を詠じ琴を彈じて自ら樂んで居つた。 嘗て前世の高義の士二十四人の頌を作り、尋て五噫歌を作つた。 處がそれが天子

の忌諱に觸れたので鴻は出奔して吳の國に隱れて終に其地で死したのである。然るに古註に梁鴻善八分書。魏武帝重之。其後爲倖臣所毀、遂於北海。とあるが、今既に述べたる通り梁鴻は書には關係なく、且つは魏の武帝の時代の人でないから、其處で鴻は鵠の誤ならんとの疑が生ずるのである。梁鵠は後漢の末三國の初の頃の人であつて、隸書を能く書いた人である。序を以てお話をするが八分と云ふことに就ては種々の說があるが隸書の二分と小篆の八分とを取り合せて出來たる書風の一體であると云ふことである。さて梁鴻が正しきか梁鵠が正しきかは孰れにしても大體に差支のないことであるが美文の解釋は左樣に大膽に濟まされぬ。因て考ふるに次に豈乏明時との句がある。明時とは明なる時代即ち昭代と云ふことである。然るに梁鵠の時代即ち漢末魏初は亂世であつて中々に明時などゝ云はれる時世で無いのである。又た鵠は北海に遂はれたとの事であるが、漢代に北海と呼ばれたのは今のバイカル湖のことであつて本文の海曲と云へるに相應しないのである。處で梁鴻の時代の天子即ち漢の章帝も聖人と云はるゝ程の君て無いのであるけれども、章帝は或は貧民を賑はし、或は慘刑を禁じたる事もあり、又た當時には班固等の儒者が出てゝ種々經義の闡明に盡力したともあるのであるから兎も角も明時と云ふても差支も無からうと思ふのである。又た本文に竄於海曲とあるが海曲の曲は隅角或は隈と云ふ義で海曲は僻隅の海濱の地と云ふことである。そうして梁鴻は南海の濱なる吳國へ逃竄して居つたのであるから此處の梁鴻は後漢章帝の時代の梁鴻と見るが宜しいのである。尤も舊註は前文に於て孟學士を孟浩然と誤釋した例もあるのであるから、此處に於ける註文の善八分書云々と云へるのも全く何等かの誤解に相違ないのである。

通解　漢の文帝は聖主であつたのであるけれども、賈誼は賢明の才能を抱きながら讒者の爲めに長沙へ貶謫せられ。後漢の章帝の世は清明の時代であつたけれども、梁鴻は嫌疑の爲めに吳國へ遁竄したのである。

前聯は勃の父福畤の身に比したものである。而して本聯は勃が自分の身に較らべて云ふたものである。父の福畤は年已に老いて今や遐陬の交趾に賤官を奉じ、其の一生を轗軻不遇で終ると恰かも李廣や馮唐の如くなるべきか。自分も亦た相當の學德を備へながら時に遇はずして遐地へ追ひ遣らるゝと猶ほ賈誼や梁鴻の如くであるが是れ皆な所謂、時運不齊命途多舛ふと云ふ者であるとは云へ、自分は終に梁鴻の如くに此儘で客地に埋沒し了るのであるか、或は又た賈誼の如く

に再び朝廷へ召還せられることになるのであらうか、さてまた氣がゝりのことである。

所頼君子安貧。　達人知命。

釋義　君子。君子に數義あれども、今は單に有德の人と云ふ程の意に心得てよし。○安貧。淸貧に安んずるなり、貧を好むにあらず、不義の富を貪ることを嫌ふなり。道を樂むが故に貧乏を意に介せぬなり。○達人。道理に通達する人。何事にも心得のある人のこと、○知命　天命を知ること。理想が高尙てあるから徒らに悲觀などせぬなり。

通釋　併しながら更によく考ふれば、君子は貧に居て其心を亂さず、達人は天命のある所に安んじて不平の心を起さぬ。斯る君子達人の心をこそ我が心として之に信頼し安住すべきてある。

老當益壯。寧知白首之心。　窮且益堅。不墜青雲之志。

釋義　老壯。禮記には七十を老と云ひ三十を壯と云ふとある。尤も普通に年寄りと若い者といふ意にてよし。併し此處では壯の字は動詞てあるからサカンナリと讀むべし、盛の意なり。○白首。白髮頭と云ふこと。老人のこと。○青雲。

青雲即ち蒼空は高きもの故、朝廷に仕へて高位高官を得ることに喩へて云ふなり。

通解　人は年老ゆれば却て益〻元氣旺盛なるべし。我は如何に老人になつても世間の人が白首になると直きに氣力衰弱して萬事に引込み思案になる樣な眞似をせぬ。又た窮命せば却て益〻其志を堅固にすべきてある。我は如何なる困難に遭遇するとも此儘ては朽ち果てぬ、朝廷へ出て滿腹の經綸を行ふの素志を捨つる樣なことは決してせぬのである。

酌貪泉而覺爽。　處涸轍以猶歡。

釋義　貪泉。今の廣東省廣州府の南海縣にあり。一名を石門水と云ふ。傳說に此水を飲めば廉潔なる人も其性を變じて貪慾となるとのことてある。處が昔、呉隱之と云ふ人ばかりは此水を飲んでも其樣なことが無かつたと云ふことてある。今其故事に就て少しくお話を致さう。呉隱之は晉朝の人て字を處默と云ひ濮陽の人てある。廣州の刺史に任ぜられて赴任した時に貪泉と云ふものがあることを聞きて先づ其處に至り數杯の水を飲みて一詩を賦した。其詩は

古人云此水。一歃懷千金。試使夷齊飲。終當不易心。

と云ふのであるが、此の大意は、此の貪泉の水を一たび飲まうものなら如何に廉潔なる人でも直に慾心がむら〳〵と起りて千金を得たいなど〻途方も無いことを思ふ樣になると、古來言ひ傳へて居るけれども、若し試に伯夷叔齊（殷の末に於ける清廉潔白の君子にして周の武王が殷を滅して天下を奪ひたるを怒り義に於て周の米を食はずとて首陽山に立籠りて終に餓死せし人なり。夷は兄で、齊は弟なり。）をして此水を飲ましめたならば夷齊は決して其の清廉の心を移し易へぬであらう。ツマリ此水を飲んで其性の移易する樣なのは其人が薄志弱行の徒であるからである。果して我も亦いかでか此水の爲めに我性を易ふることあらんや、と云ふことである。○涸轍。轍はワダチと訓ず。車の通過したる跡へ殘せる車輪の痕を云ふ。其の車轍で土地の窪みたる處へ雨水などの溜滯したる者が日光の爲めに段々と乾きたるを涸轍と云ふのである。此處の涸轍云々は莊子の書中から出たる故事である。莊子は貧乏であつたから或時に監河侯即ち魏の文侯の許へ米を借りに往つた。すると侯の曰く、如何にも承知したが併し今暫らく待つと我が領地からして貢金が納る故、其後に三百金を貸しましようと。蓋しこれは文侯が莊子に貸すことを嫌つたから「今少し許(ばかり)のものを貸して上げるは容易(たやす)いことであるけれども、夫れよりは後日に澤山と用立てましよう」と挨拶を仕たのである。處が莊子は怒て曰く『私が此處へ參る時に途中で私を呼ぶものがあります故、誰であるかと見廻はせば路上の車轍の中に一尾の鮒が居りました。其處で私は鮒に向て「汝は何者じや」と云ひますと鮒の申しますには「私は東海の水神の臣である、然るに今は旱魃に逢て甚だ難澁を致して居るから願くは君は二三升の水を此處へ運びて我を活かし給はれよ」と。我また之に答へて曰く「如何にも承知せり、併し我は是れから南方呉越に遊說せんとて往くところである故、彼地へ行きてから西江の大水を此處へ送り越して汝を廣き水中に游泳させて遣ろう」と曰ふたるに鮒は大に怒りて曰く「今我が住所の水が涸て來たから死を免れんが爲めに斗升の水を求めて救助を願ふたのである。時を經ての後ならば假令百千萬石の水を貰ふとも何の役にも立たぬのである。詰らぬことを言て居るより我を乾魚屋の店へ求めに行く方がよかろう」と罵りました』とて大に文侯を風辱したと云ふことである。

通解　既に君子の心を心として貧に安んずる以上は（前文に應ず）たとへ我今、如何に貧乏すればとて決して利慾に迷ふ樣なことはせぬ。猶ほ彼の呉隱之の如く貪泉の水を飲むも慾心を起さず却て心中清爽として、すが〳〵しきを覺ゆるのであ

る。又既に天命を知れる以上は如何樣なる困難に遭遇するとも決して之を歎き悲まぬ。今我は朝廷より追放せられ俸祿に離れて難義をして居るのは恰かも車轍に住める鮒魚が旱魃に逢ふて水を失ひ難澁をして居るのと同一の境遇にあるのであるけれども徒らに悲歎怨嗟せぬのみならず、却て是れ天命なりと覺悟して心裡に慰安する所があるのである。

北海雖賖。扶搖可接。東隅已逝。桑楡非晩。

【釋義】北海云々。此の句は莊子より出でたるものである。莊子の書に北冥有魚。其名爲鯤。鯤之大。不知其幾千里也。化而爲鳥。其名爲鵬。鵬之背。不知其幾千里也。怒而飛。其翼若垂天之雲。是鳥也。海運則將徙於南冥。南冥者天池也。齊諧者志怪者也。諧之言曰。鵬之徙於南冥也。水擊三千里。摶扶搖而上者九萬里。去以六月息者也。と書いてある。この北冥とは北海のことである。○賖。遥遠の意。ハルカナリと訓ず。○扶搖可接　扶搖の二字に就ては莊子の書にも色々に説明してあるが、要するに是には六ッかしき説明はいらぬのである。扶搖即ち暴風と心得れば夫れて宜しいのである。但しこれに就ては漢文の讀み方に就て聊か讀者の參考に資するに足る所のものがあるから之を申述べよう。さて扶搖は爾雅の釋天篇風雨部に扶搖謂之猋とあつて其註に暴風從下上とあるそして其疏には李巡云。扶搖暴風從下升上。故曰猋。猋上也。孫炎曰。廻風從下上曰猋。とある。猋とは飇風のことで、即ちハヤテのことである。處が此の扶搖が飇のことであることは別にふかい意味のあるのでは無いのである。それは扶搖の反が飇となるのである。元來漢字には反切法と云ふものがあるが、それは諸君が既に御承知のことと思ふから今は説明をせぬが、此の場合に於てフ(扶)の音とエウ(搖)の音とを合する時はヘウ(猋即飇)と云ふ音になるのである、即ち扶搖と二字に書くも猋と一字に書くも其の音に於ても其の義に就ても同一なのである。此の如く二聲を合せて一音となすの例は他の漢字にも澤山あるのであるから諸君の參考までに左に其の數例を示さう。

句瀆＝穀　左傳の桓公十二年の經文に盟于穀丘とあるが其の傳文には盟于句瀆之丘と書てある。これは句瀆の反が穀と云ふ音になるのである。即ちク(句)の音とトク(瀆)の音とを反切すればコク(穀)と云ふ音になるのである。ツマり句瀆丘と云ふも穀丘と云ふも同じことなのである。

死覇＝朔。漢書の律歷志に死覇朔也とある。覇の字は君長とかハタガシラと

云ふ意のときはハと云ふ音であるけれども、月體の黑點と云ふ意のときはハクと云ふ音である。故に字彙には覇魄也とある。即ち朔のことを死覇或は死魄と云ふのは死と覇との兩音の反が朔の音となるからである。

俠累＝傀。史記に韓俠累とあるを戰國策には韓傀と書いてある。これも俠累の反が傀となるので、何れも同人なのである。

不律＝筆。爾雅に不律謂之筆とあって、其註に蜀人呼筆爲不律也とある。之は不と律との兩音の反が筆となるので何れでも同じものである。

蚯蚓＝螼。蚯と蚓との反は螼となるのである。そうして蚯蚓も螼も共にミヽズのことである。

何不＝盍。盍の字を「なんぞ……………せざる」と訓むことは諸君の既に承知せらるゝ所である。盍各言爾志或は盍反其本等の例は漢文を讀む際に常に見出さるゝ所である。然るに盍は何と不との二音の合したるものと悟って見れば、盍の字を「なんぞ……せざる」と二度に讀む譯が能く分るでありませう。

之乎＝諸。論語に山川其舍諸とあるは山川其舍之乎と同じとである。孟子に文王之囿方七十里。有諸とあるは文王之囿。方七十里。有之乎と同じことである。

王引之の經傳釋詞には諸之乎也。急言之曰諸。徐言之曰之乎とあるが、これも畢竟急いで言ふ場合には之と乎との二音が諸の一音につゞまるの理である。盍と何不との關係も之と同じことに見て差支ないのである。

却說莊子には摶扶搖とあって鵬が飆風に乘じて羽打ちて九萬里も高く舞ひ上ると書いてあるが、此の扶搖可接も猋風に乘じて北海の遠きに至ることを得べしと云ふ意である。○東隅云々。これは後漢書の馮異列傳に載つて居る語から出たものである。前漢の末世に王莽が簒立し、天下が麻の如くに亂れ、賊徒蜂起したる時に當りて、漢の王族の劉秀と云ふ人が義兵を擧げた。其時に馮異は劉秀に從て處々で戰爭をしたが、始め河南の回溪と云ふ處で赤眉の賊と戰て大に敗北したけれども、後に澠池と云ふ處での戰爭で大に賊軍を擊破したので劉秀（光武帝）は大にこれをよろこびて馮異を褒めて始雖垂翅回溪。終能奮翼澠池。（垂翅は鳥が戰合ひに負て其翼を收めてへコレルこと。奮翼は戰ひに勝ちて鳥が羽ばたきをして威を示すこと）可謂失之東隅。收之桑楡。と云はれたとのことである。○東隅。東方と云ふこと。東方は日の出る方であるから朝と云ふ意になるのである。○桑楡。日の沒する方である。即ち晩景又は暮れ方の意である。

通解、北海が如何に遙遠なりと雖ども猋風に乘じて至ることが出來るのであ

る。我、今流浪の身となりて南方蠻夷の境に漂泊して居て、北の方に朝廷(長安)を遠望するも、恰かも北海の遠きを望むが如くて、迚も往かれさうも無いのであるけれども、彼の大鵬は飈に乘じて羽撃て九萬里も飛び上ると云ふから、我も今後更に長安に歸りて朝廷へ出ることの出來ぬと云ふことは無いのである。又た我が今や不測の罪を獲て少壯の時期を邊地に過さねばならぬやうになつたのは東隅已に逝と云ふものであるが、併し幸に未だ老耄の年齡でなくつて、丁度朝が過ぎ去つても猶ほ晩方までには餘程の時刻のあるが如くであるから、其内には如何にしてなりとも再び長安の京都へ歸りて見たいものである。

孟嘗高潔。空懷報國之心。阮籍猖狂。豈效窮途之哭。

釋義 孟嘗。字を伯周と云ひ後漢の順帝の時の人である。矢張り此地即ち會稽郡に生れて操行純潔の人であつた。嘗て合浦の大守に任ぜられたが、合浦と云ふ處は海濱にありて五穀が出來ぬので、其地の民は海中に入りて眞珠を採て商賈をして居つたのであるが、前任の大守が貪婪暴虐であつた爲に眞珠が皆な遙かに南方の交趾の海へ逃げて行つた。(これも怪しい話であるけれども後漢書の本傳にあるまゝを記するのである。)處が孟嘗が大守となつて其の政令が正しかつたので、其德に感じて眞珠が又た合浦へ還つて來たので、一時衣食の資を失つて難儀をした合浦の民は蘇生の思をしたとのことである。然るに其後桓帝の政治の紊亂を惡んで、官にあることを厭ひ、吏民の止むるのを振り棄てゝ夜逃げして田舍に隱れ住ひて自ら耕作をして世を送つたとのことである。因に戰國の時代に孟嘗君と云ふ有名な人があるが、それは姓は田、名は文と云ふ人で、此の孟嘗とは全く別人である。○阮籍。字は嗣宗と云ふて晉朝の人である。性質卓犖不羈て老莊の學を好み、常に酒を飮みて放縱を極めて居つた。或は數月間も戶を閉ぢて讀書に耽るかと思へば、又た山野を逍遙して家に歸ることを忘れて居ることもあつた。或は一人で飄然と車に駕して山に入り段々と徑路に入りて車輪の通らぬところまで行くと、「アヽ、詰らぬモウ是より先へは往かれぬのか」と云ふて大聲で哭泣して返つて來たとの事である。因に晉の世には此樣な人が澤山あつて、阮籍、阮咸、嵇康、山濤、王戎、向秀、劉伶の七人を世に竹林七賢人と呼んで居る。○猖狂。放蕩無賴で、世の禮儀作法を顧みず、氣隨氣儘なる振舞をするを云ふ。

通解 昔し孟嘗は其の性行極めて高潔なりしも終に顯官に榮達することを得

ずして、空しく國恩に報ぜんとの誠意を抱きながら、窮澤に隱居して其生を終つたが、我も亦た君恩に報じたい誠心に變りは無いけれども、終に此儘で不遇で一生を終ることになるのであるか。又た阮籍は放縱で、時に慢然と車を驅りて途の窮まるに過へば痛哭して返つたとのことであるが、我は如何に世を憤り身の不遇を歎くとても阮籍の眞似をしようとは思はぬのである。

勃三尺微命。一介書生。

[釋義] 三尺。昔は尺を以て年を見たりしものである。それは二年半を以て一尺としたのである。五尺童子と云ふ語があるが、之は十二歲半に當るので、大體は十三四歲のものゝことを云ふのである。論語に六尺之孤と云ふことがあるが、之は十五歲位の孤のことである。三尺と云へば八九歲のことであるが、王勃は其樣な幼童で無いのである。これは全く己のことを謙遜して少く云ふたものである。○微命。微賤なる天命を受けたるものと云ふ意。○一介。一人と云ふこと。○書生。讀書を業とせるものと云ふこと。即ち學者のこと。

[通解] 私は微賤なる天命を受け、朝廷からは放逐せられたる年少の一書生に過ぎないものでございまする。

無路請纓。等終軍之弱冠。有懷投筆。慕宗慤之長風。

[釋義] 纓。冠の紐のこと。支那は古より丁度我が神官或は朝鮮人の如くに冠を被むりて之に長き紐を附けて腭の邊で之を結んだのである。○終軍。字は子雲と云ふて前漢の武帝の時の人である。辯舌爽かにして文章も上手であつて、年十八にして博士弟子に選出せられた。續文章軌範にある白麟奇木對は此人の書いた文である。後に諫議大夫となつたが、漢が南越と事あるに當つて終軍は自ら請ふて曰く、「願くは長纓を受けて私が南越へ行き、必ず其の纓を以て南越王與を擒にして連れて參りませう」とて終に南越へ往きて其王を說諭したが、南越王は之に服して其國を擧げて漢に內屬せんとした。處が南越の宰相の呂嘉と云ふものが之に反對して、兵を擧げて王及び漢の使者を殺した。終軍は此時に年漸く二十餘であつたから世に之を終童と云ふて居る。○弱冠。禮記の曲禮に「二十曰弱冠」とある。二十歲のこと。○等。等と云ふからには王勃も二十歲である樣に思はれるけれども實際に於て勃は二十歲よりは數歲の上である。終軍の如くに年若き

身であると云ふこと。○投筆。魏徵の詩にも「投筆事戎軒」とあつて、投筆と云ふとは文事を捨てゝ武道に從ふとの意に使用される語であるが其本は後漢書にあるのである。漢書の著者の班固の弟に班超と云ふがあつた。班超は貧乏であつて人の爲めに筆耕をすることを業として居つたが、一日筆を投じて慨然として曰く「大丈夫當さに傅介子張騫に效ひ功を異域に立て以て封侯を取るべし、安ぞ能く久しく筆硯の間を事とせんや」と。左右の人之を笑ふたので超は「小子安んぞ壯士の志を知らんや」と云ふて之を罵つたが、果して其後に超は西域の五十餘國を征服し其の都護となりて三十餘年の間之を支配して居つたのである。○宗愨。字は元幹と云ふて劉宋（南北朝時代）の世の人である。幼少の時に其の叔父の炳が愨に其志を問ふたら、愨は答へて「願くは長風に乘じて萬里の浪を破らん」と云ふた。長ずるの後に、豫州太守となつたが、中々それに滿足しなかつた。終に振武將軍となつて林邑（今の佛領の交趾支那の邊に當る）の方まで征服して洮陽侯に封ぜられた。○長風。大風のこと。

〔通解〕我は終軍の如くに弱年の身であり又た今や南越に赴くのであるけれども、貶謫せられた身分であるから、天子に纓を請ふて功を樹てんとするにも其の便りが更に無いのである。併し班超が慨然として文筆を拋棄して終に大功を異域に樹てた如く、又た彼の大風に乘て萬里の波濤を破らんなどゝ云ふて頗る遠大の志を抱きたる宗愨が終に封侯を得た如くに、我も亦た胸中の勃々たる壯圖は決して消磨されないのである。

舍簪笏於百齡、奉晨昏於萬里。

〔釋義〕簪笏。簪はカンザシのこと。又た笄のこと。冠を被むりたる時、之を持たすが爲めに頭髮に挿すものなり、笏はシャクと訓す。これは位階を有する人の束帶の時に持つものであつて古は其の製作にも規定があつた。即ち王の持つものは玉で造り、諸侯のは象牙、大夫のは魚鬚、士のは竹で造つたのである。而して此の面へは君王の敎命或は君王へ申し上ぐべきことを書き付けて忘るゝに備へたものである。簪笏は冠を着け簪をさし笏を持つことゝて朝廷の禮服を着けることであるから舍簪笏と云へば仕官を罷めて朝廷を退くことになるのである。○百齡。人間の一生の壽命の大數を云ふ。○晨昏。禮記に晨昏定省と云ふことがある。これは子の親に事ふる禮儀であつて、即ち晨には早く起きて親の御機嫌を伺ひ昏には親の寢處を定めて安泰ならしむることを云ふのである。○萬里。遠

方を示すための語であつて物の父の兩時が京都から萬里も隔ちたる交趾に居ることを云ふのである。

【通釋】併し我は今や罪を獲て放逐せられたのであるから、先づ以て我が一生は仕官の望みの絶えたと云ふ譯であるから。是から遠く萬里の外にある父の兩時のお側へ行きて朝夕に孝養を盡さうと思ふのである。

非謝家之寶樹。接孟氏之芳鄰。

【釋義】謝家云々。晋朝のときに謝安と云ふ英傑があつて、其の兄の子に謝玄と云ふのがあつた。玄は字を幼度と云ひ、文武に長じたる偉人であつて、嘗て前秦王の苻堅の大軍を淝水で殲滅したことがある。玄が少き時に叔父の安に可愛がられて居たが、或時に安が「汝等は能く勉强して天晴れ功名を立てよ、余は汝等が立派なる人物とならんことを希望する」と云ふたら、玄は即座に答へて「叔父樣の申されたることは譬へば芝蘭(香の高き植物)玉樹(立派なる貴き樹木)を我が家庭に生ぜしめようと仰せらるゝ樣のことで御座いませう」と云ふたとのことである。○寶樹。前聯の芝蘭玉樹を指すなり。○孟氏云々。孟子の母は有名なる賢者で其子の教育の爲めに居住すべき場所を撰んで度々轉宅をしたとのことが漢の劉向が選述したる列女傳に載つて居る。孟子は少き時に其父に先だゝれて母の手に育てられたのであるが、始には郊外の墓地の近所に住つて居たるに、常に葬式の眞似事をして遊んで居たから、其母は思ふやう此樣な所に長く住つて居ては子供の爲めにならぬとて、市街の中へ轉住した。處が今度は孟子が商人の眞似をして品物の賣買や値段の懸引などをして遊戯とした。其處で其母は又た此處も永住すべきところでないと思ふて、更に學校の傍へ轉居をした。然るに孟子は今度は學者の行爲を見習ふて書を讀誦したり禮儀を行ふ眞似をして遊び事をしたので、母親は大に喜び其居を其地に定めて終に其子を大學者に仕揚げたと云ふことである。孟子の本名は軻と云ひ、子とは男子の美稱で、尊敬して云ふ語である。古は學德高く人の師と仰がれたる人を指して某子と呼んだのである。孔子、老子、列子、朱子など皆な其例である。芳鄰とは孟子の母が其子の爲めに擇びたる善良なる鄰處と云ふ意である。

【通解】謝玄は謝氏の家に生れて其家門を飾るの寶樹とも評判せられたけれども、そは到底吾の及ぶ所では無い。吾は又た孟母が其子の爲めに芳鄰を擇びたるが如くに注意深き親の養育を受けたのであるけれども迚も孟子の如き大賢人と

なることが出來ぬのである。

此の下句は難解の句である。之に就て古から種々の説がある。或は勃が交趾へ行きて芳鄰に接せんことを望むの意と解釋するものもあれど交趾の地は蠻貊の邦として漢唐の人が輕蔑して居たところであるから、其意が通ぜぬのである。勃の母が如何なる操行の人であつたかは今知ることを得ぬけれども上記の如く解する方が穩當であると思ふから斯く記して置くのである。

他日趨庭、叨陪鯉對。今晨捧袂、喜託龍門。

【釋義】他日。ある日と云ふこと。○趨庭。支那では古は家を造るに南面して建る。その堂即ち家の階の前の空地を庭と云ふ。即ち門と堂との間である。花丼樹石を植ゑ並らべたる園庭とは聊か其意を異にして居るのである。又た趨は疾く行くことである。之は身分の上なる人の前を通過する時の禮儀である。長者の居らるゝ前を徐々と練り歩くのは無禮である。夫故に趨は疾く行くことであるけれども馳せて駈け出すのとは意義が違ふのである。○趨庭云々。これは論語の季氏篇に出でたる故事である。陳亢と云ふ孔子の弟子が或る時に孔子の子の鯉に尋ねて曰く「お前さんは先生孔子からして何か異つたお話をお聞きになつて居ますか。肉親のお子のことであるから特別の敎訓のあることでしよう」と。鯉が答へて曰く『イヤ別に異つた事を聞いた事は無い。嘗て我父孔子が一人で堂上に立て居られた時に、其前を趨りて庭を過ぎりたるに、「汝は詩經を學んだか」と父が問はれたから「未だ學びませぬ」と對へたら「詩と云ふものは人情に本づき事理に通達したものであるから能く之を學んで研究せねばならぬぞ」と敎へられた。其處で私は詩經を講究しましたが其後に又た我父が一人で堂上に立て居られた時に其前を通りたるに、父は「汝は禮を學びたるか」と問はれたので、私は「まだ學びませぬ」と對へた。すると父は「經禮三百曲禮三千と云ふて禮は人の行爲動作すべき所以を巨細となく制定せられてあるのであるから、其の德性を修養するには是非とも禮を學ばねばならぬ」と戒められたから、夫からして私は禮を學習しました』と陳亢に話しました云々とのことである。○叨。ミダリニと訓む。身分不相應と云ふ意にて、勃が謙遜して言ふたことなり。○陪。隨伴の意。叨陪は及びも付かぬことながら孔鯉の眞似をすると云ふこと。○鯉對。鯉が孔子に對えたる所と云ふこと、即ち前記の事實なり。對は自分より目上の人に向て答ふる時に用ふる

字なり。鯉は孔子の子で字を伯魚と云ふたが、孔子に先ちて死した。鯉の子が孔伋(字は子思)で、前に述べた孟子は子思の門人に學んだと云ふことである。○今晨。今日と云ふこと。○捧袂。貴人に對面する時兩手を擧げて之を拜する。その時に兩の袂を捧ぐることになるから捧袂と云ふ。つまり威儀を修めて貴人に謁することである。○龍門。これは漢の李膺の故事である。李膺字は元禮と云ひ後漢の桓帝靈帝の時代の人である。膺は其人となり淸廉峻直で當時の貪婪無道の官吏を彈劾排斥した、たとへ寵貴權門の戚族と雖も少しも假借せなんだ。荀爽は當時の學者で他日三公の高位にまで上つた人であるが、嘗て膺に謁して其御者と爲つた時に大に之を喜んで「今日李君に御たることを得たり」と云ふて自分の誇りとしたとのことである。本文の始にあつた陳蕃と幷べ稱せられて、膺は實に當時の士人に崇仰せられたのであつて、そして膺は世人が皆な利慾非道にのみ走れるを惡みて之と交ることを嫌ふて、成るべく交際を世間に求めぬ樣にして居たから、若し當時の士大夫の內で膺と交際するものがあれば、世人は之を羨みて登龍門と云ふたとのことである。さて龍門とは今の山西省の絳州河津縣にあつて、古へは此の河津縣を龍門と云ふたのである。此の龍門に河水の落下せる所があつて、魚鼈の類は其下までは來るけれども、それより上流へは上ることが出來ぬのである。處が此の龍門の下へ集まり來れる澤山の魚類の內で若しも之を上り得るものがあらば其者は鱗介の長たる龍に化すると云ふことである。登龍門と云ふ語は是から出てたる語である。猶ほ序に言ふて置くが龍門は括地圖及び辛氏三秦記共に絳州河津縣に在りと記してあるけれども、交州記には交趾封谿縣に在るとしてある。併し余は前者に從ふを正しと信ずるのである。

【通解】嘗て余(勃)は恰も孔鯉の如くに家庭に於て父に陪侍して其敎を受けたものであるが、今日は恰も彼の後漢の李膺に當時の人が交際することを得たる場合に猶ほ魚が龍門に登ることを得たるが如き喜びを爲したのと同じく、余は玆に衣袂をかゝげて都督閻公に面會することを得たるを榮とし喜ぶのである。

楊意不逢。撫凌雲而自惜。鍾期既遇。奏流水以何慙。

【釋義】楊意不遇。これは前漢の武帝の時代の司馬相如と云ふ人の故事である。司馬相如は字を長卿と云ひ蜀の成都の人で文才に長じ、殊に賦を作ることが上手であつた。楊意とは楊得意と云ふて矢張り蜀の人である。漢文では、殊に詩賦で

は其の語調を整へる爲めに、此の如く三字の姓名の人を二字に略記することがあるのである。さて楊得意は前漢の武帝の朝に、狗監即ち獵犬を預る職を勤めて居たが、或るときに武帝が相如の作つた子虛ノ賦を讀まれて其の文章の面白さに感歎せられ「朕は斯る名文の作者と時を同うして生れざるを遺憾とする」と仰せられたので、楊得意は「其の子虛ノ賦は臣が同邑の友人の司馬相如と云ふものが作つたもので御座ります」と申上げたので、武帝は大に驚かれて早速に相如を呼び出して「此賦は汝の作りたるものか」とお尋に及んだら、相如は「左樣で御座ります」と答へて、猶ほ即時に天子游獵ノ賦を作りてお目にかけた。武帝はこれを御覽になりて大に喜ばれ相如を官に採用せられたが後に中郎將に陞進し又た西南夷に使して功を樹て之をして漢に内附せしめたので益々武帝の寵遇を得たのである。斯く相如が其文によりて榮達を得たのは全く楊得意の推擧に逢ふたからである。我は不幸にして此の推擧に逢はぬと云ふ意である。○撫。ナテルと云ふ義で、其文を繰返し繰返して愛讀することとである。○凌雲。相如が大人ノ賦と云ふのを作りて武帝のお目に掛けたるに、武帝は大に喜ばれて飄飄有凌雲之氣。似游天地之間意。と云はれたので、或は之を凌雲ノ賦とも云ふのである。此の子虛ノ賦、游獵ノ賦、大人ノ賦等は皆な金玉の文字を以て滿たされて居るて引用せんと思へど、長文に過ぎるから割愛して置く。史記、漢書、文選等の書に載つて居るから就て見玉へ。○鍾期云々。此は伯牙、鍾子期の故事である。鍾期とは鍾子期のとである。伯牙も鍾子期も共に周の時代に楚の國に生れたる、有名なる音樂家であつて、伯牙は、殊に琴の妙手であつた。伯牙が高山に登つた心持ちにて琴を彈ずると鍾子期は之を聞て、能く其の琴の音を聞き別けて之を評じて曰く「善哉乎、琴を皷するや、彼の音色は巍々乎として太山の如し」と、又、伯牙が流水の滔々たるに其志を留めて琴をひくと、鍾子期は能く其の琴音を識別して「善哉乎琴を皷するや彼の琴の調は洋々乎として流水の如し」と言ふた。本文に流水と云ふ語のあるのは此事を言ふたものである。去れば鍾子期が死んだ時に伯牙は大に悲歎し「最早や世に我が琴音を聞き別けて呉れる人が無くなつた」と云ふて其琴を破り、弦を絶ちて、其後終身また琴を彈ぜなかつたと云ふこととである。此事は列子の湯問篇や、淮南子の修務訓や呂氏春秋等に載つて居るのである。因に此事よりして、人の眞意を能く酌み分けること、又は能く其心を知り合ひたる親密の朋友を知音と云ふのである。○奏。カナヅルと。即ち音樂をなすこと。樂の一曲を終りて端を更むるを奏と云ふのである。○恥。耻也

はづること。

〔通解〕我は彼の司馬相如が楊得意の爲めに推薦せられたるが如きことに逢はないからして、常に徒らに相如を羨みて其の凌雲の賦を誦讀して自分の不遇を歎息して居たのであるが、今は閻公と云ふ知音に遭遇したのであるから、恰も彼の伯牙が鍾子期の爲めに其の全力を傾倒して流水の曲を奏したる如くに我も亦た閻公の爲めに腦漿を絞つて此文を作つたからとて何の恥づる所も無いのである。

嗚呼。勝地不常。盛筵難再。

〔釋義〕嗚呼。歎息の辭にて、文氣を轉じて更に說き起すなり。○勝地。形勝の地。景色のすぐれたる土地のこと。

〔通解〕アヽ、景色の勝ぐれたる地が何時までも永世に存在するとは限らぬ。又た盛大なる燕會にはモウ一度出遇ひたいと思ふとも必らず左樣になるべきものでないのである。

蘭亭已矣。梓澤丘墟。

〔釋義〕蘭亭。晉の時代に王羲之と云ふ人があつた。（五五頁參照）王羲之は字を逸少と云ひ右軍將軍の官に任ぜられたる故に、又た王右軍とも呼ばれて居る。文章を能くし議論も達者であつたが特に能書を以て有名である。羲之は又た會稽內史となつて之に赴任したが、其地は今の浙江省紹興府の邊である。其處の小陰縣に蘭亭と云ふ建築物があつた。蓋し嘗て吳郡の太守謝勗が蘭亭侯に封ぜられたから其名を取て此亭に付けた者である。さて羲之は晉の穆帝の永和九年三月の上巳（三日）に此の蘭亭に於て同友四十三人（或は四十一人とも云ふ）と曲水の宴を張り酒を飲み詩を詠じて大に淸興を盡した。此會には當時の群賢招かれて皆な集まつたとのことであるが、其內で十二人は詩二首を作り十五人は一首を作り十六人は一首も出來なかつたので罰酒三杯を飲まされたとのことである。羲之の書いた蘭亭記と云ふものがあるが、頗る有名なるもので、古より書家は好んで此の有樣を畫き、多くの家の楣間壁上に揭げられて居るのである。○梓澤。金谷園のことである。此園は今の河南省河南府洛陽縣の地にあつて、石崇の作つたる處である。石崇は晉の代の人で字を季倫と云ひ非常に奢澤を極めたのであるが、當時の權臣賈謐、裴岳等の二十四人（二十四友の名がある）を此園に招待して酒宴を催し豪華を盡くした。其時

に諸客は皆な庭園の風景に對して詩を作つたのであるが、詩の出來なかつた人は罰科として三杯宛の酒を飲まされた。而して罰杯を飲まされたものが六人あつたとのことである。因に此の罰杯と云ふことは極めて古より行はれたることである。即ち禮記にも射禮の時、即ち左右の組を分けて競射をする時に、勝つた方の人が大なる杯に酒を酌みて負けた方の人に、罰杯として之を飲ましめると云ふことが書いてある。論語に其爭也君子矣とあるは此事を云へるものである。さて金谷園詩序と云ふものがあるが、當時其の園の立派なりしことと及び石崇が豪奢の有樣が想像せらるゝに足ると思ふから其一部分を次に摘錄して示さう。(王右軍の蘭亭記は人口に膾炙せられて居るから此に抄錄しない)

余以元康六年從太僕卿出爲使持節監靑徐諸軍事。征虜將軍有別廬在河南縣界金谷澗中。或高或下。有淸泉茂林衆菓竹栢藥草之屬。莫不畢備。又有水碓魚池土窟。其爲娛目歡心之物備矣。時征西大將軍祭酒王詡當還長安。余與衆賢共送往澗中。晝夜遊宴。屢遷其坐。或登高臨下。列坐水次。時琴瑟笙筑合載車中。道路並行。及狂令鼓吹遞奏。遂各賦詩。以敘中懷。或不能者罰酒三斗。

通解 嗚呼勝地は常ならず、盛筵は再びし難し。今や此の滕王閣の景勝の地に於て斯る盛大なる淸筵が催されて誠に結構なることであるが、顧みれば嘗て王羲之が群賢を集めて高遊を爲した蘭亭も跡方も無くなり、又た石崇が盛宴を張つた梓澤の地も僅かに其の廢殘の遺址を留むるばかりてある。

臨別贈言。幸承恩於偉餞。登高作賦。是所望於群公。

釋義 贈言。此の一篇を閻公に贈るなり。○承恩。閻公の手厚き接待に預りたること。○偉餞。前にありたる勝餞と同義なり。○登高。梁の吳均の續齊諧記に汝南桓景隨費長房遊數年。長房謂曰。九月九日。汝家中當有災。宜急去。今日家中各作絳囊。盛茱萸以繫臂。登高飲菊花酒。此禍可除。景如言。舉家登山。夕還見。雞犬牛羊一時暴死。今世九日登高始於氏。とあるが五雜俎には九日佩茱萸。登高飲菊花酒。相傳以爲費長房敎桓景避災之術。余按。戚夫人侍兒賈佩蘭在宮中。九月九日食蓬餌飲菊花酒。則漢初已有之矣。不始於桓景也。とある。兎も角九月九日即ち重陽の節に高所に上りて酒を飲むとは古代よりの風習であるのである。○所望於群公。列座の諸公より所望せられたからであると云ふこと。諸公が皆な辭退したので勃が引受けて文を作ることになつたのであ

るから斯く云ふのである。此句數解あり、或は閻公が衆客に作文を望むことゝ解すれども此の四句はみな勃を主として解せざれば當らぬ故、閻公のことゝ見るべからず。又た或は勃が衆客に作文を望むことゝも解すれども、已に前に勃自ら臨別贈言と云へるを見れば勃が自分で文を作り上げながら更に勃が諸公に作文を望むと云ふべき筈なきなり。尤も勃自らが群公に望まると云ふことは聊か謙德を欠くの嫌なきにあらざれど、最初に說明した通り此文は勃が年少氣銳の元氣で所謂一氣呵成に遣つてのけた者であるから此位のとは差支ないと思ふのである。

通解 圖らずも此地に來つて、僥倖にも斯る盛筵に於て御馳走になりまして、今や宴會も終りとなりて別を告げんとするに臨んで此序を以て閻公に差上げまする。斯く余が高臺に上りて賦を作りたるも是れ實に諸公の御所望に逢ふたからのことでありまする。

敢竭鄙誠。恭疏短引。

釋義 鄙誠。鄙は鄙陋拙劣と云ふこと。我が誠實といふを謙遜して鄙誠と云へるなり。○短引。引は文章の一體である。文體明辨によれば序の如くにして稍、短簡なるものである。そうして此の引と名づけられたるものは、遠く古く後漢の班固の文にもあるけれども少しく其の趣が違ふて居る。引の體は唐の代から始つたものであると書いてある。此の文は決して短かいものとは云はれない。こゝに短引と云へるは四六文として鄙誠に對する語であつて、拙劣なる引體の文と云ふ意である。○疏。記す或は述べると云ふこと。

通解 そこで私は貴顯先輩諸名士の前をも憚らず、敢て不束ながらも、此の鄭重なる饗宴に列することを得たる感謝の誠意を傾け盡くして、謹みて此の拙き序文を認めました。

一言均賦。四韻俱成。

釋義 一言。一句のこと。○賦。賦と云ふ一種の文體あれど、此處は動詞に用ひらる。賦とは感興の情を詩句に述ぶることなり。○四韻。次記の詩にある舞、雨、秋、流の四を云ふ。詳しくは後に述ぶべし。

通解 列座の諸公は文を作らざるのみならず、又た詩をも作られぬ故、我は玆に上文を草すると共に先づ一句を賦し、それから引續きて此の八句四韻の詩一篇を

仕上げました。

滕王高閣臨江渚。佩玉鳴鑾罷歌舞。畫棟朝飛南浦雲。朱簾暮捲西山雨。閑雲潭影日悠悠。物換星移幾度秋。閣中帝子今何在。檻外長江空自流。

釋義 佩玉。高官の人の腰に佩る玉のことで詩經には佩玉鏘々とあつて、其人の歩行するにつれて其玉が相觸れて鳴るなり。○鳴鑾。鑾は鈴である。瑞和の鳥と稱せらるゝ鸞の鳴聲に似たる清しき音を發する鈴の名である。君王の馬車には此の鑾鈴を飾り付けたのである。○畫棟。畫を描き彫刻を施したる立派なる棟のこと。○南浦。洪州にありて船舶の集まり泊るところ。○西山。これも洪州にありて南望山或は厭泉山と云ふ。○幾度秋。幾許の秋を經たるかと云ふことで、ツマリ幾年を經たと云ふことである。此の幾度秋は一本には度幾秋とある。○檻。欄干のこと。てすりのこと。

通解 高く聳えたる滕王閣は江渚に臨みて建てられて居る。佩玉鳴鑾の盛儀て開かれた宴席が既に終りて歌舞も罷んだ。南浦の空からして朝な／＼に飛び來る雲は此閣の畫棟の邊にたなびき渡り。晩景に及んで、赤く彩色せる華麗なる簾を捲き上ぐれば西山の方より降り來る雨が斜陽に映じて一段の風光を添へる。無心に大空を往來せる雲は深淵の水底に其影を寫して常に悠々閑々たる雅趣を呈して居るが。星宿は時々に其所を推移し、物象は刻々に其形を變化して、嘗て此閣が漢代に創建せられてより幾許年を經たことであるか。此閣の創立者たる漢帝の子の元嬰は今や何地に居らるゝぞ。但欄干の外には長江の水が、其樣のことには何等の關係する所なく、滾々として晝夜の別なく自然に流れ去り流れ來つて居るのである。

此詩前の四句は風景を敍し後の四句は感慨を述べてある。其間に於て意味が轉換して居るから韻も換へられてある。即ち前の四句に於て渚は上聲の語の韻字で舞雨の二字は上聲の麌の韻字である。然るに語韻と麌韻とは古詩に於ては通用せらるゝのであるから同韻と見做して差支ないのである。又た後の四句に於て悠、秋、流の三字は共に平聲の尤韻に屬せる字である。斯く八句の古詩に於て四句づゝ前後二段に分ち、而して平韻と仄韻とを互に用ひたるものは其例が頗る多いのである。唐詩選の中にても宋之問の至端州驛の詩、岑參の花樹歌、衞萬の吳宮

怨等はみな此例てある。

與韓荊州書　李白

李白。姓は李、名は白、字は太白と云ひ、靑蓮と號した。或は山東の人とも云ふけれども、孰れも信を措き難いのである。白は東晉の末葉に王を稱したる西凉の太祖武昭王（名は李暠）の九世の孫であるが、其の先代が隋の世に罪を以て西域に放逐せられ、其後に遁れ歸つて隴西に居つたので、白は其頃に生れたのである。白の生るゝ時に母が長庚星を夢見たとのことで、其兒を白と名づけ且つ太白と字したのである。これは長庚星を一名太白星と云ふからである。白、少ふして逸才あり、已に十才にして詩書に通じ、長じて縱橫の術を喜み任俠意氣を尙び、財を輕んじ施を重んじ。後に任城に客寓し、好んで隱士騷人と交を結び、常に放飮酣醉して山水の間に嘯咏して居つた。韓準、裴政、張叔明、陶沔、孔巢父と徂徠山に在りて日に沈飮して竹溪六逸と號した。天寶の初に玄宗皇帝の召に應じて京師に至り賀知章に面會した。知章は白の文を一見して大に驚き嘆じて「子は誠に謫仙人なり」と云ふたとのことである。次て玄宗に金鑾殿に見えて當世の事を論じ頌一篇を奉りたるに、帝は大に之を喜ばれ特に手づから羹を調へて白に食せしめられた。白は是より帝の寵遇を得たけれども猶ほ屢、飮徒と市の酒家に醉ふて居た。一日帝が沈香亭に坐し觀花の宴を開かれて白を召された。其時白は已に醉ふて眠て居たが、左右の人が之を呼んでも起きぬので、水を以て面を頮ふて漸くに之を醒すと、白は直に筆を援り嘗て思を留めざるが如く婉麗高雅の絕調をスラ／＼と草した。帝益、其才を愛し異數の恩寵を賜はつたのであるが、其の疎豪の性情は終に君側の小人親近の容るゝ所とならざるより、散放自ら修めず、愈、酒を縱まゝにして、賀知章、李適之、李璡（汝陽王）、崔宗之、蘇晉、張旭、焦遂と酒八仙人と稱せられた。杜甫は之に就いて飮中八仙歌を作つて、白に對して李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。と歌ふた。白は斯くして長安にあること數年にして山に還らんことを請ふたので、帝は優詔して金を賜ふて放還せられた。其後白は事に坐して獄に繫がれたが、郭子儀の救解によりて僅かに難を免かれ、夫よりまた四方に放浪して江山の間に悠々自適し、代宗の寶應元年十一月に六十二歲を以て卒した。

韓荊州は名を朝宗と云ひ、韓思復の子である。唐の玄宗の時に荊州の刺史とな

つたが、其の學德頗る高くして「當時天下の人の景慕する所であつた。李白は此書を送りて朝宗に薦擧せられんことを求めたのであるが、其文の奇拔にして、氣品の高邁なるによりて、爾來普く人口に膾炙せられ、苟も學者たるものゝ必らず讀まざるべからざる名文として傳へられて居るのである。

白聞天下談士。相聚而言曰。生不用封萬戸侯。但願一識韓荊州。何令人之景慕。一至於此。豈不以周公之風。躬吐握之事。使海内豪俊。奔走而歸之。一登龍門。則聲價十倍。

［釋義］談士。談論を事とするの人士と云ふこと。○萬戸侯　萬戸の大邑を以て其の食祿とせる所の諸侯といふこと。前漢書の李廣傳（六六頁參照）には令當高祖世。萬戸侯豈足道哉。とある。又た後漢書の梁竦傳には生當封侯。死當廟食。とある。古は匹夫より起りて榮達して諸侯となることは、苟も男兒たるものゝ大なる面目名譽として之を希望したのである。○景慕。景も慕ふの意である。或は景慕を以て大に慕ふことゝも解するのである。○周公。周の文王の子で武王の弟たる周公旦のことである。周室の創設に當り、禮樂刑政、百般の制度を定め、後人より聖人と尊崇せらるゝ所の大偉人である。○吐握。周公は魯の國に封ぜられた。然るに兄の武王は蚤く死し、其子の成王は猶ほ幼稚であるから、周公は朝廷に止まりて成王を相けて政を攝し、而して魯國へは其子伯禽を遣はして、自分に代りて其封地を治めさせた、其時に周公が伯禽を戒めて曰ふには、「我は文王の子で武王の弟で、成王の叔父である。誠に此の天下に於て貴き身分である。併し我は決して之を以て人に驕ろうとは思はぬ。自ら謙讓して賢德の士を迎へんことに汲々として居る。夫故に若し賢人の來りて我を見んと云ふものあらば、我は何事をも打捨てゝ直に之に面會するのである。即ち我が髮を沐ふ時に來らば、洗ひ了るまで待たせては置かないで、其髮を握りながら出でゝ之に應接する。一たび髮を沐ふ間に幾度でも出でゝ之に應接する。又た一たび食事をする間に幾度でも一旦我が口へ哺みたるものを吐き出して、來訪の賢士に應接する。斯の如くにしても猶ほ天下の賢人の心を失ひはせぬかと心配して居るのである。汝は是から魯の國へ行かば、必らず愼んで驕慢の氣を出さずに、能く注意して國民を治めよ」と云はれた。吐握とは吐哺握髮と云ふことである。○登龍門。前譯滕王閣序の第八八頁に詳記せり就て見られよ。○聲價。聲はほまれのこと。聲價は名譽價値のこと。

【通釋】私は兼て斯う云ふことを聞て居りまする。今の世の中で談論をする人士が寄り集れば、人と生れて萬戸侯に封ぜらるゝことは男兒の面目であるけれども、それよりは寧ろ一たび韓朝宗に自分の人格を認めて貰ふ方が難有く思ふと申し合ふて居るとのことである。一體、韓朝宗は何故に斯程までに人をして仰慕せしむるのであるか。豈に古昔、周公が爲されたる如くに、賢者を待遇する爲めには一旦その口へ入れたるものをも吐き出し、今沐ひかけて居る髮も握りたるまゝで之を迎ふる樣にして、それで四海の內の豪傑俊才をして其德を慕ふて悅び勇みて奔走して韓荊州の門に來歸せしむるものではあるまいか。斯くて當世の人士が若し一たび韓荊州の門に詣りて其の識る所となり交際を許さるれば頓に其人の聲價が十倍もえらくなるのである。

所以龍蟠鳳逸之士。皆欲收名定價於君侯。君侯不以富貴而驕之。寒賤而忽之。則三千之中有毛遂。使白得穎脫而出。即其人焉。

【釋義】龍蟠。龍の未だ雲雨を得ずして深淵の中に蟠まり蟄居せるを云ふ。○鳳逸。鳳凰の深山に隱逸して未だ蒼空に飛翔せざるを云ふ。○君侯。韓荊州に對する敬稱である。○毛遂。戰國の際に趙に平原君と云ふ賢人があつた。平原君は名を勝と云ひ、趙の惠文王の弟であつて、趙の宰相も勤めて居て、常に數千人の食客を置いて居た。丁度此の時分に秦が趙を攻に來たから平原君は楚に行きて救援を求めることになつた。時に平原君は其の門下數千人の內からして文武兩道を具備せるもの二十人を選拔して同行しようと仕たが十九人より得られなかつた。其時に毛遂と云ふものが出て、自贊して自ら其身を薦擧した。平原君曰く、士の世に處するは錐が囊の中に入つて居ると其先（錐のはし即ほさき）が直に外へ突き出る樣なものである。才能のある人は必らず何かの機會に其才能が外に見はれるものである。然るにお前は私の門下に三年も居つても、未だ何の評判もなき所を見れば役に立つべき人物とも思えぬ。マア止めた方が宜しかろうと。遂の曰く、イヤ私は今日初めて其の囊の中へ入ろうと云ふのである。私を囊中へ入れて御覧になれば穎（錐の先のとがりたるところ）が必らず突き出ます。中々その切ッ先きが見はれるの段ではありませぬ、ズット突き抜けますぞと。其處で平原君は毛遂をも加へて二十人となし之を引率して楚に往き、趙と楚と同盟せんことを談判したるに、楚王が容易

に承諾をせなんだ。其時に十九人のものは終に何の役にも立たなかつたが、毛遂一人の機智と權略とによりて、楚王をして趙の申出を聽入れしめ、楚と趙とは同盟を結びて、楚が直ちに兵を出して趙を救ふことになつた。毛遂と楚王との問答も鳥渡面白いけれども餘り長くなるから省略する。史記や通鑑は勿論、十八史略等の書にも大體のことは載つて居るから詳しくは就て見られよ。○穎脫。穎は錐の尖りたるところを云ふ。穎脫は錐の先の丸て拔け出すこと。此語は毛遂の言に使遂得處囊中。乃穎脫而出。非特末見而已とあるより出たるものであつて、ツマリ大才を發揮して大功を顯はすことを云ふのである。

通釋　是故に龍鳳の如くに才能の俊秀なる士人にして而かも未だ其志を舒ぶること能はず榮達を得ざるものは、皆な一たびあなたに州郡に面謁をして美名を收め聲價を定めんことを願ふのである、其處であなたが其身の富貴なるを以て賢士に對して驕慢なる振舞をなされず、又た寒貧卑賤の人なるを以て之を輕忽に接待せらるゝことなければ、貴下の門客三千人の多數の中には必らず毛遂の如きものも參集しませう。そうして貴下が私を貴下の門下即ち嚢中に處かれて、私をして恰も錐の穎が嚢中より脫出すが如くなることを得せしめば即ち私は毛遂の如くに大功を顯はしてお目にかけます。

白隴西布衣。流落楚漢。十五好劍術。偏干諸侯。三十成文章。歷抵卿相。雖長不滿七尺。而心雄萬夫。皆王公大人許與氣義。此疇曩心跡。安敢不盡於君侯哉。

釋義　隴西。隴山附近の地を隴郡と云ふたので、今の陝西省鳳翔府より甘肅省鞏昌府の邊に至るの總稱である。隴西は隴山の西部で、卽今の甘肅省に屬する部分であるが、李白の住つて居た隴西の成紀と云ふ處は甘肅省秦州の秦安縣に當るのである。○布衣。ホイともフイとも訓むが、今は一般にフイと訓んで居る。無位無官の人、平民のこと。○楚漢。今の陝西省四川省より湖北省湖南省附近の地を云ふ。○流落。流浪落魄すること。零落して彼方此方とさまよひ歩くこと。○偏。普遍なり。至らぬ所なきこと。○干。をかす或はもとむと訓む。干は禮儀に戻り背くことである。諸侯より招聘せられて之に應ずるが禮であるのに、之を待たずして自ら押かけ行きて自分を任用してくれと求むる故に干と云ふのである。○歷抵。歷は徧に同じ、至らざる所なきこと。抵は至に同じ。あまねくいたると云ふ

こと。○成文章。成は成就、圓熟、仕遂げる等の意であるから、文章の作法を學び得て立派な文を作れる樣になつたことなり。○長。身長のこと。○大人。官位高き人或は學德の秀でたる人。○許與。ゆるしあたふと云ふ意に用ひらるゝこともあれど、此處では單にゆるすと云ふ意味に見てよろし。與の字も許の意なり。○氣義。意氣旺盛にして義勇に富むこと。○疇曩。むかしのこと。併し太古の意にあらず。既往或は前日などゝ、餘り遠くなき以前のことなり。○心跡。心のあと。心事と云ふほどの意。

通解　私は本と隴西の一民でありまして、幼より零落して楚漢の間をうろついて居ました。そこで如何にもして立身出世が仕たうて、十五歳の時に劍術を好み之を學びまして、それで徧く四方の諸侯に謁見を求めました。其後學問を修めて三十歳の時分に文章を成就し、嘗く大臣執政の門を叩きて面會をしました。誠に私は身の長け七尺にも足らぬ小兒でありますけれども、心膽が萬人に勝ぐれて雄大であります。お目にかゝつた王公大人は皆な私の氣義に富んで居ることを御承認下されたので御座います。貴下が若し私を引接して下されたならば、此の私の若年からの滿腔の熱情を以て敢て貴下に向て傾け盡すでございませう。

君侯制作侔神明。德行動天地。筆參造化。學究天人。幸願開張心顏。不以長揖見拒。必若接之以高宴。縱之以淸談。請日試萬言。倚馬可待。今天下以君侯爲文章之司命。人物之權衡。一經品題。便作佳士。而今君侯何惜階前盈尺之地。不使白揚眉吐氣。激昂青雲耶。

釋義　制作。禮記に王者功成作樂。治定制禮。とあるより出づ。即ち禮樂を制作すると云ふことである。尤も元來は禮樂を制作するは天子の事業であるのであるから、此處に於ける制作の二字は强ちに實際に禮樂を制作するとの義に拘はるべからず。要するに立法と云ふ程の意である。○侔神明。侔は同或は匹敵の意なり。侔神明とは神の仕業の如く決して違算過失なきを云ふ。○德行。道德の見はるゝところなり。併し此の處では單に我身に道德を修むると云ふ意で無く、己れ德を修めて下の人民を率ゐるとの意なる故、前の制作を立法と解するに對して行政と解しても宜しいと思ふのである。○動天地。天神地祇を感動せしむること。其の德行の盛なるが爲めに天變地異などの生ぜぬ程であると云ふて

と。○參造化。參はまじはると訓み、干與或は參加等の意である。○造化。天地萬物を經營支配するもの。神の力と云ふこと。或は造物主の義にも用ゆ。○究天人。天意人事を究め盡くすと云ふこと。俾神明も動天地も參造化も究天人も皆な結局の意味には大差ないのである。ツマリ皆な不思議な程エライと云ふことである。○幸願。幸に願くばと訓めども、幸も冀ふと云ふ意の字である。幸願の二字で願くばと云ふ意に見て宜し。○開張心顏。心を寛くして顏色を和らげ、ゆッたりとすること。胸襟を開くと云ふ樣なる意なり。○長揖。兩手を胸に拱きたることにて禮儀を鄭重にせぬこと。即ち大柄、傲慢なること。○倚馬可待。馬上に身をよせて待て居らるる間、即ち暫時の間に文章を認めて差上ると云ふ意なり。○文章之司命。文章のことを主掌するの官なり。世人の文章の上手下手の評判は韓荊州によりて定めらるることを云ふのである。○人物之權衡。權は秤の錘、衡は秤の竿のこと。韓荊州は人品の評價の權衡である。即ち當時の人士の聲價は韓荊州によつて定めらるゝことを云ふのである。○品題。品評或は品藻と同じ。しなさだめのこと、即ち評論すること。○便。即と輙との兩義あり。其儘に、直に、容易くなどゝ云ふ意なり。○階前。階の前、即ち階の下といふこと。

支那の家屋の制、身分ある人の家は必らず殿堂風の建築で其の正面に階段がある。主人より身分の卑賤なる人は堂上に上ることを得ず、階下に立ちてお目にかゝるのであるから、謙遜して階前で面會させてくれと云ふのである。○盈尺之地。盈は滿つると云ふ字である。僅かに一尺に滿つる程の地と云ふこと。即ち自分一人が立つて居らるる丈けの狹小なる地面と云ふと。○惜。面會を許して呉れと云ふ意を見はさんが爲めに、階前盈尺の地を暫時借してくれと云ひ、更に其意を強くせんが爲めに惜の字を假用したのである。○揚眉。盛なる意氣の容姿に見はるる貌。或は揚子の言を引て目を見張ることと云ひ、或は文章を作るに當りて彼是と思を凝らす容態である等と云ふ說もあれど從ふべからず。○吐氣。氣燄を吐くこと。○激昂。意氣發揚して高く上ると。○青雲。高位高官のこと、或は朝廷のこと。

通解 貴下の法を定めて民を治めらるゝことは恰も神が爲さるゝ如くである。貴下の德を修めて民を導かるゝには天地の鬼神も感動するのである。貴下の筆端の靈妙なることは能く造化の及ばざる所を補はるゝのである。貴下の學の深遠なることは天意人事のすべてを究め盡されて居るのである。斯樣な博學高德

の人に接近せんことは男兒の面目として私の切に懇望する所であるから、願くは貴下も私の爲めに打ち解けて下さつて、且は長揖せらるゝばかりでなくして、細々との談論をも拒絶せられない樣にお願ひ致すのである。必ず若し盛宴を以て御接待なし下され、又た淸談を十分に出來るやうにお許し下されるならば、願くは試みに日〻に萬言ばかりも書かせて下さりませ。馬に倚りて待たるゝ間に、直に書き上げてお目にかけませう。今や天下の人は皆な貴下を以て文章の司命者となし又た人品を評り定むるの權衡として居る。一たび貴下の評定を蒙むれば、直ちに世間からして名士と尊敬されることになるのである。私が今、貴下に面謁を請ふのも強ち無用無意味の業では無いのです。それでも猶ほ貴下は尊宅の階前少許の地を私に借すことを惜んで、私をして意氣を張り上げ氣焰を吐いて、そして貴下の力によりて靑雲の間に飛揚することを得せしめられないのであるか。

昔王子師爲豫州。未下車即辟荀慈明。既下車又辟孔文舉。山濤爲冀州。甄拔三十餘人。或爲侍中尚書。先代所美。而君侯亦一薦嚴協律。入爲秘書郎。中間崔宗之、房習祖、黎昕、許瑩之徒。或以才名見知。或以淸白見賞。

【釋義】王子師。名は允と云ひ、子師は其字で、後漢の末葉の人である。時に王室衰微し、逆臣の亂を圖るものが多かつたが、允は其中にありて、司徒の職を奉じて、能く王室を擁護した。董卓の亂に呂布と計りて卓を誅したが、後に卓の將の李傕の爲めに攻められ、終に節義を守りて忠死した。○豫州。豫州は今の河南省の東部より安徽省の西部へかけての地である。爲豫州は豫州の太守となつたことである。○下車。太守となつて初めて其の任地へ到着したる時のこと。○辟。召し出すこと。呼び出すこと。即ち官職に就任せしむることなり。○荀慈明。名を爽と云ひ、慈明は其の字である。幼より聰明であつて十二歳の時に既に春秋に通曉したとのことである。董卓が全盛の時分に之に擁せられて三公にまでなつたが、後に王允等と之を誅せんことを計り、未だ成らざるに卒した。○孔文舉。名を融と云ひ、文舉はその字で、孔子二十代の裔孫である。年僅かに十數歳の時に詭辯奇行を以て李膺(十八頁を見よ)を驚かしたことがある。後に大中大夫となり頗る世に重んぜられた。○山濤。字は巨源と云ひ、晉の代の人で竹林七賢(十九頁を見よ)の一人である。○冀州。今の河南省の北部より直隸省山西省の南部の邊の地を云ふ。○甄

拔。甄は明かに察すること。甄拔は能く丁寧に見別けて、多くの中より俊秀なるものを拔き取ることとである。○侍中。天子の命令を出納し、吏職を總監し、軍國刑政の大務に參與する官である。侍中と云ふ官名は秦の時に始めて名づけられたのであるが、周代に於ける常伯の如きものである。時代により其の定員等に變更あれども魏晉の際には四人の定制であつた。○尙書。尙書と云ふ官名も亦た秦の時に始めて置かれたのであつて、唐虞時代に於ける司會と同じものである。天子の文書を主どる役である。韋昭辨釋名に尙上也。言最在上總領之也。とあるが、後代の歷朝に六部吏部、戶部、禮部、兵部、刑部、工部、尙書とて我が大臣の如きもの丶あるのは此意であるのである。王叡の考課事には「尙書侍中考課。一曰。掌建六材以考官人。二曰。綜理萬機以考庶績。三曰。進規惟允以掌讜言。四曰。出納王命以考賦政。五曰。罰法以考典刑。」と書いてある。○嚴協律。嚴は姓である。協律は皷を鳴らして樂を調へ、伶人に樂の始終を示す役である。即ち音樂を主どる所の嚴姓の人と云ふこと。此人の傳未だ詳ならず。○秘書郞。秘書郞或は秘書監は秘記圖書、古今の文字等を掌どり其の同異を考合するものであつて、一時は名譽職の如くに目され、貴族權門の子弟が之に當てられたのである。今日我國の秘書官とは其趣を異にして居る。秘書丞と云ふのがあるが、之が聊か我が秘書官に似て居るのである。○崔宗之。崔日知、從日用と云ふ兄弟があつて共に文學を以て名高く、且つ硬直清議で朝廷に重んぜられた。宗之は日用の子である。○房習祖、黎昕、許瑩。此の三人の傳未だ詳ならず。○淸白。淸廉潔白と云ふこと。

通解 顧みて前代に於て高材遠識の士が後進を拔擢誘掖されたる例を求むるに、昔時、漢の王允は豫州の刺史となりて任地に赴きたる時に、未だ車より下らざるに荀爽を召し出し、旣にして車より下るや又た孔融を呼び出し、此の二人の賢者を拔擢して官に採用した。又た晉の山濤が冀州の刺史となつた時には、才能の俊秀なるもの三十餘人を選拔して、之を官に舉用したが、是等の人達は後に出世して或は侍中となり或は尙書となつた者もあつて、此事は前代からして人々の稱美贊歎する所である。足下も亦嘗て嚴協律を御推薦になりましたが嚴は終に朝廷に入りて秘書郞となりました。中間に於て崔宗之、房習祖、黎昕、許瑩の輩も或は其の才能名聞の秀でたるを以て知遇せられ、或は淸廉潔白なるを以て嘉賞せられました。貴下が後進書生を誘掖擢用することを好まるゝことは旣に斯くの如きである。

白每觀其銜恩撫躬忠義奮發。白以此感激知君侯推赤心於諸賢

腹中。所以不歸他人而願委身國士。倘急難有用敢效微軀。

釋義 銜恩。銜は元來馬具のくつわ或は含むと云ふ字であるけれども、此處では感ずると云ふ義である。即ち韓荊州の恩德に感激すると云ふ意なり。序に鳥渡お話をするが、元來銜の字はくつわと云ふ字である。然るに我國では古より轡の字をくつわと讀ませて居るけれども、此轡は手綱と云ふ字であつてくつわと云ふ字では無いのである。轡と云へば騎者が手綱を執ることであつて、馬丁が銜をとることでは無いのである。漢字の中には此樣に、支那に於ける元來の意味と、我國で慣用せられて居る意味と全く異なりて居るものが隨分に澤山あるのである。之を心得て居らぬと支那人に通用せぬ漢文を認める樣な失策が生ずるのであるから、鳥渡茲に一例を示して置くのである。○推赤心云々。赤心は眞心と云ふこと。易に於て心は離卦の象である、而して離は火に象るのであるから、心に對して火の色の赤を以て其の本色とするのである。眞心のことを赤心とか丹心とか丹誠とか云ふのは是故である。さて推赤心云々の句は後漢の光武皇帝の故事から出てたるのである。光武帝が未だ蕭王と呼ばれて居た時分のことであるが、王は諸賊を打破りて悉く之を降伏せしめられた。然れども當時は天下が大に亂れて居たから諸將は降伏して來たものゝ本心を疑ふて居るし、降伏者も亦た實際に於て尚ほ二心を懷けるものもあつたので、形勢は兎角不穩の樣子であつた。然るに王は降伏者に勅して各自に其の本營に歸して部下の兵を取締らせて置いて、そうして御自身に輕裝して馬に乘りて諸部の降伏者の陣營中を巡視せられた。其處で降伏者は相語りて蕭王推赤心置人腹中、安得不效死乎と曰ふたとのことである。此句の意は蕭王は眞心を推し出して之を他人の腹中に置き、我等に對して少しも隔意を挾まず疑念を抱かない。我等はどうして此王に心服して此王の爲めに身命を抛たずに居られんやと云ふことである。○國士。國中の人が皆な推服して士と認める程の人と云ふこと。一國に圖抜けて秀てたる偉人と云ふこと。○倘。モシと訓む。儻字に通じ用ふ。萬一にもの意なり。○效。イタサンと訓む。奉るとか、獻上すると云ふ意なり。

通解 私は貴下に推薦せられたる人々が其恩に感じて、其身を大事にいたはり安んじて恩を報ひんと忠義の志を興奮發起する所を見る度毎に、私は其の有樣に感激して是れ全く貴下が誠意誠心を以て隔意なく諸賢を優遇せらるゝからであると云ふことを察知するのである。貴下が誠心を以て彼等を推擧誘掖せらるゝ

から、彼等も亦た恩誼に感じて忠義の志を奮發するのである。其故に私も他人には附從せずして、我身を以て、國士たる貴下に委ね任かせたいと願ふのである。若し朝廷に急難が起りてそれに私を用ゐて下さらば、敢て此の微賤なる體軀を捧げて君の爲め貴下の爲めに盡すてございましよう。

且人非堯舜。誰能盡善。白謨猷籌畫。安能自矜。至於制作。積成卷軸。則欲塵穢視聽。恐雕蟲小伎。不合大人。若賜觀芻蕘。請給紙筆兼之書人。然後退掃閑軒。繕寫呈上。庶靑萍結綠。長價於薛卞之門。幸推下流。大開奬飾。惟君侯圖之。

釋義　人非堯舜。堯と舜とは支那の上古に於ける賢明至德の聖主である。殆んど萬能萬善の人として後世より仰望せられて居るのである。然るに孔子の言に何事於仁。必也聖乎。堯舜其猶病諸。とある。即ち孔子は、此の至聖達德の堯舜でさへも尙ほ未だ足らざる所ありとせられて居るのである。況んや堯舜ならざるの人、即ち淺學非德の人々が何で能く善を盡すとが出來ようぞとの意なり。○謨猷籌畫。四字ともに皆なハカリコト或はハカルと訓むのである。謨は議謀也と說文にありて、汎く議りて謀策を定むることである。猷は道を以て謀ることである。籌は運籌帷幄之中などゝ云ふて、矢張り謀の意であるが、計算の意をも含みて居る。畫も計策或は計議と云ふ意である。○矜。自ら賢なりとすること。自矜は自惚の意なり。○積成卷軸。作り上げたる文章などが積み重なりて卷物となること。幾冊かになるといふことなり。○塵穢視聽。塵も穢もよごれる或はけがれること。御覧に入れるといふこと。○雕蟲小伎。雕は鷲の一種であるが其性能く物を刻むと云ふことからして彫刻の義に用ゆ。楊子方言の吾子篇に或問吾子好賦。曰然。童子雕蟲篆刻。俄而曰壯夫不爲也。とある。是は蟲類を雕りつける樣な、詰らぬ手先きの仕事は大丈夫のするまで無いとの意であるが。之より引伸して文章は雕蟲篆刻の如き小伎に過ぎぬからして、大丈夫は道を學んで天下を益することを圖りて、文章詩賦の如き小伎細藝に心を傾けぬと云ふ意に使用せらるゝのである。○大人。高位高德の人と云ふと。○芻蕘。芻は草を刈る人。蕘はきこりのこと。芻蕘は薪とる賤の男のこと。○兼之。並びにとか及びと云ふ意。故に此處の句は「紙筆と書人とを給せよ」と訓讀するも差支はないのである。○閑軒。軒は家と云ふこと。閑靜なる家屋のことであるが、謙遜の意味を含みて居るのである。○

纘寫。纘はつゞくろひ補修すること。つくろひうつすことなり。○青萍。寶劍の名である。君侯體高俗之材、秉青萍干將之器。などゝあつて、干將、莫耶等と並べ称せらるゝ名劍である。○結綠。名玉の名である。舊註に是も劍の名としてあるけれども、それは誤てある。史記の范睢傳に秦の昭王に上るの書に臣聞、周有砥砨、宋有結綠、梁有縣藜、楚有和璞。此四寶者、土之所生、良工之所失也。而爲天下名器。とあるが、此の四のものは皆な寶玉の名である。○薛卞。薛は薛燭と云ふ人、卞は卞和と云ふ人のことてある。此の二人は共に古の有名なる劍と玉との鑑定家てある。此の二人のお話は之を講義體で書くと餘り長くなり過ぎるのみならず、原文の妙所が分らぬ樣になるから、次に原文で引用して讀者に示すことゝする。

越王允常聘歐冶子、作名劍五枚。一曰純鉤、二曰湛盧、三曰豪曹（或曰盤郢）、四曰魚腸、五曰巨闕。秦客薛燭善相劍。王取純鉤示之。薛燭矍然望之曰、沈沈如芙蓉始生於湖、觀其文如列星之行、觀其光如水之溢塘、觀其色渙渙如冰將解、見日之光。王曰、客有買此劍者、有市之鄉三十、駿馬千匹、千戶之都二、其可與乎。薛燭曰、不可。臣聞、王之造此劍、赤菫之山破而出錫、若耶之谿涸而出銅、吉日良時、雨師灑道、雷公發鼓、蛟龍捧爐、天帝裝炭、太一下觀。於是歐冶子因天地之精、造爲此劍。取湛盧視之、薛燭曰、善哉。含金鐵之英、行氣託盤。服此劍者、可以折衝伐敵。人君有逆謀則去之。允常以魚腸湛盧豪曹獻吳王僚。後闔閭爲一女殺生以送死。湛盧之劍惡其無道、乃去如楚。楚昭王寐而得之、召風胡子問之。此劍値幾何。對曰、赤菫之山已合、若耶之谿深而不測、群神上天、歐冶子已死、雖有傾城量金珠玉、猶不可與、況駿馬萬戶之都乎。（吳越春秋）

韓非子曰、楚人和氏得玉璞楚山中、奉獻厲王。王使玉人相之、曰石也。王以和爲詐、而刖其左足。及武王即位、和又獻之。王使玉人相之、又曰石也。王又以和爲詐、而刖其右足。文王即位、和乃抱其璞而哭於楚山之下、三日三夜、泣盡而繼之以血。王聞之、使人問其故曰、天下之刖者多矣、子奚哭之悲。和曰、吾非悲刖也。悲夫寶玉而題之以石、貞士而名之以詐。此吾所以悲也。王乃使玉人理其璞而得寶焉。遂命曰和氏之璧。（讒求）

○長價。價値の增すこと。青萍は薛燭によりて其の値打が大くなり、結綠は卞和によりて其の眞價を認めらるゝ樣になると云ふこと。○推は推擧、推薦の推で、押し上げること。○開獎飾。獎は推薦とか誘導とか勸賞とか云ふ意てある。私共を誘掖し飾り立てゝ、榮達を得るの道を開かれよと云ふことである。

通解 尤も私は色々と缺點の多い人物で御坐りませうけれども、併し人はみな堯舜の如き至聖達德のものではありませぬから、誰人とても其の爲す所が必らず

善事のみとは限りませぬ。私も私の智略計策に就てどうして自慢をして事々しく御吹聽を致しませうや。併し私の抱負考案を文章に書き見はしたるものも段々と積み重なりて澤山に有りますことですから、それをお目に懸けたいと思ひます。但し詰らぬ文章の末技でありますから、道德の高き貴下の一顧を煩はす丈けの價値が無いかも知れぬと云ふことを心配致して居るのでありますけれども、それでも若し卑賤なる私をもお見捨てなされぬならば、願くは紙と筆と幷びに私の述作を淸書する人とを與へられよ。然らば退いて陋屋を掃除して、拙稿を補正淨寫して呈上しませう。庶幾くは寶劍が薛燭によりて其の價値を增し、名玉が卞和によりて其の眞價を見はすが如くに、私も貴下のお力によりて世に顯はるゝことを得ることで御坐りませう。願くは下流に沈淪せる私共を御誘掖なし下されて大に進取榮達の途を開かれんことを望むのであります。どうか貴下に於て能くお取計ひ下さるやうにお願ひ申し上ぐる次第であります。

憎蒼蠅賦　　宋　歐陽脩

歐陽脩。字は永叔、吉州廬陵の人である。四歲の時に父を失ふたが、母の鄭氏が賢婦人であつて、能く貧苦を凌ぎ、其の全力を傾倒して親ら之を敎育した。幼にして穎悟人に過ぎ、冠ずるに及んで早く已に一家を成した。當時は宋が國を建てゝより殆んど百年も經て居たのであるけれども、文章の體裁は猶ほ五季の餘弊を受けて萎靡振はず。徒らに鏤刻駢偶の末技を競ふて、其の論調甚だ卑く其の文氣亦た極めて弱かつた。そして蘇舜元、蘇舜欽、柳開、穆脩等と云ふ文士達は、此の弊を歎きて、之を氣慨に富み且つ風韻を帶びたる古文の體裁に挽回しようと企てたのであるけれども浸潤の久しき一朝一夕に成功しなかつたのである。是時に方りて歐陽脩は唐の韓愈の遺稿を得て心に深く之を慕ひ、熱心に之れが硏究に從事して寢食を忘るるに至り、必らず之に追與して並轡馳騁せんと誓ふた。それからして脩は尹洙、梅堯臣等と互に相ひ師友として交り、勉强努力して古文の振興を計り、終に能く百川の頽波を挽回し、晚唐以來の弊習を一掃し、斯文の正氣を以て大道を翼贊し、人心を維持せしむるに大効あるに至らしめた。洵に韓愈と並び立ちて斯文斯道の双璧たるを失はぬのである。脩の文は簡明にして煩冗ならず、事を敘するに豐約その度に中り、拮屈聱牙の文句を弄して自ら高く標置すると云ふやうな風が少しも無ひから、之を讀むものは皆な其の意に通曉して其趣に心服するのであ

る。

脩は進士に擧げられてから翰林學士、禮部侍郎、刑部尚書、兵部尚書等を經て太子少師、觀文殿學士となり、神宗皇帝の熙寧五年に六十六歲で卒した。太子太師を贈られ、文忠と謚した。始め滁州に知たる時、醉翁と號したが、晩年に六一居士と云ふた。資性剛毅讜直で、屢、侃々の議論を以て天子に忠言を進め、群小の肝膽を寒からしめたことがある。夫が爲めに奸邪の小人に排斥せられて貶謫せられたこともある。其の政治上の効績にも見るべきものが少く無いのである。文章に於ては所謂唐宋八大家の一人であつて、唐宋八大家文と云ふ書に、其文の重なるものは大抵集錄せられて居るのである。新唐書及び新五代史は共に脩の撰述したるものである。蘇東坡が之を評して、論大道似韓愈、論事似陸贄、記事似司馬遷、詩賦似李白と云ひ、老蘇も亦た其文を評して紆餘委備。往復百折。條達疏暢。無所間斷。氣盡語極。急言激論。而容與簡易。無艱苦態。と云ふたのは、彼等が曾て脩の世話になつたから之を過褒した譯ではなく、最も適切なる評言であると後人に認められて居るのである。

賦。古詩に六義がある。一を風と云ひ、二を賦と云ひ、三を比と云ひ、四を興と云ひ、五を雅と云ひ、六を頌と云ふ。賦は鋪也とありて、鋪陳の義である。即ち善惡を敷衍陳述することである。詳言せば或事の由來を叙述して其の情狀を悉くすのである。然るに戰國の頃に楚の屈平（屈原）と云ふ人の弟子の宋玉、唐勒、景差等と云ふ仲間が詩に於ける賦の體を文章に移して九辯、招魂、大招等の賦を作りてから、後には文章の中に賦の一體が出來たのである。

蒼蠅。アヲバヘ俗にクソバヘのことである。蠅の動物學的說明は、今日普通學を修めたる人々は既に其の大略を知つて居らるゝのであり、且は茲に之を記載する必要が無いのであるが、其の漢學的說明は茲に少しく記述するの必要を認むるのみならず、今日では動物學的說明よりは却て此方が取調に困難なと云ふ有樣であるからして、次に鳥渡之を紹介しよう。

蠅處處有之。夏出冬蟄。喜暖惡寒。蒼者聲雄壯。負金者聲淸聒。靑者糞能敗物。巨者首如火。麻如者茅根所化。蠅聲在鼻而足喜交。其蛆胎生。蛆入灰中蛻化爲蠅。如蠶蠍之化蛾也。蠅溺水死。得灰活。故淮南子、爛灰生蠅。古人憎之多。有辟法一種。小蠨蛛專捕食之。謂之蠅虎者是故也。　本草綱目（明、李時珍編）

蠅。長安秋多蠅。成式蠹書常日讀百家五卷。頗爲所擾。觸睫隱字。驅不能已。偶拂殺一焉。細視之。翼甚似蜩。冠似蜂。性察於腐。嗜於酒肉。按理首翼。其類有蒼者聲雄壯。負金

者聲清晰。其聲在翼也。蒼者能敗物。巨者首如火。或曰。大麻蠅。茅根所化也。（酉陽雜俎）

（唐、段成式編）

蠅がうるさき蟲であつて人に嫌がらるゝことは、我國でも五月蠅と書いてウルサシと訓ますのでも知れるが、支那でも古より蠅の煩しきを厭ふて、之を小人に喩へて居る。詩經にも之を咏じて、蠅が何れの處へでも集まりて、白きものを汚して黑くして仕舞ふのは丁度敗德の小人が善人を讒誣して罪に陷れる樣なものであるから常に能く氣を付けよと戒めてある。詩經の小雅甫田之什の青蠅篇は周の幽王の朝に小人多くして善人退き綱紀の亂れたるを刺つたものである。其詩は即ち次の通である。

營營青蠅。止于樊。豈弟君子。無信讒言。

營營青蠅。止于棘。讒人罔極。交亂四國。

營營青蠅。止于榛。讒人罔極。構我二人。

此文は宋の英宗の治平三年即ち歐陽脩が六十歳の時の作であると傳へられて居る。當時は丁度外には契丹が强大にして頻りに宋を犯し、西夏も亦た漸く盛にして邊境を騷がしたにも拘はらず、内には朝廷に於て朋黨の爭あり、君子位を失ふて小人志を得、脩も其翌年には官を罷められると云ふ有樣であつたから、脩は之を憤慨して乃ち詩經の青蠅篇に倣ふて此の一篇の文を作り蒼蠅に寄託して奸邪の小人を諷刺したのである。

蒼蠅蒼蠅。吾嗟爾之爲生。既無蜂蠆之毒尾。又無蚊虻之利觜。幸不爲人之畏。胡不爲人之喜。爾形至眇。爾欲易盈。杯盂殘瀝。砧凡餘腥。所希秒忽。過則難勝。苦何求而不足。乃終日而營營。逐氣尋香。無處不到。頃刻而集。誰相告報。其在物也雖微。其爲害也至要。

【釋義】蒼蠅。蒼蠅よと呼びかけて、蠅を三人稱にして敍したるなり。蒼蠅の二字を重ねて書きたるは語氣を强める爲めにしたるものである。○爾。汝の字と同じ意義なり。但し古文或は擬古體の文には多く用ひらるゝけれども、普通の文には餘り多く使用せられぬのである。此處では蠅を指して云ふなり。○爲生。生物たることを、と云ふ意。○蜂蠆。蜂はハチ、蠆はサソリのことである。蠆は其尾に毒のある刺を有して、それで人を螫す害蟲である。其尾の長きものを蠆と云

ひ短きものを蠍と云ふのである。○蚊虻。蚊はカ虻はアブのこと。○利觜。人の血を吸ふ所の鋭き口のこと。觜は嘴と同じくクチバシのことなり。宋の邵康節の子の伯温が著はしたる聞見錄と云ふ書に歐陽公云。予作憎蠅賦。蠅可憎矣。尤不堪蚊蚋自嚶喝來。利觜咬人也。と書いてある。即ち歐陽修は「蠅のうるさきは憎いに違いないけれども、蚊がブン〳〵云ふて來て人を螫すのは一層憎いものである」と云ふて居るのである。○至眇。眇はスガメ即ち一目の小なるものゝことであるが、茲では微細の義である。○杯盂。杯はサカヅキ、盂は飲食物を容れる器具の名で、ハチ或はワンの類である。○砧几。マナイタのことである。○腥。生臭きもの即ち肉類のこと。○秒忽。秒は禾芒即ち穀類のノギ或はホサキのことである。忽は蜘蛛の網の絲、或は蠶の口より吐き出したる一條の細き絲のことである。秒忽とは極めて微細なることを云ふのである。○難勝。堪へ難し、或は敵し難しと云ふことで、茲では若しも飲食物が澤山にあれば迚も蠅が之を食ひ盡し得ぬことを云ふのである。○營營。往來する顏で、蠅のあちらこちらに飛びかふ様をいふのである。○逐氣。飲食物の有りそふな處を尋ねまはること。○頃刻。頃は少時或は暫時の意。頃刻はしばしの間に、或は時を移さずにと云ふこと。○在物也。

蠅が食ふ丈けの物としてはと云ふこと。○至要。輕々に看過されぬと云ふこと、蠅は場所を選ばず、如何なる汚穢物の上にても集まり、直に又た飲食物の上に集まるもの故、實際に蠅の食ふ分量は微なるも其の飲食物全體が汚さるゝ様な譯であるから其害は實に大なりと云ふことである。其處で其害たることを次に列擧するのである。

【通解】 蒼蠅よ蒼蠅よ。余は汝が同じく此世に生を享けながら、誰にても忌み嫌はれて居ることを如何にも不便に又た氣の毒に思ふのである。既に汝は蜂や蠆の如くに毒尾で人を螫したり或は蚊や虻の如くに利觜で人を咬んだりしないのであるからして。先づ幸と人に畏怖せらるゝことは無いのであるが。何としても汝は人に喜ばれ可愛がられないのであるか。元來汝の形體は極めて微小なるものであつて、從て汝の嗜慾も亦た甚だ些細なものである。少許のものを飲食すれば汝はそれて滿足するのである。僅かに酒盃や飯盂にくつついて居る殘餘の滴瀝或は爼板に附着したる捨て殘りの肉類位を甞めるに過ぎぬのである。されば汝が欲いと望み希ふ所は極めて少量のものであつて、若し少々餘分の品物があれば迚も汝には甞め盡せないのである。然るに汝は常に朝から夕まで、彼方此方と飛

ひ廻はりづめにして居るが、それは全體何か欲しくて溜らぬものがあつての事か。汝は常に飲食物の氣を逐ひ香を尋ねて、何處へでも至らぬ隈なく、若しも其處等へ何か飲食物を置かうものなら直ぐに何處からとも無く群集して來るが、それは誰か汝達に通報するものがあるのであるか。斯くて汝が嘗め去る物の分量は極めて些少であるけれども、併し汝が及ぼす所の害は中々に大なるものであるから試に次に之を擧げて見よう。

若乃華榱廣廈。珍簟方牀。炎風之燠。夏日之長。神昏氣蹙。流汗成漿。委四肢而莫擧。眊兩目其茫洋。惟高枕之一覺。冀煩歊之暫忘。念於爾而何負。乃於吾之見殃。尋頭撲面。入袖穿裳。或集眉端。或沿眼眶。目欲瞑而復警。臂已痺而猶攘。於此之時。孔子何由見周公於髣髴。莊生安得與蝴蝶而飛揚。徒使蒼頭丫髻。巨扇揮颺。或頭垂而腕脫。或立寐而顛僵。此其爲害一也。

釋義　華榱。榱はタルキのこと。華美に裝飾したる垂木なり。○廣廈。廈は大なる家屋のこと。○簟。竹を細く削りたるものを編みて作りたる席の類なり。一簞食の簞と混ずべからず。○方牀。四角なる牀。牀は坐臥する場所或は器具の名で、茲に云へる方牀とは安樂椅子の如きものと見るべし。○炎風。夏の風のこと。○燠。むせあつきこと。○神昏。精神のぼんやりとすること。○氣蹙。氣のくさくさとすること。○漿。コンズ、ツクリミヅ、或はシロミヅと訓む。本草綱目には漿に土漿と漿水との二種を說明して、土漿は地を堀りて貯溜所を作り水を汲み入れて之を攪き濁したるものの漿水は米を炊煮して、その熱したるものを冷水に投じ數日を經て酸味を帶びたるを云ふとしてある。兎も角漿は米汁酢其他の飲料とすべき液汁のとであつて茲では汗の濁りたる液汁に喩へたのである。○委。痿痺の痿の義である。即ちなへしびれることとである。四肢即ち兩手兩足のぐんにやりとしたる貌を云ふのである。○眊。酔漢の目の如くに精氣なくボンヤリとしたるを云ふ。孟子の離婁篇に胸中不正則眸子眊焉とある。○茫洋。ウツトリ或ひはボンヤリとしたる貌を云ふ。○高枕。安心して安らかに眠ること。○一覺。覺は寤醒にて睡眠よりさむるとてあるが、誰でも眠ら無ければ覺めることも無いと云ふ義よりして一覺とは一睡即ちひとねいりと云ふ意に用ゐらるゝのである。さて話の序を以て烏渡茲に言ふて置くことがある。それは漢字は或る

一字に於ける其の元來の意味よりして段々に變化引伸して種々の意義を有して居るものが多いのであるが「其の中には今玆に示したる覺と云ふ字の場合の如くに一字にて全く反對の意義を有して居るものも隨分に數多いのである。今試に其の二三を參考の爲め次に記することゝする。（上段に記せるは普通慣用の意味であるから、其の用例を示すことを略して置く。）

亂。みだれる。　をさまる。治也。武王曰予有亂十人。論語。

貸。かす。　かる。借也。凡民之貸者。與其有司辨而授之。周禮。

借。がる。　かす。貸也。三年不飛。長風不貸。辞選。

離。はなる。　つく。附也。離麗也。日月麗乎天。百穀草木麗乎地。周易。

離。わかれる。　あふ。遇也。離猶遭也。漢書顏師古註。

陽。みなみ（南）。　きた。北也。在洽之陽。詩經大雅。

嘻。たのしむ（樂）。　かなしむ。悲也。夫子曰。嘻其甚也。禮記。

學。まなぶ。　をしへる。敎也。叔仲皮學子柳。鄭注曰。學敎也。禮記。

極。をはり。（端終）　まんなか。中也。皇建其有極。書經洪範。

慊。うらむ。　恨也。不滿也。吾何慊乎哉。孟子。

こころよし。快也。滿足也。此之謂自慊。大學。

致。おくる。先方へ遣ること。　送詣也。季孫行父如宋致女。春秋。

まねく。此方へ引き寄ること。　招致也。備物致用。易經繫辭傳。

效。たてまつる。獻也。呈也。願效之王。戰國策。

さづく。授也。與也。宣王有志而後效官。左氏傳。

沽。うる。賣也。　かふ。買也。

市。うる。賣也。　かふ。買也。

○煩敲。煩はうるさくわづらはしきこと。敲は囂と同義でかまびすしきこと。

○裳。袴。もすそのこと。元來何れの國でも着物は大抵上と下との二部に分れて居るので、支那では其の胴體に纏ふものを衣と云ひ、腰下に服するものを裳と云ふのである。我が日本服は一枚で上から下までを纏ふ故に、衣裳と通稱し或は衣の一字で呼びならはして居るのである。○集。集はもと木の上に多くの隹（鳥のこと）が止まると云ふ意にて雧と書いたのであるから、此字にも亦た止まると云ふ義があるのである。即ち眉毛の上に蠅のとまることである。○沿。沿は水につきて下ることと即ち川岸を傳ふて行くことなどを云ふのである。眼眶の緣を這ひ行く

ことを云ふのである。○眼眶。まぶた或はまぶちのこと。○瞑。目ぶちを合して眠ること。○儆。戒むることであるが、亦た痲ると云ふ義がある。○痺。痲痺でしびれること。○攘。臂をかゝぐとは腕まくりをすること。○髣髴。サモニタリと云ふこと。こゝでは夢にぼんやりと見ると云ふ意。○周公云々。論語に子曰。甚矣。吾衰也。久矣。吾不復夢見周公。とある。孔子が尊崇して居たるところは堯舜禹湯文武周公等の諸聖人である。然かるに孔子は周の時代の人であつて、そして周公は周に於ける凡百の禮樂制度を制定したる人であるからして、孔子が當時の禮樂に就て研究する毎に、必らず周公が之を制作したる本義を得やうと苦心したのである。そうして夫が判明せぬ場合には苦心焦慮の結果、終に夢に周公を見たと云ふとである。呂氏春秋の博志篇に、孔子は夢に文王や周公に面謁をして其の疑義を敎へられて、眞意義の解釋を得たと書いてある。處が孔子も段々と年齢の重なるに從ふて精力根氣が弱くなりて、凝り固り樣が足りなくなつたと見え、晩年には夢に周公に面會することが無くなつたと孔子自ら言はれたのである。事實は兎も角、論語の此語よりして夢のことを見周公と云ふのである。○莊生。莊子のことである。莊子は姓を莊、名を周と云ひ、後世の人に南華眞人と云はれて

居る人である。かの莊子と云ふ書は此人の著はしたるもので書中大抵寓言を用ひ、老子所說の虛靜恬淡寂寞無爲の道を說き孔子の徒を誣りて痛快輕妙の筆をふるつた。戰國時代の人で、丁度孟子と殆んど時を同して生れたのであるが嘗て楚の威王が其賢を聞て、之を宰相にせんとて重禮を以て招聘したるに、莊子は笑て其の使者にいふて曰く、千金重利。卿相尊位也。子獨不見郊祭之犧牛乎。養食之數歲。衣以文繡。以入太廟。當是之時。雖欲爲孤豚。豈可得乎。子亟去。無汚我。我寧游戲汚瀆之中自快。無爲有國者所羈。とて、終身仕官を求めず、勝手氣儘に世を送つたのである。○蝴蝶云々。莊子の書中の齊物論と云ふ篇に、昔者莊周夢爲蝴蝶。栩栩然蝴蝶也。自喩適志與。不知周也。俄然覺。則蘧蘧然周也。不知周之夢爲蝴蝶與。蝴蝶之夢爲周與。云々とある。此意は莊周が嘗て夢に蝴蝶になつた。ヒラ〳〵と飛び舞ふて、眞に蝴蝶となつて仕舞ふた心地で誠に愉快に思ふて、我身が莊周といふ人間であることを忘れて仕舞つた。然るに俄に目が覺めて見ると矢張り元の儘の莊周であつたが、これは抑も莊周が夢に蝴蝶となつたのか、或は蝴蝶が夢に莊周となつたのか、何が何だか分りやしない、と云ふことである。○蒼頭。しもべ即ち奴僕のこと。○丫髻。丫と丁とを混同すべからず。丁は明とか終とか云ふ意味の字であるが、丫はツノがミ、

ヽヽアゲマキ、或は木の股等と云ふ意味の字である。角髪或は總角とは小兒の髻を左右の兩方に分けて結びたるものであつて、恰かも額上に角が生えて居るが如くであるから、丫の字は其の狀を寫したるものである。髻はモトヾリ或は結束したる髮のこと。丫髻は十二三歲の女子の小間遣のことである。○僛。たふれること。

通釋　さて華麗宏壯なる家屋に於て、珍簟を布き方牀に坐して涼みを納るさせよ。何がさて吹き來る夏の風はむしあつく、加之夏の日足の長きことゝて、精神はうとッりとし氣分もくさ〳〵と仕て來て、玉なす汗は止所なく流れ出で。手も足もグンニャリとして鳥渡動かすさへ物憂く、兩眼はボンヤリとして何も見定めることが出來ぬ樣になりて、何は扨て置き、枕を高ふして一寢入りして、此の煩さ苦しさを暫時なりとも忘れたいと願ふのである。顧るに余は汝に對して嘗て汝の意に叶はぬやうな事を爲したることありや。何故に汝は我を苦しめるのであるか。或は頭上に飛び廻り、或は顏面に突き當り、或は袖の中へ入り込み、或は裳の間に這ひ入り、或は眉毛に留り、或は眼瞼に徊ひ廻り。夫が爲めにウットリとして睡りかけた目が復た醒め、グンニャリとした臂を振り上げて汝を追ひ拂はねばならぬやうになる。箇樣なる場合に於ては迚も碌に眠に就くとが出來ぬからして、孔子も夢に周公を見る譯には行かぬ、莊子も夢に胡蝶となつて飛び舞ふとは出來ぬ。蓋し孔子が周公を夢み、莊周が胡蝶になつたのは、蠅の攻擊を受けないで悠然と睡眠するとが出來たからである。我等は蠅の攻擊の苦に堪えず、一睡の樂さへ取り得ないで、徒らに下僕下婢をして大扇を振り動かさせて群り來る蠅を追ひ拂はさせるが、併し婢僕も疲勞して居るから、或は頭を打ち垂れて巨扇を落したり、或は忽ち寢入りて其場に仆れ臥する樣なとになる。これが蠅の害の第一に數ふべきとである。

又如峻宇高堂。嘉賓上客。沽酒市脯。鋪筵設席。聊娛一日之餘閑。奈爾衆多之莫敵。或集器皿。或屯几格。或醉醇酎。因之投溺。或投熱羹。遂喪其魂。諒雖死而不悔。亦可戒夫貪得。尤忌赤頭。號爲景迹。有霑汙。人皆不食。奈何引類呼朋。搖頭鼓翼。聚散倏忽。往來絡繹。方其賓主獻酬。衣冠儼飾。使吾揮手頓足。改容失色。於此之時。王衍何暇於淸談。賈誼堪爲之太息。

此其爲害者也。

【釋義】　峻宇。峻は高く險しき貌。宇は軒、或は屋根、或は家屋の義。峻宇は高大なる構への家と云ふ意にて矮屋に對して用ゐらるゝ語なり。○高堂。堂は古は天子、諸侯、大夫、士等の身分によりて其建築に制度あり。すべて東西の廂なく南向きに建てられ、其前半即ち南側は公用儀式等の際に使用せられて、平常は人も住はず道具も置かないであつて、之を堂と云ひ。又その後半即ち北側には人が住ひ器物を備へて之を室或は房と云ふたのである。併し後世には住宅を一般に堂と云ふ事になつた。○嘉賓上客。學識もあり禮儀もある高尙なる賓客と云ふこと。○沽酒市脯。沽も市も二字ともに買或は買ふの義あり。（第一三三頁を見よ）。此處にては二字ともに買ふと云ふ意なり。脯は乾肉なり、ホジシと訓む。○鋪筵設席。筵も席も共にむしろ、ござ或はしきもののこと。鋪は布くこと、即ちしきならべること。設もならべること。○几格。几は普通には机と云ふ字であるが、此處では俎と云ふ意に見るべし。格は庋格或は肉架とて、俗に云ふ膳棚或は臺所戸棚の類を云ふのである。○醇酎。純粹にして濃厚なる酒のこと。○投溺。大氏の書には投溺とあれど、事文類聚には沒溺とあり。沒字を正しと考ふ。○熱羹。あつものゝこと。○吸物のこと。○喪其魂。喪は失ふこと、亡又は死の意なり。魂はたましひのこと。此處にては生命と云ふほどの意なり。○諒。まことに、信實に。○貪得。得は財物を得んとして貪慾なることを云ふ。此處では小人の利慾に眩惑せられたるものを云へるなり。後漢の班固の離莊といふ文に衆人逐世利、如蒼蠅之逐肉汁也。蒼蠅嗜肉汁而忘溺死。衆人貪世利而陷罪禍と云ふ語がある。○景迹。景字彙に景慕也とありて、したふこと。迹は凡て形の見るべきものを迹と云ひ、又た其の蹤迹を追ふことをも迹と云ふ。頭の赤き蠅は特にうるさき蠅にて、何か飲食物を置くと直ぐに嗅ぎ付けて其の迹を慕ふて集り來るが故に景迹と云ふ異名を附けられて居るのである。○霑汚。霑はうるほすこと。又濡らすこと。汚はけがすこと、又よごすこと。○引類。同類を引連れてと云ふこと。○搖頭。愉快氣なること。○倏忽。倏また儵に作る同字なり。たちまちと云ふこと。○絡繹。引き續きて絶えざること。○獻酬。詩經の小雅楚茨の篇の鄭玄が箋に始主人酌賓爲獻。賓既酢主人。主人又自飲酌賓曰酬とある。又主人進酒於客曰獻。客答主人曰酢。主復酌賓曰酬とある。蒼頡篇には主答客曰酬。客報主人曰酢とある。ツマリ主人より賓客に酒を進むるを獻と云ひ、客より主人に向て貴

下が先づお飲み下され」と挨拶するを酢と云ひ、其時に主人が「然らばお毒味を」とて自分に飲みて、更に客に進むるを酬と云ふのである。これは酒を飲み始める時の禮式である。酬と醻の二字は通用する。又酬醻酢(酢は酬と云ふ意の時は音ソなり)の三字も古は通用したのである　○儼。いかめしきこと。○衣冠儼飾。論語の堯曰篇に君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之。斯不亦威而不猛乎。とある。荀子の非相篇には正其衣冠、齊其顏色。とある。衣冠儼然とか正衣冠とか云ふのは、皆な禮儀正しく行儀よく構へることである。○頓足。頓は跡也とあつて足をはねること。揮手頓足とは前文の衣冠儼飾に對したる語であつて、ツマリ威儀作法を破ることを云ふのである。○改容失色。容子を變じ顏色を變へること。ツマリ面目を失して途方に暮るゝ貌を云ふ。○王衍。晉の世の人、字を夷甫と云ひ、王戎(竹林の七賢人の一人)の從弟である。老莊の學に深く、常に其書を講ずるに當りて、丁度禪僧が拂子を持つて居る如くに、玉麈尾(玉を以て飾りたる柄の末端に大鹿の尾を付けたるもの)を揮つて居たとのことである。幼少より穎悟の評判高く、長ずるに及んで神姿高潔風塵の外に超然たる趣があつた。○清談。老莊の學は清淨無爲自然を尚んだにより斯學を講説することを清談と云ふのである。清談は晉の朝に於て盛に流行し、所謂竹林七賢人の如きは皆な好んで清談をやつた仲間である。○賈誼。賈誼は前漢の文帝の朝に梁の孝王の大傅となり、當時の弊風を鑑て、痛哭すべきこと三箇條、長太息すべきこと六箇條を擧げて上疏したることがある。尚、此人のことに就ては本講義の六四頁及六七頁を參看せらるべし。○太息。溜息をつくこと。

通解　又立派なる家に上品なるお客が來られて、珍酒佳肴の御馳走を設け宴席を開きて終日ゆる〳〵と閑談清遊を試みんとすると、澤山なる蠅が群がり來りて追ひ拂へども追ひ拂へども立ち代り入り代りて襲ひ來るにウンザリとして仕舞ふのである。この蠅と云ふ奴は食器、飯臺、所構はず寄り集り、或は酒を嘗めては醉ふて其内に溺死し、或は煮えつきのお汁を飲まんとして燒死んだりするのであるが、餘りに飲食に執念深いので夫れが爲めに死んだからとて一向に悔悟する樣子がないのである。亦以て世の群小の輩が利欲に迷ふて其身を滅ほすに至るのを戒むるの好き手本とすべきである。さて蠅は斯くもうるさき物であるが、其内でも取り分けて景迹と名づけらるゝ所の赤い頭の蠅は殊に忌嫌ふべき者である。若し一たび景迹が飲食物の上に集れば、何人でも其物を食はないのである。斯くも蠅は人に嫌はれて居るにも拘はらず、どう云ふ者か、一向平氣で其の同類を引き

連れ、朋猪を呼び集めて嬉しそうに跳ね廻り、面白そうに飛び廻はりて、群がり集るかと思へばハヤ飛び散り、來たかと思へばハヤ逃げ去り、彼方此方に絶間なく往來する。それであるから賓客と主人とが威儀を整へ禮節正しく酒宴を催すに當りても蠅のうるさゝに吾知らずに手を振り足を動かして行儀を崩し、ハテ身嗜のない無作法なことをして恥かしいよであると顏を赤めさせる樣なこともあるのである。斯樣の場合になると、如何に辨舌の爽なる王衍と雖も平氣で淸談を仕て居る譯にはゆかぬ。また彼の時弊に太息したる賈誼あらば此の蠅のうるさゝにも長太息することであらう。誠に蠅のうるさゝと云ふたら如何な人でも閉口しないものはない。これが蠅の害として第二に數へらるべきものである。

又如醢醢之品。醬臡之制。及時月而收藏。謹餅罌之固濟。乃衆力而攻鑽。極百端而窺覘。至於大胾肥牲嘉殺美味。蓄藏稍露於罅隙。守者或時而假寐。纔少怠於防嚴。已輒遺其種類。莫不養息蕃滋。淋漓敗壞。使親朋卒至索爾以無歡。臧獲懷憂。因之而得罪。此其爲害者三也。

釋義 醢醢。醢はしゝびしほと訓ず。肉を乾かし細かく莝みて麴或は鹽を雜ぜ、之を酒に浸してならしたるものなり。醢は醢の汁多きものを云ふ。醢醢は汁あるしゝびしほと訓む。○醬臡。醬はひしほと訓す。小麥或は豆等を萌さしめて之に鹽を雜せてならしたるものなり。臡は肉と骨とを打き雜せて作りたる醢のことなり。○時月。時は季也期也とあつて一ヶ年十二ヶ月を四に分ち三ヶ月を以て一期とし各期を春夏秋冬と名づけ之を四時と云ふ。時月の語は書經の堯典より出づ。及時月とは二ヶ月も三ヶ月もたつてと云ふことなり。序を以て鳥渡云ふて置くが時日と云ふ語の時の字も此と同じ意味である。決して一日間を十二に（今日にては二十四に）分ちたる時の意味で無いのである。斯くの如く漢字は或る一字に於ける同意義の中でも其内に含まれる分量の違ふ場合があるから此點も注意して貰ひ度ひのである。序であるから猶も一例を擧げて之を示すべし。封建制度、郡縣制度と云ふ語があるが、此の郡縣と云ふ語は史記其他の書の秦の始皇帝の記錄に載つて居るのである。處が始皇帝の時には分天下（支那の國のこと）爲三十六郡とあつて、秦國の領土を三十六に大別し、更に之を小別して縣としたのである。即ち一郡を分ちて數縣としたのであつて、縣は郡よりも小さかつたのである。然るに我國では其の反對で一縣を分ちて數郡として居るのであつて、ツマリ縣は郡よりも大きいの

である。但、秦が周を顛覆して制度を改めたることゝ我が維新時代の有樣と能く似て居る所があるから漢文にある成語を取り來りて其儘に用ひ、我が維新時代の歷史を叙するに皆な「封建の制を改めて郡縣の制となす」と書いて居るのであるが、其の郡縣の二字は等しく土地の政治的區劃を見はす語であるに拘はらず、支那の秦時代に用ゐたるものと我國で用ゐるものとは其內容分量を異にして居るのであることを忘れてはならぬのである。我國では郡縣制度と云ふより縣郡制度と云ふ方がよいかも知れぬのである（勿論コンナニに言ひかゆる必要は決してないのであるけれども）。尙ほ支那でも府縣州郡等の字の內容は各朝によりて色々に變化して居る。今玆には一々その說明をする暇が無いから略して置くが、要するに漢字は一字に就ても個樣に複雜なる意味があることを心得て置かねばならぬのである。○缾罌。缾はかめと訓す。形小にして口長く丁度德利に似たるを缾と云ふ。罌はもたひと訓す。形大にして平に、口の廣き瓶を罌と云ふ。缾罌は醯醢醬臡を入れる瓶のことなり。○固濟。固は堅固なり。濟は成就なり。醯醢醬臡をならす爲めに氣の通はぬほど丁寧に固く其口を密閉して仕上げること。○衆力。多數の蠅の集り來るをいふ。○攻鑽。鑽はきること。蠅が缾罌の口の蓋を攻め破り切り崩すこと。○極「百端」

而窺覬。窺覬はうかゞひねがふこと。端と云ふ端は何處から何處までも運ひ廻り覗きまはること。○大胾。大きく切りたる肉。○肥牲。牲はいけにへと訓む。神を祭るときに供ふる畜類で、牛羊豕を三牲と云ひ、馬牛羊雞犬豕を六牲と云ふ。此處にては肥え太りたる家畜の肉と云ふ程の意なり。○嘉殽。殽は骨の付きたる肉のこと。嘉殽は良き肴と云ふこと。○蓋藏。蠅の爲めに汚されない樣に掩ひ隱すこと。○罅隙。罅孔隙也とありて、あなすきまのこと。隙はすきまなり。○假寐。うたゝねのこと。○防嚴。蠅を防禦することの嚴重なること。○輒。すなはちと訓むべき漢字は即、則、乃、迺、便、輒等と澤山にあるが今は其說明を略する。輒は「容易く」とか「其度毎に」と云ふ樣な意に用ゐらるゝ字である。○養息。養は養育の意。息は生息或は生長の意。○蕃滋。蕃息也。滋益也。とありて其の子孫の益增殖してゆくこと。○淋漓敗壞。淋漓は物の長き貌、大なる貌、又盛なる貌なり。蠅が强盛なる勢で飮食物を腐敗壞滅せしむることを云ふのである。○索爾。索又は心の安からざる貌を云ふ。俗に云ふ「氣まづくなる」と云ふ程の意なり。○臧獲。楚辭注に臧、爲人所賤繫也。獲、爲人所係得也。とある。又廣韻には方言罵奴曰臧。罵婢曰獲。とある。臧は下男のことで獲は下女のことなり。

【通解】又醯醢の品類や醬糈の製造には、仕込みに二ヶ月も三ヶ月もかゝりて、且は其の餅器の口を丁寧に堅固に鎖して、ヤット仕上げるのであるに、蠅は何處からか其香を嗅ぎ付け來りて、多勢で其口の破壞にかゝり、端から端まで、尋ねまはりて隙間より覗きこむのである。若し又た、大截、肥牲、嘉殽などゝ種々の珍味の料理を調へて賓客を饗應するに當りて、蠅に汚されまいとて注意して之を掩蔽しても、少しでも透間より覗はれてあれば、その番人がたまさかに轉寐でもして爲渡その防禦に弛みのあるに乘じて、ハヤ直に其の子を飲食物の上に生み落して行くのであつてそうして其子が又た盛に繁殖して頻りに飲食物を腐敗せしめ、終には近親朋友達にまで氣まづく不愉快なる思ひをさせ(人を招きて置きながら個樣な汚れたる腐敗したる食物を供するとは、實に人を馬鹿にしたる所爲などゝ打ち腹立つる樣なることを云ふ)。僕婢も亦た自分の不注意よりして賓客に不愉快を感せしめ、主人に不面目を與へたることは、如何にも申譯のなき我が疎漏であると心配苦慮し、果ては主人の不興によりて僕婢が大に叱責を受くる樣なことになるのである。これが蠅の害の第三に數ふべきものである。

是皆大者。餘悉難名。嗚呼。止棘之詩。垂之六經。於此見詩人之博物比興之爲精。宜乎。以爾刺讒人之亂。誠可嫉而可憎。

【釋義】止棘之詩。これは詩經の中にある營營青蠅。止于棘。讒人罔極。交亂四國。と云ふ詩のことである。(本講義一二六頁を參看すべし)。此詩は青蠅を以て小人に譬へたるものであつて、其の大意は次の通りである。營々と往來する青蠅が棘の垣根に止まつて居る。これが籬より移りて內へ飛び込んで來たことなら、それこそ種々の器具や飲食物を汚して仕舞ふのである。今や小人が事を構へて絕えず害毒を流し四方の國々までも亂さんとして居る。誠に恐るべきことである。能く注意して小人を遠ざくる樣にせねばならぬのである。と云ふ意で、これは周の幽王を諷刺したる詩である。○垂。誡を垂示するといふこと。○六經。詩、書禮、樂、易、春秋を六經と云ふ。この中で樂書は早く亡びて仕舞つたから今日にては易經、詩經、書經、禮記、春秋を以て五經と云ふて居る。詩經も六經の中の一であるから茲には止棘の詩が六經の中に載つて居ると書いてあるのである。○博物。事物に博く涉獵せることを云ふ。左傳の昭公元年に晉公聞子產之言曰博物君子也。とあるは「博識の學者なり」といふ意である。今日の博物學者の博物とは意味が違ふのである。○比興。詩經の詩に六義と云ふことがある。六義とは風、賦、興、比、雅

頌である。この內で風、雅、頌は詩の體であつて、賦、比、興はその辭の上に於ける法である。朱子は風雅頌を以て詩の三經とし、賦比興を以て詩の三緯なりと說いて居る。さて六義に就て聊か略說せんに風は敎也とあつて、人民を敎化せんが爲めに擧げられたる人情風俗を歌へる詩である。雅は正也とあつて、自ら正うして人をも正さんが爲めに王政の廢興する所を云へる詩である。頌は容也とあつて、先王の盛德宏業を形容歎美する所の詩である。賦は布き陳ぶるの義で、目に見、耳に聞きたる所を其儘に詠し出すものである。比は譬ふることで己れ言はんと欲して言ふに忍びざる場合などに當りて日月風雲禽獸草木の類を借り來りて之に喩へて其思ふ所を言ひあらはすものである。興は起と云ふことで、思ひ起すことなり。先づ目前に見たるものを言ひ起し、夫より引て我が思ふ所に言ひ及ぶものである。○爾（なんぢ）。蒼蠅のこと。○刺。諷刺なり。そしること。○可嫉可憎。嫉はねたむと訓みて、賢人を害する意なり。憎はにくむと訓みて、愛することの反對なり。此處にては二字の間に於ける異義を穿鑿するに及ばず。「さて〳〵にくい奴じや」と云ふほどの意であるが、此文の起頭に蒼蠅蒼蠅と重ねて言ひたる故に、此の結尾に於ても之に對照して可嫉可憎と重言したるものである。

【通解】以上は皆な蠅の害の大なるものばかりを擧げたのである。其他にもまた澤山あるけれども一々その名目を擧ぐるの遑がない。嗚呼、營營靑蠅止于棘の詩は六經の中の詩經に載せて訓誡を垂れられてあるが、之を一讀すれば、古の詩人が博識であつて、靑蠅の讒人に比べて、奸佞の小人が忠良を害し君主を欺き國家を亂ることは恰も靑蠅が器物を汚し飮食物を腐らすと同じと思を興したることの、如何にも用意の精密なることが分るのである。古人が汝を以て小人の國家を棼亂するに比べて諷刺したるは誠に尤千萬のことである。さても〳〵汝は憎みても餘りある奴じや。

唐宋文評釋畢

62
405

唐宋文評釋

丸井圭次郎述

62
405

310569－000－0

62－405

唐宋文評釈

丸井 圭次郎 述